

バ、尾張家ノ五段長屋ト、世上ニ傳唱シテ、水戸家ノ百間長屋ト共ニ、人口ニ膾炙セリ。而シテ其内部ノ殿館ニ至リテハ、外人ノ容易ニ窺知スベカラザルヲ以テ、未ダ曾テ之ヲ言フ者有ルヲ聞カザルナリ。況ヤ、其内苑ノ光景何如ニ於テヲヤ。左ニ録スル、樂々園四十八勝ハ、舊名古屋藩ノ小姓役ヲ勤メタリシ酒井荅湖ノ筆記ニ係レル由ニテ、友人芳野君世經ノ予ニ贈貽セラレタルモノナリ。

明治三十五年壬寅十一月二十日、醉園居士小澤圭次郎、小石川丸山町廿番地、僑居安々樂々窩ノ南榮ニ識ス。

樂樂園四十八勝、

- |    |     |    |      |    |     |
|----|-----|----|------|----|-----|
| 一  | 懷慰關 | 二  | 含翠原  | 三  | 奔波巒 |
| 四  | 西南臺 | 五  | 思無邪門 | 六  | 觀德場 |
| 七  | 鏡燖場 | 八  | 花迎門  | 九  | 羅梓溪 |
| 十  | 夕麗坡 | 十一 | 黃鸝岡  | 十二 | 蝸牛洞 |
| 十三 | 雖設關 | 十四 | 天極峯  | 十五 | 躑躅岡 |
| 十六 | 棣棠塙 | 十七 | 胡枝塙  | 十八 | 老龍林 |
| 十九 | 激雪榭 | 二十 | 激芳閣  | 廿一 | 護花關 |

- |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 廿二  | 舞鶴原 | 廿三  | 蒼龍溪 | 廿四  | 雪錦溪 |
| 廿五  | 八幡祠 | 廿六  | 古栢林 | 廿七  | 山茶岡 |
| 廿八  | 春雪堆 | 廿九  | 秋錦谷 | 三十  | 紫霞坂 |
| 三十一 | 結侶□ | 三十二 | 通仙橋 | 三十三 | 逐水徑 |
| 三十四 | 淡水谷 | 三十五 | 凌雲丘 | 三十六 | 解□坂 |
| 三十七 | 吟月榭 | 三十八 | 占芳門 | 三十九 | 玉照墩 |
| 四十  | 襲香門 | 四十一 | 洩春門 | 四十二 | 琴友亭 |
| 四十三 | 隣梅洞 | 四十四 | 布繡溪 | 四十五 | 玉蓮池 |
| 四十六 | 金縷渚 | 四十七 | 比高嶺 | 四十八 | 松濤□ |

以上四十有八勝。

右ハ、何公ノ時、何人ノ名附シモノニヤ、不詳ナリ。四十八景トハ、チト多ニ過ルノ感有リ。

水戸ノ後樂園、紀邸ノ西苑ノ儼存スルニ、樂々園ハ、不幸ト云フ可シ。戸山園ノ惜ム可キハ、申マデモ無シ。

市ヶ谷邸 九萬一千三百七十二坪。



先ゴロ時事新報ニ、左ノ記事アリ。

士官學校、縦覽ノ節、一老婆ノ徘徊涕泣スル者アリ、怪テ之ヲ問フ。答ヘテ曰ク、  
妾ハ、モト尾州様ノ御右筆ヲ勤メシ者ナリ、其後、静岡ニ嫁シ、數十年目ニテ、此  
處ニ來レリ、何ノ御間ハ、アノ邊カ、予カ部屋ハ、ドノ邊カト思ヒ、懷舊ノ念ニ堪  
ヘズ、云云。

小生、今此圖ヲ披キ、亦同一ノ感ナキ能ハサルナリ。呵々。

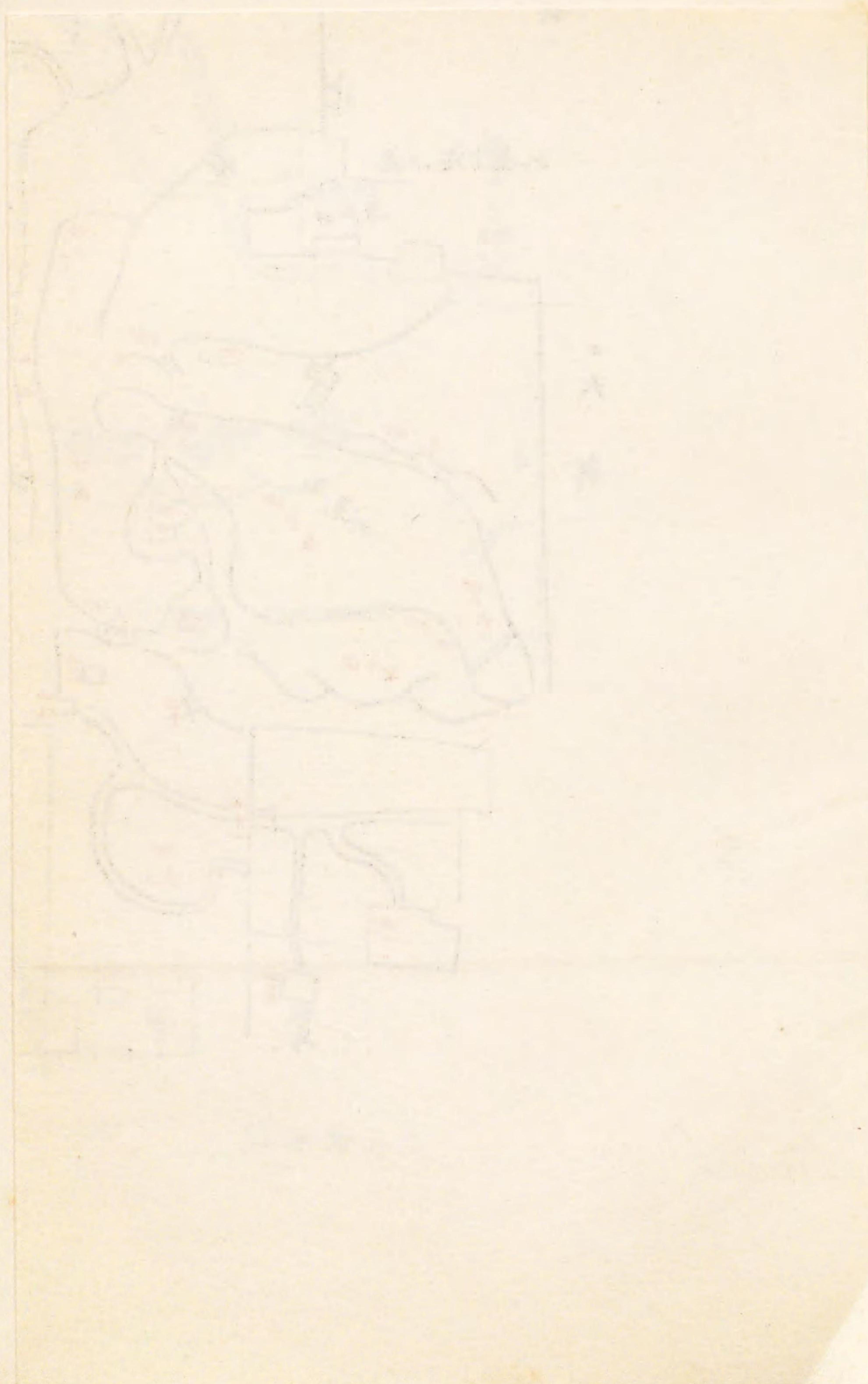
右筆者、舊名古屋藩小姓役酒井信、字ハ成之、號蓉湖、後ニ第四高等學校囑托講  
師(當時無職)

石川縣金澤市、豎町住居。

樂樂園記事斷案、

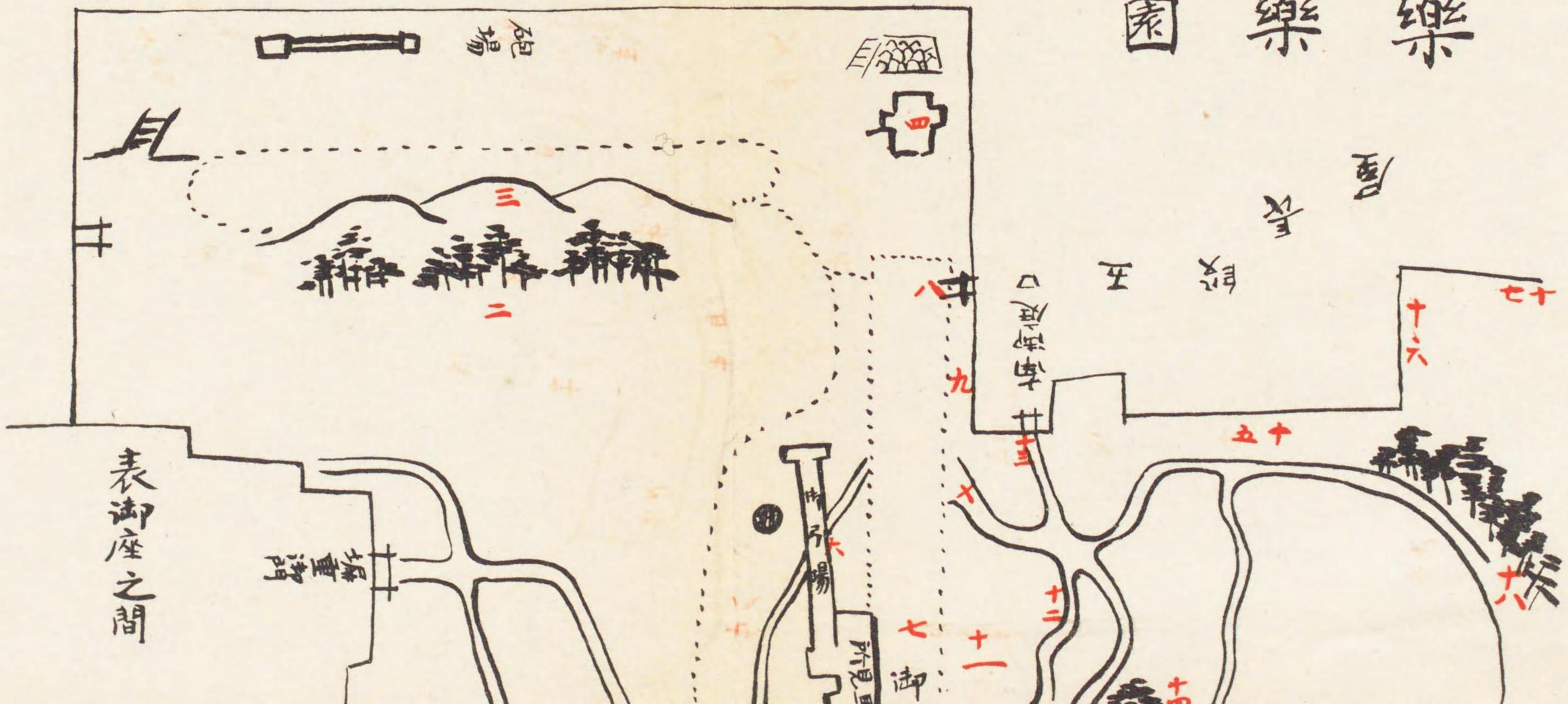
醉園居士小澤圭次郎

醉園子曰ク、前記ノ樂々園四十八勝ハ、之ヲ略圖ニ徴スルニ、敢テ多キニ過キ  
タル者ニ非サルナリ。尙此外ニ、園中ニハ、御殿ノ奥ニ接續シタル處ニ、記名ア  
リ、樓上ヲ穆如閣ト云フ。又御花壇アリ。砲場有リ。十二小祠有リ。御馬見所有リ。  
觀音堂竝ニ金毘羅祠有リ。八幡竝ニ秋葉祠有リ。凡ソ是等場所ヲ加ヘテ、雅名  
ヲ下シタランニハ、六十有餘勝ニ上ル可シ。徳川幕府ノ三宗藩中ニテ、最第一

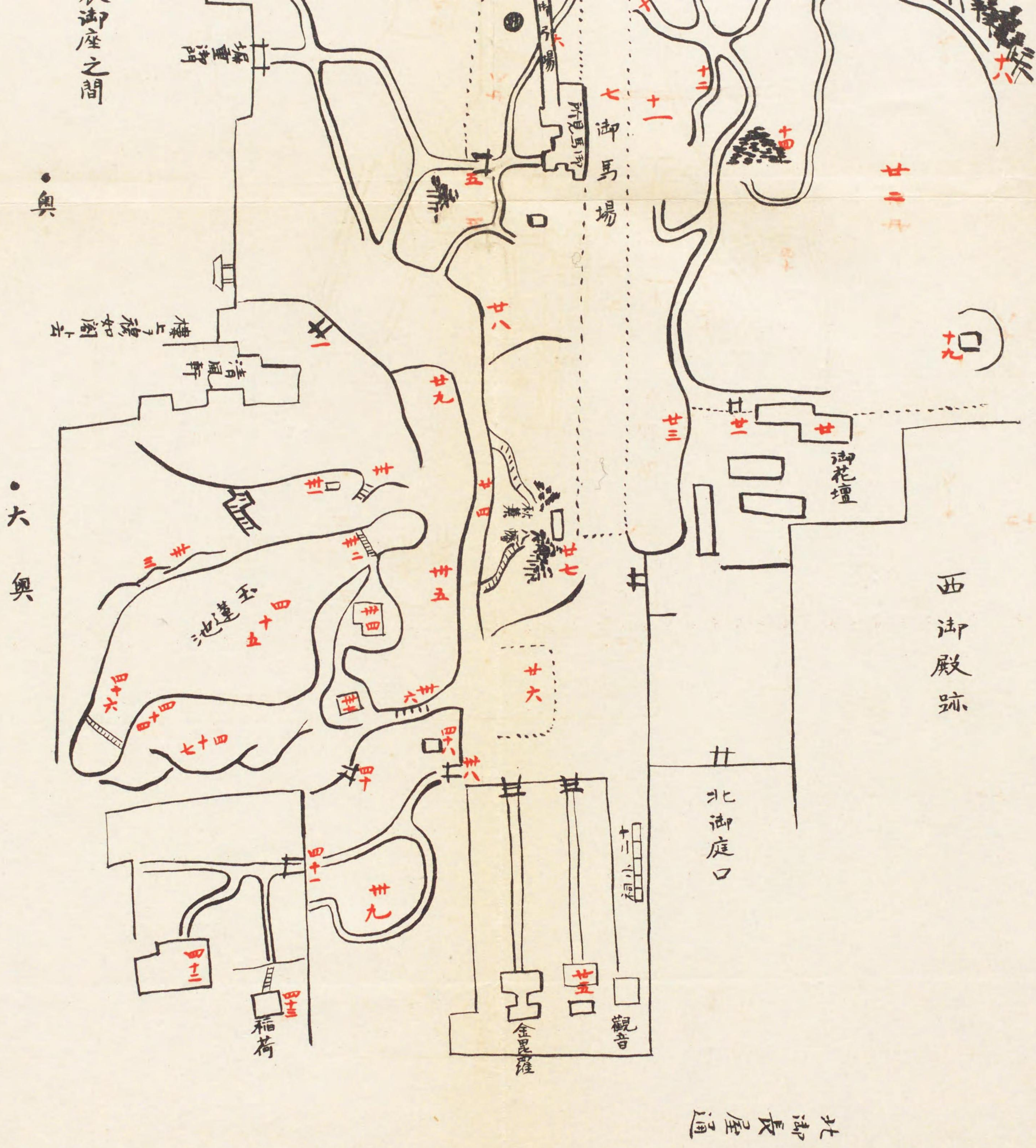




樂樂園







師(當時無職)

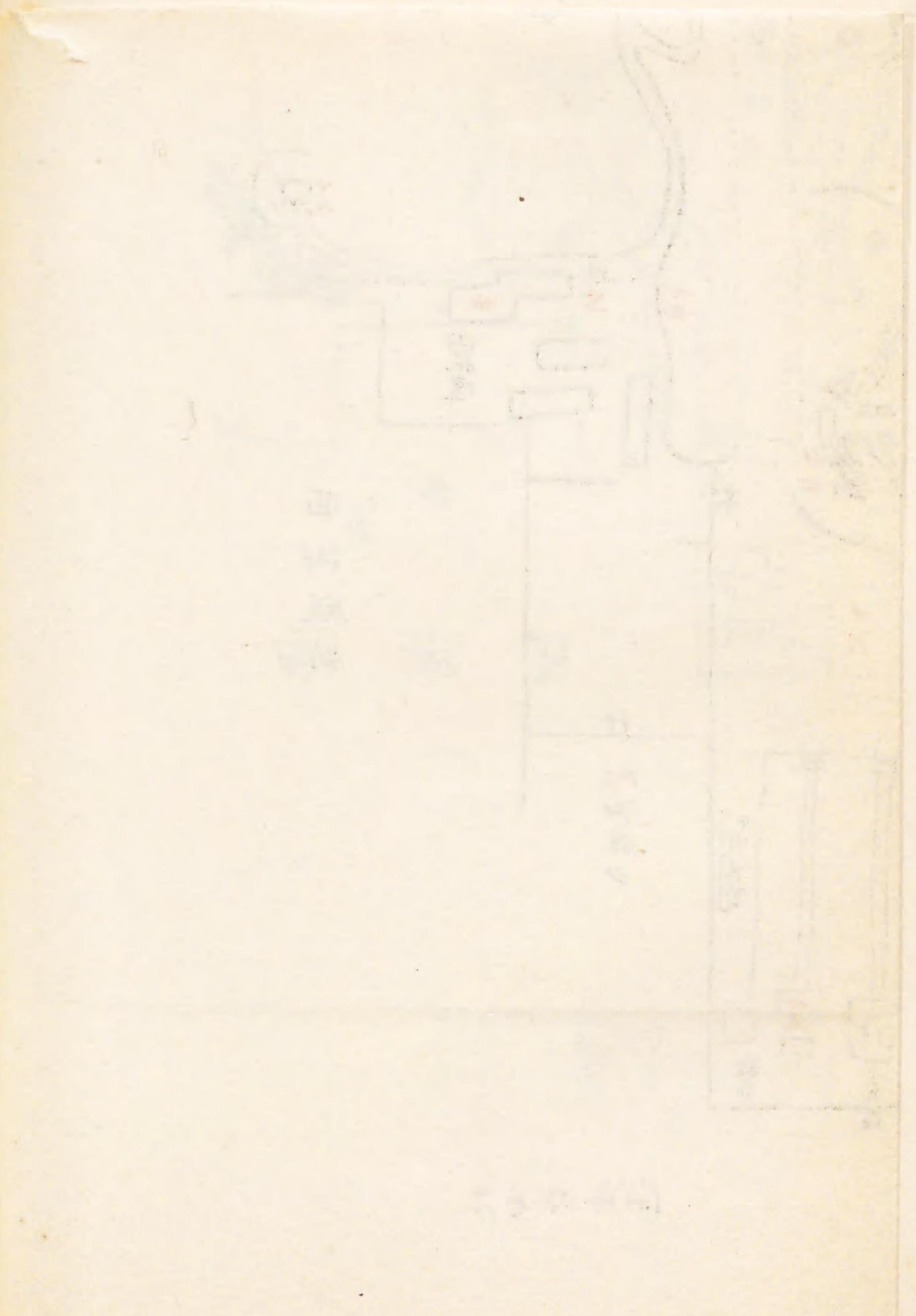
石川縣金澤市、豎町住居。

樂樂園記事斷案、

醉園居士小澤圭次郎

醉園子曰ク前記ノ樂々園四十八勝ハ之ヲ略圖ニ徴スルニ敢テ多キニ過キタル者ニ非サルナリ。尙此外ニ園中ニハ御殿ノ奥ニ接續シタル處ニ記名アリ、樓上ヲ穆如閣ト云フ。又御花壇アリ。砲場有リ。十二小祠有リ。御馬見所有リ。觀音堂竝ニ金毘羅祠有リ。八幡竝ニ秋葉祠有リ。凡ソ是等場所ヲ加ヘテ雅名ヲ下シタランニハ六十有餘勝ニ上ル可シ。徳川幕府ノ三宗藩中ニテ最第一





ノ雄藩タル尾張侯ノ居館ノ苑池ナレバ其宏麗瑰美ナリシ事追憶スルニ餘  
リアリ抑モ柳澤侯ノ六義園ニハ八十八勝アリ白河少將樂翁公ノ菴裘タル  
浴恩園ニハ五十二勝アリ飯田藩主堀侯ノ其樂園ニハ五十六勝アリ而シテ  
紀伊大納言ノ西苑ニハ七十有八勝ヲ設置セリ然レドモ其藩封タルヤ皆尾  
張侯ノ下ニ在リトス是等園池ニ比スレハ則チ尾張侯居館苑池ノ四十八勝  
ノ如キハ其景物ノ數タル敢テ多キニ過キタル者ト謂フ可ラザルナリ酒井  
蓉湖ハ未タ他侯園池ノ勝槩何如ヲ知悉セザルヲ以テ斯ノ樂樂園ノ四十有  
八勝ヲバ過多ノ如クニ感想シタルモノナル可シ蓋シ略圖ヲ披見シテ舊藩  
老婆ノ追懷ト同感有シヤ予モ亦同感ナキ能ハズ

附記  
松平氏茶  
庭

〔附記〕 松平氏茶庭

福井城主松平氏ノ茶庭諸園茶庭名跡圖會ニ見ユ龍口邸靈巖島邸等ノ内何レ  
ノ邸ニ在リタルヤ明カナラズ大火事前ト云ヘバ明曆三年前ノ者ナルコト知  
ル可シ

越前大守路地庭之事

此路欲ハ大火事以前越前之大守の路地として遠州指圖也山水の泉州堺也

霸都時代ノ遊園



大子屋宗勝茶屋長意兩人御頼ミ、別て宗勝指南也。珠慶御師山水傳受之末術あれ、本式之山水玉潤様西湖形乃やつしと見へり。池形を圓形、巴水池の格式、是本式乃庭形也。凡路地形ハ東山と此以前の圖、世まき也。その後の宗匠達ハ圖式、又御大人之路地の、其時の宗匠、いるしへ乃法を考へ、其家々の事知物馴る者共、煎じつめたる作事をあれ、勿論無疎畧也。○圖

酒井氏庭

酒井氏庭

諸國茶庭名跡圖會亦左ノ如ク傳フ。

酒井日向守能忠殿露地書院庭之事

隨庵と云し人の、利休ハ弟子也。東ニ下りて茶徳を愛し、方々大人ニ見へ、路地數多築あれし、就中酒井日向守殿江戸大火難前ニ陸奥之沖の石の圖を路地庭ニ寫す。近代替りたる圖式として、時の宗匠達を感美ありし。又書院之庭ハ、泉州堺數寄屋大工加兵衛といふもの珠慶法師ハ山水末傳習しもの也。去ハ此平庭砂庭形加兵衛作也。松竹龜鶴石、祝義、三島乃趣、奥ニ築たり。あつこうをやう見事に、取あひせさる庭圖也。○圖

一柳氏茶庭

一柳氏茶庭

一柳氏の、伊豫國西條城主、監物直興歟。

一柳氏路地圖之事

江戸大火難以前之路地之圖也。東三河乃隱士林意安といふ人の、林狼之助孫也。在洛せし時分の、茶道修行心を染、本より遠州をさしひて其道淺詳よし、茶徳を樂む也。一柳氏所望ニほりせ、此路地書院前の庭迄築く。珍敷路地あり。殊ニ路地門ニ二玉石ニ相生の松を取合たは作意、より尋あらず。手水鉢ハ棒先といふ形あり。根本茶入名物ニ棒先と云か、有。その格を以て手水鉢も名付あり。則東山時代ニ棒先といふ手水鉢の名石を有。其式法にて物を鉢也。平庭南天若松植込、手水所ハあいしらい、飛石の働、別而勝て見事あり。

回向院起立

三年丁酉二〇明曆〇紀元二七一七年。二月、牛島新田〇市内本所區。ニ方五十間ノ地ヲ賜

ヒ、正月十八日辛酉七〇明曆三年紀元二三二一年。十九日壬戌三〇明曆三年紀元二三二一年。

是也。武藏府内備考。ノ大火ニ燒死シタル者ヲ埋メ、寺ヲ建ツ。國豊山回向院

回向院起立事蹟

回向院起立

變災篇市街篇等ニ記セバ、左ニ一二書ヲ抄ス。



略。上 火は忍あれ煙はむせひ、あそこ爰の堀溝は百人貳百人あつゝ、死ぬを  
 れてあしといふ所も取し。火はほまりてのちつふさよあるし付たれ、をよそ  
 十萬二千百餘人とぞりきたりたる。一類々んそく此あるもの、尋ねもとめて  
 寺よをくりしもあり。大かたもいあ取る人、いつ々のものともたしあならそ、り  
 せりはてあるありさほ、それとささかにある事取し。忍りて此あいを河原  
 のものよ仰付られ、むさしとあもふさとのきりひある牛島といふ所よ舟よて  
 はこひつあひし、六十間四方よりうつみ、あさらしく塚をほき、増上寺より寺  
 をたて、すあまち諸宗山無縁寺回向院と號し、五七日より前よ諸寺の僧衆あつ  
 まり、千部の經を讀誦して跡をとふらひ、不斷念佛の道場となされたるを有  
 りとされ。江戸中の老若男女袖をつらねて參詣、念佛申してゑあうるをそあ  
 うとされ。

芝増上寺末

國豊山無縁寺回向院

本所

武藏鐙

境内拜領地五千百十一坪餘。

起立之義、明曆三丁酉年正月十八日十九日大火災之砌、貴賤男女火よ嬰て  
 焦死し或は火を避る者の河の中よ没し、燒亡溺死其數をあつた。同廿一日大雪烈

風凍餒として死者又多し。廿四日増上寺御定例之御成、依之御延引、會津少將正  
 之公御代參之歸路、周横之屍骸御覽ありて、公卿方御相議之上、御奏達ニ及まれ、  
 忝し本所牛島新田に五拾間四方之地曠を被下、右死亡之累骸を集めて、此處  
 へ埋葬せり、皆焦爛して貴賤の分なく、凡十萬八千餘人。依て安藤右京進殿、松  
 平出雲守殿を以て幽冥之遺魂を救ぬるの旨、増上寺遵譽上人被蒙仁命、上人  
 則一山之大衆を將て追善の法要を修行す。重て上意よ依て貳間ニ三間の念佛  
 堂并貳間四方之庫裏を假屋とし、創建被成下、常念佛勤行可仕旨被仰渡。依之遵  
 譽上人國豊山回向院と號し、小石川智光寺二世現住信譽貞存を撰て當院よ移  
 住せしむ。已後追々堂宇建立、不斷念佛の道場となり、今年迄十六代法類相續仕  
 候。明曆三百年二月五十間四方敷地拜領、同年八月本所御材木藏地御定之節、御  
 老中寺社御奉行様方、寺外御廻、境内間狹之義御覽之上、安藤右京進殿御宅ニあ  
 東西十間之増地拜領仕、其後寛文元丑六月御鷹野還御之砌、上覽、同十四日御評  
 定所ニあ、井上河内守殿上意を以亦々十間増地拜領被仰渡、則七拾間拜領地ト  
 相定。○下

續府内備考

移 兩本願寺轉

五月四日丙午

○明曆三年(紀元二三一七年)○丙午(三正綜覽)

神田東本願寺

○市内

ヲ淺草

市○



淺草區。二、濱町西本願寺○市内日ヲ木挽町築地○市内ニ移ス。○柳營。日次記。東京

兩本願寺轉  
移事蹟

兩本願寺轉移 明曆三年正月ノ大火ニ燒失シタル東西本願寺ハ、何レモ替地ヲ賜フテ轉移ス。顛末市街篇ニ具記ス。

○明曆三年五月四日青。

一、

東本願寺光英

爲代地三十三間堂之外東之方芝地ニ而百間四方被下之。

爲代八町堀今度築地之外海ニ而南之方百間四方、

右二ヶ所之内ニ而、東本願寺望次第可遣旨。

一、

西本願寺光圓

只今迄之寺地御用ニ付、八丁堀今度築地之餘海ニ而百間四方被下之。

——柳營日記

本願寺別院

淺草區淺草松清町ニアリ。域内三千貳百六拾九坪。眞宗京都東本願寺ノ別院ニシテ、懸所ト稱ス。天正十九年辛卯徳川氏寺地若干ヲ筋違門外後加賀地。ニ賜

ヒ、本願寺拾貳世光壽如教始テ一字ヲ創シ、慶長十四年己酉神田明神下ニ移リ、明曆三年丁酉災ニ罹リ、五月四日三拾三間堂脇ニ於テ百間四方ノ地ヲ賜フ。明曆三年即今ノ地ナリ。○下年錄。

本願寺別院

京橋區築地三町目ニアリ。域内千三百三拾八坪。眞宗京都西本願寺別院タリ。懸所ト稱ス。元和七年辛酉三月本願寺第十二世僧光昭如准。淺草濱町今ノ日本橋區橋町邊ニ創建シ、明曆三年丁酉正月十八日火災ニ罹リ、五月四日木挽町築地ニ於テ百間四方ノ地ヲ賜フ。明曆三年錄。六月八町堀海灣沮洳ノ地ヲ請テ之ヲ填築スル。凡壹萬坪、以テ堂宇ヲ營シ、萬治元年戊戌五月廿七日ヲ以テ成ル。即今ノ地ナリ。堂宇穹窿、諸寺ニ冠タリ。○中略。俗築地西門跡ト稱ス。子院五拾七宇アリ。

——東京通志

松平氏淺草  
別業

是年○明曆三年紀元二三一七年。福地山○丹波國城主松平忠房○主殿領。別業ヲ淺草○市内淺草區ニ賜フ。乃チ園林ヲ築ク。○寛政呈譜。梅洞林先生詩續集。行餘雕蟲集。鳳岡林先生全集。

松平氏淺草  
別業事蹟

松平氏淺草別業 寛政呈譜ニ、

霸都時代ノ遊園



忠房從五位下。主殿頭。叙四品。後大炊頭。初五郎八。

同曆。明三丁酉年不知月日。居屋敷山王宮地。相成候付於常盤橋屋敷被下置。又於淺

草深川二ヶ所屋敷被下置。爲作事料。白銀七萬兩。拜領仕候。略。中

同文。寬七丁未年八月廿八日。常盤橋淺草兩屋敷御用ニ付差上。略。下

ト見ユ。其庭園有リタルコトハ、

小巖島源尙舍忠房淺草別業十境之内

叢祠經營孤島中。試窺雲廊水底現。心足何論小大殊。一樣神風市杵媛。

寸松亭

誰開心地屢培栽。唯向水亭靜撫愛。青青一寸雖清癯。亭亭百尺不勞待。寬文二年

——梅洞林先生詩續集

遊源尙舍忠房淺草別莊

鶯花助雅遊。鳧藻得往遇。浴羅振春衣。水樓風向暮。

遊源尙舍君忠房淺草別莊。席上和主人倭歌尾字。

境佳日暖靜簾櫳。占得寬閑五百弓。舟入菰蒲深處去。殘花香遠一帆風。

——行餘雕蟲集春信

源忠房君淺草別莊園池卽景

林苑寬閑地。雅遊吟步遲。丁橋橫獨木。乙字製清池。遶嶋斜陽遠。穿波孤棹移。依然浴

沂趣。春服任風吹。

——鳳岡林先生全集

梅洞林先生詩續集又左ノ詩有リ。恐ラクハ同ジ淺草邸ニ於テシタル者ナル可シ。

九月十四日赴松忠房君館賦庭池鳧鳴。

鳧鳴成群爽籟吹。啄苔唼藻入庭池。池邊誰製王喬舄。沙丘吟看杜老詩。萬治元年

四年戊戌明曆四年七月廿三日改元。二月廿八日乙未乙未三。阿濃津伊

城主藤堂高次學頭大。下屋敷ヲ染井武藏國北豐島郡。ニ賜フ。園林ノ設有

リ。伯爵藤堂家回答。虎丘堂集書。

染井藤堂邸 相傳フ、

下屋敷

一、染井屋敷受領 明曆四年二月廿八日

——伯爵藤堂家回答

染井藤堂家之造庭

天保十三寅年十月廿日染井比藤堂家の庭を見ヨ行ヨリ。此屋敷ハ往昔上野の

霸都時代ノ遊園



替地なりと世人のいふ所なれの其事を問しよむりし上野の黒門より御宮の邊迄屋敷まで其替地を賜りし事と答た。坪敷を尋ましよ、八萬坪ありと。其内半過の抱地ニある年貢出るよし。以前の今の薬園の地もを抱地なりしよ、其後薬園となりたりと語りき。庭の元祖の高虎の好ニはなく、二代目三代目明暦の頃作りしものと答ふ。先ツ庭門を入り、西を南へ大道あり。道巾拾間もあらん。大木夥敷。右之方ニ鬼形のいよきし大サ八尺もあらん石燈籠あり。其次は朝鮮分捕の唐銅の水盤あり。差渡し九尺余もあり。銅の厚サ六寸程まで。壹枚の大角石を臺とに。水盤中よ嶋の如き石あり。手水前の様子の石ともあり。是より飛石をすへたり。何れも大石ニある。根府川石多く、又伊豆石の角七八尺のもの交れり。此飛石貳町程もあるへし。飛石の行末九き芝間まで止れり。右水盤の少し先キ左之方立木の間に、高サ壹丈餘の石地藏の立像あり。四五間ありて又同じ立像あり。此大道より左りの細道三十間程行、石碑あり。斷碑ニある讀に、當寺といふ字六丑二月日と言字見へたり。此邊目の及ふ限り熊笹なぞ。元の道へ戻り、石の力士あり。鬼形のおとく高サ三四尺の物まで、不思議の形ちなぞ。其先キニ石の姥珠數をもち帽子を冠れるあり。又丈余の石の不動、右の方より同丈余の張泉郎

立てり。左りの方小道へかゝる所よ、獅子ニ乗るる觀音のおとき石像あり。惣ろ形チ異狀ニある。今時宮寺よあるものとの違へり。右ニ石燈籠棹石よ龍のかゝみするあり。左リニ石の役ノの行者有。山の中ぶくは辨天の社あり。かゝらよ二丈もある石の十二重の塔あり。泉水よ庵梁橋の掛りするに、此辨天へ向けてり。れりと見ゆ。右ニ石のくりから龍あり。それより山上ニ九尺余の大平石、色薄青く見ゆ。此所より池の方を望む。あら堀ニ而、底よ水見へたり。北之方向ふの岸を望め、古楓古松の大木夥敷。紅の夕日をいさよふ。庭中貳萬坪もあるよし。左もあるへし。少し下りて神明の宮あり。左右ニ石の大黒石ひすあり。石燈籠もあり。石の切籠のおとけ燈籠三重なるあり。其山を下りて石の香爐獅子の手水鉢あり。此ふと貳三人ならていとれれと見ゆ。石の布袋あり。何れも古ひ苔むしり。池を北の方へ廻り、大きな茶亭あり。前よ朝鮮より分捕の硯屏あり。銅色見及ばぬもの也。西瓜銅と語りき。銅色西瓜の色。なぞ。臺石とも高サ五尺位あり。正面岩よ仙人様の彫あり。上の方ニ柏の如き木あり。左右よ鶴一羽つゝあり。裏の方の無地なり。其廻りニ石色々あり。奇石の見へに。其茶亭の臺所口の所ニ竈あり。其脇ニ木像の婆々に子とも三人あり。其老婆容貌凄く、名作なるへし。大キサ十四五の少女のくらしい。童子



三人の同作との思われに。此婆々の姉川合戦の節高虎糧を乞われしよ、角盆よ丸餅を載て参らさりと。其時格別の戦功あられしりの、忘れしとて其婆々の肖像を置れさるよし。されの今は藤堂家の合印角の中よ丸を用ひられるよし。夫より馬見所の茶屋あり。馬場長サ百間余もあるへし。此馬場庭の山下を續き、馬場と見へにしてよた馬場之。馬見所も茶亭の作りニある。馬見所なり。左右不殘琉球つゝしりり込ニある。花の比の見事なるへし。馬場を行盡し右へ曲り、左右皆霧嶋の花壇あり。左之方の長三四十間ニ巾十間程もあり。右之方の七間よ百間もあるへし。影敷霧嶋之。其西北之方生垣様の圍ひありて本亭なり。その霧嶋の花壇の向ふよ大黒の木像を中央よ置さる茶亭あり。大黒堂のまとし。其つゝき百色の紅葉の壇あり。それより八幡の宮あり。此宮拜殿本社あり。石の鳥居前石の十三重の塔あり。鳥居の柱よ水入を堀さり。細長き手水鉢あり。下よ文字あれとも不讀。石の鳥居より拜殿迄高サ五尺又ハ六尺餘の石燈籠十六基あり。いづれも形チ替り、古雅成ル形もあり。内ニ千代能姉の火袋を捧げさるあり。拜殿を本社迄石燈籠十基あり。本社を左右よ唐るの獅子あり。雨さらし之。夫よりもとの砌りへ出、鹿朶橋を右よ見て、紅葉の下へ出つ。惣る庭中不殘大木ニある。往來

も大道ニある尋常の庭との思われに、まふとに武氣を帶さる庭よて、佗ヒ少ナク、勇氣のある庭と見たり。下草のみを熊笹ニある、兎狐住よし。大木の楓樹も中々海晏寺などの及ふ所よあらに。のこらに見巡り草臥さる程の事なり。いさゝか貳百年よの不滿庭と覺ゆ。凡元祿年間の造庭よて、後世好を交へさるものと見ゆ。只々水盤、硯屏婆々の木像此三品絶世の珍品なり。此庭よ泉水ならましかまと思ひる。

舊事よ心染井の夕紅葉かゝる錦を見るそたのしき — 虎丘堂集書

靈巖寺其他  
轉移

三月十八日乙卯 ○明曆四年(紀元二二二一) 八年 ○乙卯(三正綜覽) 靈巖寺深川 ○市内 深川區ニ移ル。此前後明曆三年丁酉 ○紀元二二一七年ノ災ニ罹リタル寺院ニシテ轉移シタル者少ナカラズ。 ○市街 篇参照

靈巖寺其他  
轉移事蹟

靈巖寺其他轉移 明曆三年ノ災ニ罹リタル寺院中、靈巖寺ヲ初トシ、是ノ前後ニ轉移シタル者少ナカラズ。 ○市街 篇参照

増上寺支配  
道本山東海院靈巖寺

深川(○中略)

略。上 第二世珂山和尚之代ニありて、明曆三四年正月十八日十九日兩日御府

新都時代ノ遊園

三五三



内之大火ニ類焼を。仍て万治元戊年三月十八日深川に替地拜領を。是又海濱なり。珂山之弟子珂碩を命じて築し、堂宇再建を。今此寺なり。○下略。

——續府内備考

靈巖寺境内拜領地三萬千。入堀大工町。の南よりて、表門の大工町比大路より向へり。○中略。寺記云、明曆三年正月十八日比火災よか、○中略。境内地を拂つて焼失せしかば、明る萬治元年二年の誤。三月十八日、今の深川の地へ移されしと。萬治記云、二年己亥八月三日月日寺記と同じからず、何事の詳細を詳しませぬ。靈巖寺をもて公用の地と爲。和尚自ら此力をもて築し處を、公を寺領五十石を寄附をくれ、御朱印をも賜へり、寺地を西南東南の誤。葛西より移さると。江戸砂子云、二世松蓮社大譽上人珂山和尚按よ二世ハ雄蓮社正譽上人意天和尙の代より、明曆三年正月十八日比回祿の後、この地より移さる。こまま海濱あり。珂山比門人大蓮社珂碩和尚を命じて、境内を築あしむと。○中略。

別院三。

雄松院、長專院、濟生院。

塔頭八。

正覺院、安養院、榮壽院、淨閑院、開善院、松林院、深照院、成等院。

道心者菴八。

廣閑院、濟乘院、靈光菴、見松菴、潮江菴、吟松菴、清澄菴、臨海菴。○中略。

學寮五十九。按よ江戸鹿子及江戸童よ所化寮七十五軒とあるを。十六軒の後よ廢せしな○下略。

——葛西志

此外明曆火災ノ爲メ轉移シタル寺院ニハ、五臺山文殊院、源空寺、湯島ヨリ淺草ニ、神田山新知恩寺、幡隨院、萬治二年下谷池ノ端ヨリ淺草ニ、大雄山海禪寺、湯島妻戀ヨリ淺草ニ、田島山快樂院、誓願寺、神田須田町ヨリ淺草ニ移ル。事市街篇ニ記セバ、今皆略ス。

五月

○明曆四年(紀元二三一八年)

若松

○岩代國

城主保科正之

○肥後守

三田

○市内芝區

二別墅

ノ地ヲ賜フ。正之○保科乃チ庭園ヲ築造シ、號シテ箕田園ト曰フ。

○鷲峯先生林學士文集。武江年表。

箕田園築造事蹟

箕田園築造

箕田園ハ會津侯保科正之ノ下邸也。明曆四年賜フ所、寛文五年正之移テ之ニ居ル。庭園ノ築造、此間ニ在ラム歟。

霸都時代ノ遊園



正之正四位下中將肥後守幼名幸松

一萬治戊戌五月十五日於荏原郡三田下屋敷拜領被仰付候。——寛政呈譜

夏元萬治年。三田の地は會津侯正之保科御別莊の地を給まる。此地の渡邊綱の老期

に住し舊跡なり。則網塚と稱るも在て、松樹を植て遺蹤を標せり。寛文十二年夏弘文院林恕之

箕田園の記を作らる。

——武江年表

箕田園記

夫佳境亦難得。人其最難得。境與人相得。而二難并矣。武州荏原郡澁谷莊箕田邑者、傳稱源繩避御諱而假改用繩字也。陳迹也。按譜圖曰。嗟峨帝之曾孫從五品俊任或作任武藏守。其子曰充俗作宛。留爲州士住箕田。騎射絕倫。以勇敢聞於東方。繩者其子也。以邑辨其名。稱箕田源二。既長入洛。養於仁明皇胤源敦。敦妻者源滿仲娘也。滿仲嫡男攝津守賴光。爲王城宿衛之師。源二以外族之親。故屬賴光。其武名藉甚。所謂當時四勇士之最也。或掃羅城門之妖氣。或射市原野之狡童。或斬大江山之酒顛之類。載在口碑。應撰列內舍人。而候禁廷。子孫繁多。筑紫之松浦。攝州之渡邊等。是也。退老歸鄉。終於箕田。爾來六百餘年。其塚猶存。栽松封之。以標遺蹤。乃是壯氣未散。千歲有餘情者乎。方今江城爲麾下之天府。而列國侯伯會同。箕田在城之坤維。而與馬絡繹。皆知其爲佳境。

然未得其人。逮明曆四年戊戌之夏。官命賜此地於會津羽林源公正之保科。以爲別莊暇休之所。寛文五年乙巳三月公讓志波高第市內芝區。於其家督拾遺君平松。而移居於此。九年己酉四月恩許致仕。以願精神也。公素以振振之顯族。且有孜孜之勤勞。外受藩封。而民懷其惠。內參國政。而衆皆依賴。然以七齒稍不安故。齡未及懸車。而有告老之請。雖不慊於心。蓋不得已乎。公平生好學。潛心道理。況今於閑燕安居。其工夫彌加其精密。有得多多益辨哉。於是佳境得人。而全備焉。夫以乃文乃武。振古竝行。故雖止戈之世。亦不可忘武。則公之得此地。猶存源二之塚。蓋取其勇。尙古士之義乎。是亦學力之一端乎。源二若有靈。則與后士之神。爲鎮護之助。保佑公之子孫乎。頃間僕幸携賤息辱嘉招。與二客陪高堂。聽道義之談。有所新得。漫忘鄙劣。不覺進膝。消夏日之長。猶惜夕照之斜。加旗伴二客遊歷園中。以娛視聽。登覽水亭。而窮眺望。時維驟雨晴。颯風來。綠樹圍翠。密清幽徑。通而塵埃絕矣。公亦來臨。觴詠坐闌。近而箕田川之漾漾。不舍晝夜。仲尼所指見。可以省察焉。遠而富士山之巖巖。獨秀群峰。孟子之氣象。可以相像焉。顧淺生之岡。則侯伯樓閣。羣飛鳥革者。一統之化。徧被四方也。指隣村之畦。則鋤耨銍艾者。比屋之民。皆有恒產也。仰神明之社。則感我邦風儀之所由也。瞻御藥之圃。則喜官家仁惠之無遺也。其餘勝景。不可枚舉也。客曰。園中多境。皆無不佳。請試名之。



而可乎哉。僕憚公之謂何，而不肯諾。客又與公之家臣共勸而止。僕不能固拒，而謂然則私先名之，其取舍任盛慮而已。嗚呼，源二之勇冠於群士，猶松之長於衆木。源二者古之人也。今不可得而見之矣。得見松斯可矣。乃名塚上所栽，曰懷古松。竊倣懷諸葛稱懷賢之例，是爲第一境。其松畔有池，上弦之娥影移，映殊奇者，名曰半月池。聊寓小明漸漸至大圓之意，暗合學業不安小成，而期積成之義，是爲第二境。又有涌泉，其水源源，大旱不乾，舊稱鏡池者，名曰虛靈沼。譬諸方寸寶鑑，本然不昧，物來照應，是爲第三境。又有一潭，群魚游躍者，名活潑淵。取諸中庸引詩之意，而併觀衆禽飛翔，以悟上下察之理，是爲第四境。又有梁斜架，八級者，名八曲橋。乃假參州所在之舊間，在中將之風流，而武夷之曲滅其一，而相似者乎。是爲第五境。又一亭之下澁，水植蓮者，名移濂亭。而慕茂叔之遺愛，庶幾君子之花，是爲第六境。使賤息各題詩，既而公亦聞而領焉。退而再思之，則園中之物色，豈翅是而已哉。四時之代，花木一開而榮，一凋而落矣。其開榮也，乾元資始，品物流形，陽氣之亨也。其凋落也，乾道變化，保合太和，乃利貞也。陰陽循環，終而復始，生生不息之妙，所謂誠者天之道也，誠之者人之道也。至若其大而風雲之變態，小而鳥蟲之鳴蟄，亦各無不有道理。程子曰：萬物靜觀，皆自得。由是觀之，則園中之廣，猶可爲小。語宇宙之大，亦一理以貫之。此是公之所能識得也。何待

吾言哉。寬文十二年壬子孟夏中旬，弘文學士院林恕之道謹記。

—— 鷺峯先生林學士文集

移濂亭 會津城主羽林源君  
箕田莊六境之一。

移得濂溪君子堂。池蓮亭立認遺芳。新莖猶保中通操。圓葉宜含大極相。曾出淤泥不  
同調。巧籠雲靄似成章。香風若有問花客。分與岩頭霽月光。

會津中將箕田幽莊即景

松竹護園皆自得。高林夏淺剩春情。花房含露濯紅玉。藤架飄風垂紫纓。鳥散鳥啼知  
動靜。雲來雲去辨陰晴。請看艸木生成妙。外發英華內抱誠。

八曲橋 會津城主羽林源君  
箕田莊六境之一。

八橋斜且脩。橫臥枕清流。有五遺歌在。尋芳杜若洲。—— 鳳岡林先生全集

萬治二年己亥 三〇紀元二  
三一九年。 四月廿九日己未 正〇己未、三  
正綜覽。 日吉山王社、溜

池丘上 〇市内  
麴町區。 二移ル。 〇萬治錄。萬年記。玉露叢。武江年表。  
江戶鹿子。江戶惣鹿子。改選江戶志。

山王社轉移 永田馬場松平忠房邸ヲ移シテ、山王社地ト爲ス。

四月廿九日 〇萬治  
二年。 今酉刻、山王遷宮。五時爲御名代板倉阿波守社參、神馬并重家

霸都時代ノ遊園

山王社轉移  
事蹟

山王社轉移



御太刀献之。

——萬治錄

四月廿五日<sup>二</sup>○萬治<sup>一</sup>江戸郭内日吉山王社去丁酉<sup>三</sup>○明曆<sup>一</sup>罹火災依之移彼社於松平主殿頭忠房之元宅地以再建之今日上棟木原内匠役焉賜太刀<sup>備前</sup>盛光<sup>馬</sup>置<sup>久世</sup>大和守廣之板倉阿波守重郷并造社使横山内記板倉甚太郎候焉。

廿六日<sup>一</sup>○萬治<sup>二</sup>巳刻修安鎮法未刻布薩戒酉刻假遷宮。

廿九日<sup>一</sup>○萬治<sup>二</sup>正遷宮晦日有法會。

——萬年記

一、同年<sup>三</sup>○明曆<sup>一</sup>山の手の山王社類火ニ依て其後社頭を溜池の上松平主殿頭忠房の屋敷を明させ給ひ新ニ堂社を御造立有て神輿を移し奉る。

——玉露叢

星野山 永田馬場山王權現乃山なり昔ハ松平主殿頭乃屋敷にして有しに去明曆丁酉の火災よりして此山ニ山王をうつし侍る也。

——江戸鹿子<sup>〇貞享四年</sup>

山王大權現 叡山第二世此座主慈覺大師の開基あり<sup>〇中</sup>後土御門院延徳年中三所乃御社を山の手此御城の西ニ移し給ひて再興修造ありし<sup>一</sup>明曆丁酉回祿ニかゝりてより今の溜池乃上松平主殿頭殿<sup>〇忠</sup>御屋敷ありしを鈞命を

蒙て此所ニ移し奉る宮柱ぎ々として神光をいやまし杉柏鬱々として利益あふたふまひ日々に繁榮日々ニ昌盛し石の鳥居石の坂數五十三釜ん誠り嚴重なり神事ハ六月十五日にておよそ御城の大祭としずおろる取々にもてはやし給ふ事々大造の神事ままの回祿已後の隔年ニ執行せらる別當ハ天台の觀理院神主は日吉大膳あり<sup>〇中</sup>——江戸惣鹿子  
蜂須賀家譜ニ萬治元戊戌年四月山王社御移替ノ節飛彈守隆重<sup>〇蜂</sup>須賀<sup>〇櫻樹</sup>ヲ献納スト云。——改選江戸志

四月廿一日<sup>二</sup>○萬治<sup>一</sup>永田馬場山王權現社今の地へ御造營今日御迂宮あり<sup>〇舊</sup>堀端よして彦根侯の御屋敷より道を阻て北ニ在し<sup>〇社</sup>地狭く<sup>〇火災</sup>の時類焼の患ある<sup>〇故</sup>當時の所松平主殿頭殿御屋敷にてありしを災後社地とハふし給へり。

——武江年表

〔附記〕 神田社八景

正敦標出神田八景而請作之詩余初不肯領馬屢請而不得已於是聊如左。

金城初瞰

海日既從殘夜生曙雲開後照金城城頭赫赫一輪影不識誰存葵藿誠。



神祠茂林

松栢陰森閱幾年。古祠來去袂相連。枝枝葉葉神風起。黛色參天階砌前。

士峯晴雪

士峯聳日擢層根。徐福停舟跡久存。十有五州天網裏。鵝毛千里白鵬翻。

箱根白雲

靜如太古一孱顏。鋸齒羊腸不可攀。應是山靈粧翠黛。晴嵐淡掃白雲鬢。

野外脫煙

曜雲漸既薄。廣淵平野渺茫幽。景鮮滿目不遮千里。翠煙一片草連天。

橋下淺水

靜弄潺湲吟杖挑。清風乍起度長橋。水頭黓黓虹斜臥。波面洋洋魚自跳。

前池宿鷺

一行白鷺乍來如。棲宿池邊自擇居。縱是前身雖釣叟。聯奉眠熟不窺魚。

遠寺疎鐘

野衲頽然寄此生。招提境靜吼華鯨。一場幽夢乍驚破。雲外遙傳百八聲。○萬治二年。

——梅洞林先生詩續集

大塚占春園

是年○萬治二年(紀元二三一九年)水戶○常陸國城主德川賴房○中納言ノ四子松平賴元

邸地ヲ大塚吹上○石川區小ニ賜ヒテ之ニ移ル。邸ニ園池有

リ、占春園ト號ス。○南郭先生文集。占春園碑。子爵松平賴元談。

大塚占春園事蹟

大塚占春園

大塚吹上ノ舊守山藩○後松藩邸ノ地、今東京高等師範學校ニ屬ス。萬

治二年ヲ以テ賜フ所、園林有リ、造築ノ時月ヲ知ラザレドモ、現ニ陵池ノ殘存ヲ見

往年ヲ懷ブニ足ル。舊同藩主松平賴元嘗テ語ルラク、藩祖松平賴元、寛永ノ頃ハ、宗

家水戸邸ニ同居セシモ、正保中今ノ本郷眞砂町ニ邸地ヲ賜ヒ、萬治二年大塚吹上

ニ轉移シタリ。同所ハ上中兩邸有リ、漸次増地シテ六萬二千坪餘ト爲ル。邸ニ占春

園有リ、現ニ東京高等師範學校内碑石ヲ存ス。園内觀濤閣ハ、品川沖ヲ遠望シ得ル

ヨリノ名ナラム歟。荻生徂徠服部南郭平野金華等屢同閣ニ會シ、有名ナル論語徵

集覽ノ如キ、同閣内ニ於テ成リシミニナリト云フ。其他歷朝諸纂大三川志等百四十

種許同閣ニ在リテ成ル。邸内松檜等ノ深林有リ、極メテ幽邃ノ境ニシテ、杜鵑ナド

巢ヲ作レリ。府内ニ於テ杜鵑ノ巢ヲ營ムヲ以テ名高キ者、矢來ノ酒井邸ト同邸ノ

ミナリシト傳フ。又邸内ノ池沼ニハ冬春ノ候鴨ノ青頸聚リ、青山ノ池田邸、溜池ノ



黒田邸ト并稱セラレ、殊ニ同所ヲ著名トシタリ。崖地ハ廻リ一尺六七寸モ有ル竹叢生シ、鴨ト共ニ相當ノ所得有リテ、藩主ノ手許費用ニ供シタリキ。ト。

守山侯占春園花飲園有羸駒樹。

占春園裏擁樓臺、清酒芳筵留客杯。今夕逍遙繫駒樹、何人不醉背花回。

——南郭先生文集

春□碑

我公○松平之園名占春。其中所觀、綠櫻桃李、林鳥池魚、綠竹丹楓、秋月冬雪、凡四時之景、莫不有焉。而以占春者何也。園舊有古櫻樹、蔽芾數丈、春花可愛、叟蔭可憇。先君恭公○松平之少壯也、馳馬試劍、每繫靶於此樹而憇焉。因名云駒繫。至莊公○松平之幼也、猶乃視之。於是暮年花下開宴、每會子弟、必指樹稱慕焉。我公○松平追慕眷戀、專心所留、遂繞此樹、增植櫻數百株。花時會賓友、鼓瑟吹笙、式燕以敖。旨酒欣欣、燔炙芬芬、設核維旅、羽觴無算、豈營四美具乎哉。物其多矣、維其嘉矣、偕謠既醉之章、且獻南山之壽。我公稱觴顧命、臣宜汎曰、彼瞻匪亦所爲、後世子孫、徒爲遊樂之場、是懼焉。子爲余書于石。宜汎擇稽首曰、桑梓有敬、燕胥思危、誦美有辭、陳信無愧、謹壽斯石、萬有千載、本支百世、永承景福之賜。

皆□□春三月

岡田宜汎撰

宇留野震謹撰

——占春園碑

附記 永井氏別莊

〔附記〕 永井氏別莊

伊賀守永井尙庸別莊ハ、濱町下屋敷ナル可シ。新添江戸圖、永井信濃○尙政尙庸父。ト有ル者、寛文江戸圖、永井イガト爲ス者是也。

阜月赴江伊牧尙庸君館、賦即景、應君之求。

葛衣自向凱風揚、玉露清談忘日長。蛺蝶乍過飛白抹、鴛鴦相對浴紅糝。數株騰茂樹先秀、丁啜滌煩茶又芳。近水樓臺尤信美、炎塵洗了納微涼。○萬治二年。

——梅洞林先生詩續集

中秋遊永伊牧別莊

蔑視一年十二度、此宵殊識協佳名。走花燈耀高低影、斫桂斧回遐邇時。庭列瑤階行有色、露淋銀漢聽無聲。四雲□盡月侵坐、自怪挺身入玉京。今夜遊人舟遊、揚走花燈也。走花燈者、俗所謂花火也。

——鳳岡林先生全集

兩國橋架造

三年庚子○萬治○紀元初テ兩國橋ヲ架ス。橋上眺望ニ富ム。○玉露

霸都時代ノ遊園



兩國橋架造  
事蹟

一本。鷲峯先生林學士文集。江戸鹿子。武江年表。

兩國橋架造

詳シキハ橋梁篇ヲ見ヨ。

一、同年三月。明暦大火以後、武州と下總との堺へかゝりたる橋を、兩國へかゝりたる橋なれり。兩國橋と名付たり。長さ九十四間也。

——玉露叢

兩國橋

此橋は丁酉の年江戸大火事の時、下町のものとも風下をのかれんと、淺草の見付へと車長持惣して諸道具を引のきたるゆへ、道つかへて數多の人の焼死にたるを不便と思召し、若重ねて大火事ありとも人の損せざるやうとて、下總國本所へ江戸淺草より百餘間の橋をかけさせらる。武藏下總兩國へ掛りたる橋なるゆへに、兩國橋と名付るなり。此橋のうへよりの眺望心ことばもおよばれず。

——紫の一本

兩國橋始て掛らる。幅四間。五凡九十六間。始ハ大橋と呼リ。後ハ兩國橋と改めらる。廣貢といふ。書ハ、今の兩國橋往古ハ少し川上よりよりとるハ、度々洪水少し落て難儀せし。川村隨見今の所を見立て言上し掛けるをりしより、此方流失の憂少しとあり。

——武江年表

武總長橋望富士山記

山不爲不多焉。獨秀於十五州者富士也。高哉富士。在此眺之、在彼望之、遠而固奇、近而亦宜矣。巨橋百尺之長虹、落雲橫攝於武總之間。俗謂之兩國橋。在此橋望彼山、則絕景無雙。頭戴千秋之雪、終天不消、影送萬里之流、入海無盡。玉龍之動、移臥波之勢。白鷗之飄、認都鳥之色。鵝毛之吹、亂群鷺之列。素笠之擊、重漁簑之肩。銀屑之散、混岸沙之推。瓊樓之聳、擬複道之通。起鄭紫左驢之思、做趙閑駐馬之看。誰謂西湖之橋爲佳境乎。爭及兩國之橋。擅壯觀哉。癸丑(○)延寶元年(○)春。

——鷲峯先生林學士文集

兩國大橋 是關東第一の大橋也。武藏と下總との橋なれり。兩國橋と稱せ。長さ百餘間。是則明暦年中初て草創乃橋として、真中に番所設居て、夜陰乃非常を禁ざるなり。此橋の上にて四方眺望せれり。ゑあつぬ風景記といはあつぬ。ちやく見こせり。廻向院念佛のこゑいつもたえせど。それより見やまむ。北のりよ。駒形堂淺草觀音堂又ハ牛の御前。隅田川はのりよ見え、遠くは房州筑波山々のりよのそと、たりな絶景也。或ハ諸國の商船多、入船有、出る船あり。三月此頃をきて秋乃をゑるまでハ、遊船夥敷此をとりよあつまり、夏月の炎天にハ、

帝都時代ノ遊園



ひささら川面船になりて、流星玉火を帆よあけ、笛太鼓を楫よなして、うたひとよめた、一輩乃行所を得しひまゝにゑて、廻向院駒形堂よ上るも有、萬頃此茫然たるを凌て、龜井戸、木母寺などに、行も有、誠より、くれあき江城乃歌吹海也。彼吉原よ行二丁立の引もちだらず、戻る有、走るあり、あきてふねまかりよて、歸るも有、編笠打きて鼻歌うさふも有、寝あかり煙草をのこて、いきなりひを二丁立の男につきて、櫓びやうしをふはせて、船板をたゞぎば、船も揺々として、軽くあり、風も飄々として、羽織を吹いて、乗ちぶふ有さば、うた世のたもひでとならめやきはバと興有。

——江戸鹿子〇貞享四年。

太田氏別墅  
八景十境撰定

寛文元年辛丑

〇紀元二二〇一年

林春勝

〇鶴濱松

城主

太田資宗

〇備中守 駒籠別墅

別墅

〇市内

八景十境ヲ撰シテ、詩ヲ題ス。

〇鶴濱松

城主

太田氏別墅  
八景十境撰定

太田氏別墅八景十境撰定

太田氏駒籠下邸ハ、正保圖之ヲ載ス。八景十境撰定ノ

コト、鶯峯先生林學士文集ニ見エタリ。

太田備牧駒籠別墅八景十境詩并序

東陽之詠、虔州之境、鳳翔之觀、桃源三川之景、其數皆八。然唯瀟湘八景、舉世皆知之

之。或畫以寫之、或詩以贊之、則何費多言哉。備中太守太田君資宗、奉仕幕府四葉、職役歷試、食祿增加、賜遠州濱松城、以居海道要地、屢來侍江府有年矣。太田知余既久、交情稍渥。今夏太守在濱松、余一日應其令嗣攝州牧資次之招、遊其別墅。別墅在江城北駒籠之地。地廣境佳、而遐邇之景象、許多下可枚舉焉。同行保田氏宗雪、與予携手入茶亭、指示曰、某方者某景也、某景者在某方也。其聚美縮遠、不亦脫乎。於是四方四維之際、標出其最勝者各一、以作八景之目。既而出亭、周覽其境、則可愛者亦多、而四時壯觀、足以想像。乃復就其中、揭示十境。攝牧欣欣殊甚、嗚呼一州之廣、一郡之大、其勝狀及八者、以爲美談。況於一別墅之中、備其景境如此。官暇之樂、何他求。歷日太守來府、遇余述其謝、且求八景十境題詠。保田氏亦勸之。然有故未果、累月漸成。遂敘事之始末、以辨於其篇首。

八景

東台池嶋震方

台麓池中小翠屏、漣漪百頃自清冷。擘開江介竹生島、移得君山浮洞庭。

大洋層瀾巽方

誰駕長風窮壯遊、層瀾浩浩向東流。仰觀俯察乾坤影、日月星辰山嶽浮。

霸都時代ノ遊園



編戶晚烟離方

編戶茅籬向夕曛。竈烟風引氣氛氲。霏霏簇簇連空處。却似油然出岫雲。

湯島管祠。居士所建。故特標示之。

肅然湯島一壇頭。百世儒宗天下尤。何處神風無不遍。西都北野又東陬。

士峯積雪兌方

富巔獨秀幾千里。白雪高堆不待冬。誰敵玉龍三百萬。敗鱗殘甲擬群峰。

武野平遠乾方

月照霞關夜未央。風吹烟際草猶芳。平原渺渺四望遠。曠野迢迢一路長。

筑波岑蔚坎方

岑蔚參天綠樹濃。筑山不改四時容。茂陰風度餘聲遠。傳入江濱百里松。  
以規祝焉。寓遠于江濱中。

隅田長川良方

兩岸中分武總州。追尋昔日業平遊。繫長廬瀑三千尺。白練爭如羅帶流。

十境

清徹泉

水生於地中。冽冽涌無窮。徹底一新井。乾坤上下通。

白鳥沼

白白鳥相雙。水面影自淨。遶沼不摩天。刷翼幾游泳。

葫蘆洲

洲似一葫蘆。名因形象呼。任地陶穀畫。何必問東吳。

松杉墩

青青看無厭。不被雪霜染。百株葉萬千。如戟又如劒。

百花場

淡白與深紅。交技西復東。一場春色遍。二十四番風。

千竿塢

風前翠密脩。塢裏響颼颼。淇澳一君子。渭川萬戶侯。

藤岸洞

藤花春十分。風外色紛紛。岸漲千層浪。洞籠一朵雲。

錦楓徑

霜楓勝似花。幽徑可停車。葉葉蜀江錦。枝枝勝閣霞。

霸都時代ノ遊園



林木高千尺。春秋幾回易。風動萬年枝。雨洗數根石。

翫月亭

何論弦與望。夜夜月侵牀。醉翫亭中主。清光落羽觴。

辛丑孟冬七萸遊太田備牧別墅賦即景。

高亭依舊構新店。小路斜連下又登。人繞楓林疑衣錦。鳥貪柿實畏張罽。遙岑隱霧勢千態。隣塔籠雲影五層。月落星涵池水底。更添點火似龍燈。

〔附記〕 忍岡林氏別業

是頃ノ狀況ヲ見ル可キ者、林春信洞。梅ニ遊別墅賦アリ。

遊別墅賦

辛丑元○寬文孟秋中旬。赴別墅。曝晷於秋陽。留宿數日。偶乘逸興。作遊別墅賦。其辭曰。惟郭外之別莊。占得數百弓之地。觀斯土之象狀。實顯敞而寡類。東則溟濶天遠。巨鯨吹濺濺之潮濤。隅田流清。都鳥振翩翩之羽毛。下谷之田。黎民荷耒。淺草之雲。片片卷舒。西則富嶺鬱兮。四時雪白。武野逸兮。千里草青。靈池映門。疑懸明鏡。箱根當戶。似建翠屏。南則品川漾漾。碧玉流長。活鱗濺刺。漁網維張。菅祠接隣。再造既成。

附記  
忍岡林氏  
別業

固靈德之可仰。長使衆人傾情。北則二荒嗟哦。拂方仍之煙嵐。三峯列施。捧一朵之碧簪。乾方則神廟巍然。丹栂映日。杉樹交枝。風聲蕭瑟。往者英威之暨々。殛鯨羽淵。終致太平之洪業。功蓋六十州之天。坤方則金城萬雉。紫閣千重。戈戟森々。鐘鼓鏦鏦。鴻運之綿永久也。願聞嵩呼於今時。赫赫師尹。慎哉。勿忘址基。良方則筑嶺岩巖。螺鬟淡掃。綠樹之有重陰。經方歲而不枯槁。巽方則深川水濶。遊人泛去來之船。房陵山遠。杳空揚濃淡之煙。八方無碍。四望不窮。登高岡而舒嘯。振吟袂于長風。雖多景之在眼。奈語句之乏工。既而挹藜杖。岸葛巾。踐石徑之磴磴。輾小車之麟麟。趨過入德之門。崇夫子之聖殿。德輝之照萬古。如披雲霧。而見覲在昔。本邦文物之隆盛。行釋奠于闔國。今則無聞。昏俗遂難。滄拭。惟此一殿。乃祖所建。迺是日域無雙。春秋之二仲。聊采蘋藻于武江。冀繼絕興。廢以從前朝之舊式。振聖風于四裔。祈開學路之荆棘。痛矣哉。世人之盲聾。白首不識一字。吁。頽散之至此。未如之何而已。迺歷箇箇之草塘。以憇足于詩仙堂。漢晉六朝唐宋之際。詞人才子。分鑣竝馳。筆頭花開。言葉露滋。各以製作之雅麗。垂令名簡青。乃祖曾擇之。而圖畫六六之儀形。今朗吟其詩句。以如對其人。然九原不可起。無奈芳跡之陳。乃過巨庭。入第宅之廣胖。清風颯至。一洗炎熱之殘。飛檐轆轤。堆阜嶮嶮。聖殿在前。書閣在右。鳥馴階前。欲分杜老之



食。蛩咽叢間似聽孟郊之吟。覺閑趣之偏長。喜塵事之不侵。於是入園林。縱吟履之所如。松葱葱兮掩扉。竹疎疎兮遶除。槿籬帶露。楓林待霜。藜藿更青。宜照書生之讀。槐花將黃。以知舉子之忙。茄挂紫腹之腴。苔垂綠髮之長。蕙蘿得意。高冒紅日之影。梧桐成陰。屢傳素秋之聲。愛茶芽之潔。而不屑鴻漸之毀。待柿實之垂。而欲問烏棹之名。雉鳴鳴兮顧影。蟬緜緜兮奮翼。雲溶曳兮出岫。水汨瀦兮入洫。徜徉于此。遊覽于彼。以縱耳目之欲知。幽樂之無弭。昔裴晉公。身歷四朝。暇日憇于綠野堂。又遊于子午橋。心忘朱紫之尊。安老懷而逍遙。李德裕之爲相。屢赴平泉之莊。招雜賓而飲燕。極娛樂于一場。遂遭牛氏之譖。招得貶謫之殃。吾今見二公之得失。審知出處之臧否。縱雖貴賤之異等。何不思進退之理。要須仕而優。學而優。馳野情于蘿薜。于嗟境似輞川。王維奈無裴迪之伴。遊勝竹林。阮咸屢歎嗣宗之逝。雖然連棠棣鄂不之枝。敍一家天倫之樂。携手談笑。喜色見于容貌。或攀藤蔓。或掘瓜菓。不知四體之倦疲。于時曜靈俄景。暮色漸昏。歸禽三四高翔。而月臨前軒。歌曰。善乎哉別墅之寬閑兮。塵夢消兮雅興發。固雖至樂。奈省定之暫闕。

——梅洞林先生文集

把茅亭

不忍池邊當年ノ光景ヲ推スルニ足ル。

把茅亭十二詠詩序

江城郭外。良維幽處。地接東臺。境臨漣漪。池塘草生。誰圓靈運之夢。徑苔厚。豈迷楊朱之岐。友人野道生○人見壹。相攸於此。投老於閑。綯一把茅。營數間店。容膝而安。金紫黃門之餘光。揮毫其健。銀青羽林之扁額。蔑視仲蔚蓬宅。景慕茂明蘭溪。朝眺則赫赫太陽。映神廟之高樓。添靈威以和光。夕望則皎皎霽月。照聖殿之仍墻。仰德容而彌高地。閑境靜。不覺日之長。驚耳於谷中之晚鏡。夜闌人定。伴燈之孤。攬眠於駒籠之鶴唳。花開於小塢。藏九旬之春光。荷香于林塘。引十里之涼風。對門前青山。則感紅葉于肅霜。撫軒下幽松。則分髮雪于歲寒。惟其四時朝暮之變態也。自其不變者而觀之。則書庫之臨池邊。自無鬱攸文患。穩坐其中。出入其際。漱六藝之潤。尋歷史之跡。或寄神遊於垂翼之鵬。悟世情於曳尾之龜。或撫古來才子之英華。抄本朝詞林之露滴。志倦體疲。則棹小艇於篠簕池。魚蝦相伴。鳧鷖同盟。吟風弄月而歸。於是白賁園中之菜也。采之摘之。可以當大牢之肉。可以准八珍之羅。把茅店中之茶也。壺之囊之。汲水之清。試湯之沸。一甌以澆之。一啜以甘之。則兩腋風生。而蓬萊亦不遠矣。與世俗茶人之揀古器。銜名利者。不可同年而語也。初道生少而好學。無于祿之志。有避無之心。然爲家食之不周。故筮仕二十餘年。其身稍溫飽。而屬類亦



不饑不寒。非稽古之力哉。方今身老退休。幸遇英主。眷遇既渥。優恕有餘。而雖不入山林。得爲一閑人。請之遯亭乎。不願富貴。自以爲足。所謂小利貞者乎。壬寅○寬文二年賦孟冬。向陽林子遊息于此。吟詠于此。提携者六七人。爲主人之介者五六人。遂揭亭中十二詠。各賦五言四韻。俱成辯。小序於件件如左。

神廟朝暉十二詠之二。

日之臨下土。爲衆陽之宗。神之鎮東方。爲闔國之護。嗚呼大明無私照。威風無遐邇。不擇細大。不隔貴賤。然則眞暄於幽窓。安居於茅齋者。豈可漏于恩光乎。

瞳瞳出自東。桑城引神風。飾壁石華表。掛鉦宮樹叢。耀靈楹梅煥。赤暈棟梁江。光被普天下。漏明小牖中。

—— 鶯峯先生林學士文集

把茅亭四月八日赴下幽宅。時新築成。號把茅亭。

新築初成池水灣。衡茅結束飾堂顏。勿嫌一把林亭小。却是三間占得閑。

—— 錦囊蠹餘集○林春信

同日懷舊并序

古人曰。歲歲年年人不同。誠哉斯言也。我叔父林彥復。與主人執交既久。文談雅論。亦已有年矣。草生之朝。蛩吟之夕。寓懷于詩酒。遣興于石鼎者。不知幾回也。方

今彥沒後一百餘日。始入林塘主人卷號。以開雅會。池水之眺望。可以入詩興。檐雨之餘滴。可以換同參。閑中之幽樂。何以加焉。唯以無彥復爲欠事。與主人共。澹懷舊之淚。於是熟思往事。則去歲季春之初。與彥復共來此宅。清談莫逆。以吟詔景。今已爲昔遊矣。向所謂歲歲年年人不同者。豈虛言也哉。遂裁七言一律。以述感懷。乃呈主人。其詩曰。

碧砌朱軒匪所論。把茅亭主人所居。丘好容身。生來長日短。霄話拚却千街九陌塵。前

沼水生昏雨裡。連岡影近白雲鄰。斯時斯景雖依舊。唯恨來遊欠一人。

卜幽大人折寄庭池白蓮。副以一篇川八。於是卒爾和其韻。附來奚遣之。以謝

芳惠。

請看白紋蓮淨植。色如梁甫有銀泥。野塘水動捧圓碧。月曉風清散端圭。解語新粧唐殿側。採歌緩唱若耶溪。又聞此物痊沈疾。一片絕勝靈藥齋。○以上寬文元年。

聖殿霽月卜幽席分探白賁園十二詠

在上而明者月也。在下而明者聖心也。方今以天上之明。對聖心之明。其上下之際。明明之德。誰不瞻仰。易曰。明並作者。聖殿霽月之謂乎。若夫聖人天也。則何必隔上下乎哉。



月霽大成殿。巖瞻仰顯靈。聖志殊皦皦。夜色自熒熒。爽露洗蟾窟。清風拂鯉庭。德輝千萬古。分映濯纓亭。○寬文二年。

——梅洞林先生詩續集

把茅亭白賁園同所歟。不忍池ノ蓮花是頃ヨリ之有リタルヲ見ル可シ。因ニ稍降リテ儼塾集ニモ、不忘池賞荷花ノ詩有リ。姑ク此ニ附記ス。

孟秋之夕遊不忍池賞荷花

菡萏香風悅可人。萬莖紅白一時新。鑑湖景物前程備。想見風流賀季真。

——儼塾集

江風山月樓  
築造

二年壬寅○寬文○紀元二二二二年。春、小田原○相摸國。城主稻葉正則、○美濃守。築地中

屋敷○京橋區。ニ江風山月樓ヲ起ス。三年癸卯○寬文○紀元二二二三年。竣成ス。林

春勝○鷺峯。其記ヲ作ル。○鷺峯先生林學士文集。續江戶砂子。寬政呈譜。

江風山月樓  
築造事蹟

江風山月樓築造 稻葉正則中屋鋪ヲ築地ニ賜フコト、寬政呈譜ニ、

正則從四位下侍從。美濃守。隱居名。泰應。幼名鶴千代。稻葉。○中略。

一、寬文元年丑年七月廿四日本庄ニ屋敷地拜領仕候處、木挽町海手之地所替地、領之通被仰付、中屋敷仕候。

一、寬文二壬寅年二月廿五日木挽町屋敷脇海地添地領仕候。

ト見エ。所謂江風山月樓ノ築構ハ、

江風山月樓記

樓在江城郭外東南海畔。是小田原拾遺越智正則新築之別墅也。自壬寅○寬文二年。之春、填海積土、營宅地、疊石壁、以限漫波。至癸卯○寬文三年。之秋、既終斧斤之功、可謂不日而成者也。此役情近傍之民、各授其資、則無勞者、而受益者多矣。其營作用舊材、而質素、乃知捨華取儉之謂也。樓多勝狀、然其中四時常有、而萬古不變者、江上清風、山間明月也。以是名樓者、不亦宜乎。登樓遠望、西南則士嶺千秋之雪、與白雲俱飛、連宮根之山、而懸寸眸之中。品川三緣山之岑、蔚層塔、相竝在指顧之間。東則房州之遠峰、捧三朶之花、開卓女之眉。而万里之片帆、飄飄搖搖、如葉之浮、如葦之橫。近則洲崎之屋舍、隔水、比東南之鄰、而江城千門万户、翬飛于西北。俯視則漁船來往、浮家泛宅、維竿維絲、小鮮吞鈎、大魚罹網。况夫東船西舫、檣楫相盪、酒食歌謠、以遊以敖。浩浩之波、茫茫之雲、天水一色。中華三韓之遠、亦可以通潮、可以問津。廣覽之樂、不亦大乎。加之庭開三池、以引海潮。築長堤、以界破之。明月臨於此、則髣髴于西湖三潭之印、倍徙于洛西廣澤之光、而絕勝于洞庭之秋影。池中有三島、如縮蓬萊、羸洲方丈於咫尺、如移



熊野之三山於此池傍。有茅衡號游息門。運步而棲遲。則山海之多景。可以一覽焉。鱗者或活潑。或游泳。或潛伏。遶島遶洲。以成千里之遊。架小橋。扁曰觀魚。不亦樂乎。羽者有鷗。有鷺。或飛下以與潔。或聯拳以立。江南野水之閑。可以想像。西籬振振之詩。可以詠吟。而環滁之亭。禽鳥之樂。亦不在此乎。池之南有芝山。青青其色。追尋綠野之蹤。喚起裴晉公於異域。其山徑有石磴。有堆阜。其左右前後。竝栽小松千餘株。愛梁棟之容。以期參天之高。譬諸育人才。亦可以推焉。又奇石怪巖。有如虎豹者。有如月痕者。有如烏帽者。其餘或圓或方。或平或欹。皆是運采地所有。而不求於他方。其不可動不可轉者。方寸之所守。堅而介者乎。何執牛奇章之怪石供哉。櫻花之映春風。如雲如雪。綠樹之清陰。自納南薰之涼。楓枝之浸池水。如臨濯錦之江。竹林之茂。如持歲寒之操。四時之幽賞。不可勝計也。南隅數百弓之長場。良馬警控。倚鞍執轡。走電追風。講武之不忘者。安不忘危之謂乎。場邊有茶店。招賓客。呼群僚。切切惻惻。和而不流。大凡千態万貌。氣象多般。非筆舌之所盡。雖韋偃王宰。豈可悉描哉。然主人之多務。不能屢來。其偶至。亦不過半日。故名其休處曰半閑亭。書畫等雅具備矣。狀之中央掛聖像。其左右丘隅。黃鳥。鳶。飛魚。躍之二幅也。其志之所向。可以嘉尚焉。余幸應其招。登樓飽視絕景。吟步佳境。不覺日之暮。嗚呼。主人之傳號令。如江風之不隔遠近。其仁心之明。如山月之照。

上下而登。此樓者。受太平之教化。則主人之芳聲。與風月永垂。後昆而可不變乎。與彼結綺臨春之耀。美於一時者。不可同年而語也。

癸卯○寬文三年季秋下旬

——鷺峰先生林學士文集

江風山月樓 築地稻葉侯の別莊を云。此地寬文壬寅○二年。此春海を填ミ土を積。石をとんて。翌年の秋成れり。此時近邊の民。價を倍し。役をとげまじ。益を得る者。まとひ多し。其營作舊材を用ひて。質素之。花を捨儉をとる。あも風景他よまとぎまて。洞庭の秋影。越とりといへる。

——續江戸砂子

〔附記、一〕 寬文初ノ遊觀參詣所

寬文二年五月版行ノ江戸名所記ニ。當時ノ江戸遊觀參詣所ヲ舉グルコト。左ノ如シ。

東叡山 東國の叡山なれば東叡山といふなり。此山にのほりぬれば。江戸中は殘らずめのしたにみゆ。○前略。

不忍池 池の大き五町四方もありなん。池の中に島あり。辨財天おはします。水谷伊勢守建立せらる。南のかたに茶やあり。北にゆけば谷中に出る。池水常にたゝゑて。蕩々として底ふかく。風えうくと吹おければ。小波かさなり立



て、水面に皺をたゝみ、月雲を分て出れば、影水底にうつりて百餘の鏡を見ごとく、木にのぼる魚もなく、波をはしる兎はなけれども、さながら竹生島のおもかげあり。○前。後略。

牛天神 東叡山黒門の際、右の方にあり。堯惠法師中興として、上野の鎮守たり。○中。松梅はもとより初木也。○下略。

忍岡稻荷 此社まで猶忍ふの岡のうち也。太田の道灌これをくはんじやうせらる。本社は洞の内にあり。ほらの上にもまた社あり。やしろの前は、すなはち石のほりぬき也。山門のまへ兩わにき白き狐あり。神木は榎木なり。やしろの右のかたに糸櫻あり。柳のゑだに櫻の花をさかせるがごとし。春風にうちなびく有さま、朱の玉垣にいろをそへて、且ちる花や匂ふらん。稱宜がうちふる白幣を柵をへだて、見るがごとし。石壇のしたに泉水あり。岸は石にてたゝみたり。西にむかへは忍はずが池はめのしたにみゆ。またすてがたき絶景なり。護國院はこれ明神の靈夢によりて立られしところ。松櫻竹のはやし、萬木ゑだをきしり、梢の花色をあらそふ。鳥井の内に茶やあり。  
わかをもふねかひをみつの御社にゆふかけてさく糸櫻かな。○下略。

小神田 廣薬師 ○上 江城の元祖太田道灌、この靈像を歸依し、年久しく城内にあがめ賜ひしが、又故ありて神田にうつし奉り、いよゝ崇敬淺からず。ことさらに時の大御臺御願主となり賜ひて、御堂御再興あり。玉をつらねこがねをちりばめて、奇麗なる事目をおどろかしけり。その、ちに又故ありて廣小路にうつしたてまつる。あかれは此如來、星霜久しくもろゝの衆生にけちえんし賜ひ、所々に座をとゞめ、現當二世の悉地は、古往今來さらにいよゝさかん也。○下略。

湯島天神 ○上 道灌この奇特をかんじ賜ひて、城の北のかたにやしろをたて、梅の木あまた植たて、社領をよせてあがめまつられしよりこのかた、やうやくはんじやうして、宮居はたぐひすくなき絶景の勝地となれり。○下略。  
神田明神 ○上 地はやふる神田の宮井年ふれといのるしは猶あらたなり。

中谷 清水稻荷 人の家たちつゞきて、すなはちこゝを清水町と名づく。神木は杉なり。○前略。後略。

中谷 法恩寺 本堂の兩方に櫻二本あり。花信の風の後、この花はじめてほころ



び出れば、曼陀羅花の地よりわきあがりて、木ずゑにむらがりと、まるかたあやしまる。まうで來るともからは、かへらんことをわすれてながめくらす。わかき女房たち、うるはしき小袖に、いろ／＼の衣裏さして、たもとをつらねて入來り、他念なく此花をながめ居たるありさまは、我此土安穩、天人常充滿の經文にかなへりとおぼしく、いとゞうきたつ春の日に、諸人こゝろをそらになす。○前略

谷善光寺 門の内には、兩方に竝木の櫻あり。○前略

谷感應寺 當寺に萬祖日蓮大聖人みづからつくり賜へる御影あり。十月十三日は、この聖人の御忌なれば、諸人まうであつまる事市のごとし。○前略

新堀七面明神 日堀村寶珠山延命院の住持日長上人。○中略夢想をかうふることの有がたさよとおもひやられて、七面の明神を此地に勸請申されし。御

縁日は九日と十九日と廿九日をとる。神事は九日十九日なり。○前略

駒込吉祥寺 ○上略何事もよきさいはひの寺の名のあるしをかねて上にあらせし。

駒込富士社竝不寝權現 このやしろは、百年はかりそのかみは本郷にあり。

○中略六月朔日には、富士まいりとして、貴賤上下參詣いたせしを、寛永の初めつかさど、このところを賀州小松の中納言拜領ありて下屋敷となる。○中略不寝權現は、○中略この社は檜の木ばやしのうちにあり、太田道灌の植られし林なり。世にせんだんの木ばやしといふ。○下略

井新惣持寺 ○上略つみとかのまよひの垢はのこりなくあら井の寺の法そたうとき

淺草觀音 ○上略淺草や川瀬のよとにひくあみも、ひろきちかひにたゝへてそみる。

淺明王院付媮淵 ○上略今は人の家屋たちつゞき、軒をならべてにきやかなり。のちに淺草の寺内院宇おほくたちて、明王院もはじまれり。子どもの嗽入

てわすらふ時は、竹の筒に酒をいれて、木のゑだにかけ、うばか淵にいのは、咳嗽の病たちまちにいゆると也。池のはたに洞あり。その洞の兩方に小笹し

げれり。○下略

石濱總泉寺付妙龜山 當寺はこれ學宗和尚の開基として、正法眼藏の妙理

をしめし、實相無相の心印をひらく。○中略妙龜山は、總泉寺を去事遠からず、爰



を淺茅か原と名づく。略。中

淺金龍山付眞土山 略。上 聖天宮のやしろあり。大なる松山なり。古しへは爰を眞土山といひし、これ武藏の名所なり。略。中山のうへにのぼりぬれば、東のかたに淺草川、牛島新田みゆにしのかたは大道なり。聖天宮の前にて、

まうてくる人をまつちの山かせに、まよひの雲ははらひはてけり。

たれをかもまつちの山の山姫は、衣かたしきひとりぬらん。

淺卅三間堂 略。上 慈悲の弓に智恵の矢はげて觀音も、いるは三十三間の堂。

東本願寺 略。上 神田の臺に末寺を立らるへきよし訴訟の事有て、江戸の神

田に寺地を拜領し、一字をこんりうせらる。今は大にはんじやうなれば、京都

の本寺より堂衆一兩人かはるく輪番にさしくだされて、江戸中の門徒を

勸化せしめらる。略。中 明曆三年の回祿より、此處にうつしあらためられ、寺院

をつくらせられたり。

淺報恩寺 略。上 此寺いにしへ、下總の飯沼より櫻田に引こしけるを、それよ

り、八町堀にうつり、いま淺草にうつされしは、酉のとし。三〇 明曆の回祿以後の

事也。略。下

淺日輪寺 をどり念佛のひやうしをあはせて、梟鐘のひゞきに信感をもよほす。略。前

大雄山海禪寺 略。上 明曆丁酉正月十八日の回祿に、堂舎ことく焼ほろ

びけるを、おなしき年の六月に、將軍家の鈞命によつて、地を淺草にうつされ、

かたのごとくの堂舎をかまへたり。略。下

淺藥師 藥王山醫王寺東光院は、慈覺大師の御草創として、顯密二教ともに

ひろまり、台家一百八ヶ寺の惣本寺なり。本尊は春日の御作。略。中 太田 入道 持資

道灌この本尊をあがめ奉り、御城の鬼門にたて。略。中 今の常盤橋の地に有け

るを、江城月をかさね日を追てにぎはひさかゑ賜ふによつて、寺を傳馬町に

引うつされたり、寺院いらかのみがき、樹木梢をあらそひけるを、酉のとしの

回祿にことく焼ほろびて。略。中 寺地を淺草にうつされ。略。下

淺清水寺 略。上 たゝたのため、手、手のちかひひろければ、かれたる木にも花さ

くといふ。

淺誓願寺 略。上 酉のとし。三〇 明曆の回祿以後、この地にうつされたり。略。下

神天澤寺 略。上 寛永二乙丑年、征夷大將軍家光公の乳母稻葉氏春日の局心



さしをおこして、武州江城の東北湯島の郷にこれを建立し、略。○下  
町 浅草 西福寺 略。○上 辨才天をもつて鎮守とせらる。略。○中 今又あとを此地にた  
れて、げつゑん利生の素壤をあらはし賜ふとかや。また一軀の洪鐘を一樓に  
かけらる。略。○中 藤の林鐘の龍頭にしげりまとひて、花さく折からは、又一しほ  
の興をもよほす。

町 森田 大六天 略。○上 古老のいひつたへしは、開基よりこのかた八百餘年にお  
よぶといへとも、年久しき事なり、代々の兵亂に縁起をとりうしなひ侍べり。  
神事は二月九日なり。略。○下

浅草 焔摩堂 付十王 此焔摩堂は、いづれの時、いか成人の草創せられしやらん  
と、今の留守居に尋ねしかば、耳なし山の風情、きかぬかほしてとへどこたへ  
ぬくちなしのはなにかけて居られたり。略。○前

浅草 駒形堂 駒形堂は、浅草寺の門口にあり、馬頭觀音を安置せらる。安房の大  
守平の公雅の立られし所なり。略。○中 諸人こゝにして、手水をとり、口すゝき、身  
をきよめ、心をいさぎよくなして、浅草寺の本堂にまいる。浅草川の舟つきに  
して、かの吉原にゆくものも、猶こゝを舟つきとさたむ。前に茶屋あり。此川の

鯉は名物にて、その風味すべて淀鯉にまされり。此川ばたにして實るとかや。  
略。○下

浅草 文殊院 此の寺は高野山行人方の頭なり。堂は東むき。略。○下

角田川 略。○上 北川の岸ちかく梅若丸の墓あり。あるしの木は柳なり。三月十  
五日は縁日也。不斷念佛の道場として、諸人この寺にまうで、むかしの事を  
聞つたへ、みなあはれをもよほし、歌をよみ詩をつくり侍べり。一興ある景地  
たり。御茶屋あり。將軍家をり、御遊覽おはしますと也。略。○下

西葛 淨光寺 藥師 西葛西木下川村青龍山淨光寺藥王院は、慈覺大師の開墓  
なり。略。○中 古しへよりこのかた毎月八日ならびに元三の朝には、本尊の御前  
に龍燈あがる事時々これをながむ人すくなからず。堂は東むきなり。堂の東  
北に鐘樓あり。東のかたには山王權現鎮座し賜ふ。東南の方には辨才天、南の  
かたには白鬚大明神、おなじ所に稻荷明神おはします。略。○下

葛西 東照院 若宮八幡 略。○上 郡代前の伊奈の備前の太守、この由緒を聞て甚  
觀喜し、あしたに八幡宮を得興し賜へり。朱の玉籬重ねてひかりをあらはし、  
飾の御帳かけまくも利生あらたなる神徳をほどこし賜ふものなり。略。○下



西葛 善導寺 小松川善導寺は、本願寺の末流を汲て、一向専念のをしへをあふき略。中當寺に中將姫のをり賜へる彌陀の形像とて一幅あり。繪の地はこれ藕の絲也。如來の御首は、中將姫の黒髪にてをり賜へりといひつたへたり。毎年四月十五日は中將姫の忌日なれば、かの形像をかけて諸人におかまむ。略。下

牛業平塚 略。上牛島の古老の傳に、此所にして舟損して死なれしを、塚につきこめたり。その在所の名も今に業平村といふ。塚の形ちすなはち舟のごとくにて残りりと也。

なきあとのしるしはこゝに在原の塚のかたちも舟のなりひら。

西葛 本所太神宮 略。上あまてらす神のめぐみのかはらねば、こゝも五十鈴の本所なりけり。

牛太子堂 略。上あればてゝなにとしやうとく太子堂、もりやくるらん雨のふる日は。

川深泉養寺付神明 醫王山泉養寺は、これ天台宗として、本尊は藥師如來なり。略。中寺を去事四町ばかりにして、松の林の中に神明の社あり。爰も猶當時の

境内たり。祭禮は九月十三日也。略。下

廻向院 略。上江戸中の男女老少、あるひは子におくれ、あるひはおやにはなれ、または妻にわかれ、夫をさきだて、つれなく生残り、ありかひもなきいのちをながらへ、物うき歎きにしづみ、その日になれば、かの塚にまうで、五輪卒都婆をくやうし、花をたて香をもり、水をたむけ靈供をそなへ、悲しみの涙をなかすもの、高いいやしき市のごとし。略。下

三俣 こゝを三俣と名づくる事は、淺草川・新堀・靈岩島、この三方に相通じて、水の派わかれながら、所なれば、かくいふなり。まことに絶景のところなり。北には淺草寺・深川新田・東ゑい山まのあたりにみゆ。西のかたには、江城・愛宕山みゆ。たつみの方には、伊豆大島、ひつしさるのかたには、駿河の富士山、ひがしのかたには、はるかに安房上總にうちつゞきてみえたり。何よりおもしろきは、八月十五日夜の舟あそび也。世の好事の人、大名小名そのほか貴賤上下のともがら、舟をかざす幕はしらかし。三俣をり鐵炮洲をさしてをし、いだす。略。中三味線鼓弓引ならして歌うたひ、ほそらかなるこゑを帆にあげて、海づらにこぎうかふる。常はいましめらるゝ事なれども、今夜ばかりは三俣に花



火をゆるされ舟ことに我をとらじといろ／＼の花火を出し、春宵一刻直千金の心地あり。略。○下

永代 八幡宮 略。○上 寛永廿年みづのとひつじ八月十五日、はじめて祭禮をおこなひたてまつりて、毎年の式とす。それよりこのかた神徳たかくあらはれ、

諸人渴仰のかうべをかたぶく。島の内にきはひて、人の家居軒をならべたり、慶安四年のころより法務貫首のおほせによつて宮寺となされ、大榮山永代寺と號せらる。略。○中 おなじき年○慶安五年の秋、天下太平のために神前にして流

鏑馬をはじめむ。これ鶴か岡の法式をうつす。左右に假屋棧敷をかまへてこれをみる。すべて貴賤上下市をなせり。略。○中 まことにこの島の地景は、又たぐ

ひすくなし。東にはとをく安房上總の山をみやり、みなみにはしな川池上も

ほどちかく、ひつじさるのかたには富士の嶽、いぬるのかたには江城、北に筑

波山ほのかにみゑて興をもよをす。うしとらのかたは下總にうちつゞき、

ゑは海邊の磯ちかく、鹽屋の烟たちのぼり、風になひくよそほひまでのこりなくみえわたる。略。○下

禰宜 淨瑠璃 禰宜町には、そのかみより淨瑠璃歌舞伎、その外術品玉、いろいろ

ろ見物する事どもありて、鼠戸をならべ太鼓をうつ。貴賤老若はんじやうして、こみあひをしあひけんぶつする。略。○下

禰宜 歌舞伎 かの若衆ともの髪うつくしくゆひ、うす假粧して、小袖の衣紋

じんじやうに着なし、ほそらかなる聲にて小歌うたひ、階けりにねり出たる

ありさま、芝居の輩は、前なるは桃尻になり、後なるはのびあがり、棧敷にある

かた／＼は、耳もとまで口をあき涎を流し、あまりの堪がたさには、聲うちあげて、あれ／＼御やうかうの御すがた、天道馬ぢやとよばはれば、又かたはら

よりは、やれ笑ひ顔から鹽がこぼる、ちよいちよいなど、口／＼にわめきと

よむも淺ましからぬかは。略。○前

西本願寺 略。○上 西本願寺は、もと淺草御門のうちにありしを、酉のとし○明曆三年の回祿以後は、鐵炮洲にうつされ、海をつき出して地形とせり。はじめは人の家居とをく立はなれていとゞさびしかりけるを、江府御はんじやうのしるしには、ほとなく人の家たちつゞきて、今はこの寺まことに絶景の地となれり。本堂は海にむかひて南むきに立られたれば、打はれてうみづらを見わたすに、東には安房上總もみえ渡り、伊豆の大島も目のまへに見ゆ。ひつじさ



るのかたには、名にしおふするがの富士のたけくまなくみえてをもしろや。大まはしの舟ともは順風に帆をあげて、あやしきこゑくうちあげて歌うたうも聞えて、さすがにおかしかりけり。釣するあまのいざり火は、舟もろともによこがるらん。岸うつ波は白たへに時ならぬ花のこゝちし、夜半の枕にひびきては、浪こゝもとにと詠じけん。ねさめをすまの關守のむかしもさこそとおもほゆる。千鳥の聲はおちこちに所さだめぬ波のうへ、なによりもこゝろすむは、秋のゆふべの月影に、あこがれ出る舟のうちに、おもひくゝのあそびをなし、こゝろくゝに歌をうたひ、名も望月の夜もすがら、浪まくらかちまくら、かたぶけてくむ杯の數をもしらぬ眺望あり。まことにすてがたき美景也。○下略。

増上寺 略。○上 寺のうしろに御魂屋あり。そのうしろは山なり。前には所化寮つくりつゞけて、山門たかくそびゑたり。門の外は京都江府の海道なり。上下往來の諸人市のごとし。東のかたは海上晴て舟の行通ふ事目のしたに見ゆ。まことに絶景の眺望なり。ある人の發句に、  
庭にさく櫻や普賢増上寺。

芝瑠璃山遍照寺薬師 略。○上 なむやくし瑠璃の光明遍照寺、いのらはいやせ貧のやまひを。

窪烏森稻荷 烏か森は、武州の名所とはいひつたへしかども、歌枕名寄などにもみえず。古老の傳にいはいく、この所にはいにしへより狐のすみて、人の家つくりをさまたぐると也。○下略。

芝金西應寺 略。○上 應安開基のそのかみより、今寛文二年みつのえ寅にいたる春秋二百九十五年をへたり。地境綿々としてあらため替ることなく、坊舎幽々として恩澤に浴せり。講堂の前後に園林あり。老松數株えたをたれて、いく百歳をか經ぬらん。武州相州のあひだに、末寺あまたあり。○下略。

町八幡 このやしろいにしへは三田といふ所にありしを、正保年中にうつして、田町の八幡とがうす。○中 八月十五日に神事あり。もつとも奇麗也。社とうしろは山也。前は杉ばやしにて、神さびたる殊勝の宮立なり。○下略。

芝大佛 略。○上 この芝の大佛は、東國けちゑんの尊像、西方引接の靈佛たり。黄金のはたゑは七金山の朝日に映するがごとく、烏瑟の鬚は、五須彌の蒼海より出るに似たり。○中 又門前の二王は、これ陰陽阿吽の相をあらはし。○中 門



の左には竝木の櫻枝をかはし、花さく春の梢よりおちくる風にさそはれて空にしられぬ雪ふりて、又すてがたき所なり。

芝罎摩堂 大佛の左のかたに罎摩堂あり。前に茶屋あり。門前は東海道なり。むかひは海つらはるかに見えわたり、渚に打よする浪の音、砂をあらふありさま興あり。又入口の右のかたに石佛五體あり。おなしく但唱木食の作也。○略。

芝泉岳寺 ○上この寺またかぎりなき絶景あり。たかくつくれる山門は、雲をさしはさみて虚空にそびえ、四五忉利の宮殿かとあやしみ、天に梯してのぼるかとおもほゆ。門の内に道の兩方に竝木の杉あり。雪飛て枝につもれば、着帛をのべて雲にまがひ、風吹て梢をわたれば、緒琴のしらべ空にひびく。東南のかたは、海上はるかに晴て、帆かけ舟波をはしり、萬里の雲に連をなせば、田面の雁のわたるに似たり。釣する蟹のいざり火は、沖にちいさくうきしづむ。波こゝもとに立かゝる心地して、獨りまるねの夢をやぶる。汐にひたす月かげは、くもらぬ鏡をあらふに似て、海より出て海に入すべて眺望の興をもよをす。こゝは品川の入口にて、門前の大道は、のほる人、くだる人、歩よりゆく

もあり、馬のりものにてとをるもあり、たかきいやしき絶まなく、櫛の子をひくがごとし。門前より打つゞきて、牛町とて四町あり。○下

品川東海寺 當寺は澤庵和尚の開基なり。○中寛永十五年十一月のはじめつ、かた、東海寺を立て引こもり賜ひしに、猶その風儀をしたふ好事のともがら、門前に市をなしけるとかや。○下

品川水月觀音 ○上品川や寺井の水にすむ月のかけもくもらぬちかひしるしも。

池上本門寺 武州荏原郡千束郷池上村長榮山本門寺は、高祖日蓮上人の開基也。○中やうやく寺はんじやうして、寺中のさかひもつともひろし。○中寺中十六坊のうち、古跡四坊あり。大坊はこれ聖人迂化の地、宗仲か家は日澄上人の寺也。聖榮院は日朗の寺也。覺藏坊は日像の寺也。南坊は日照の寺也。○下

豊島目黒不動 ○上本堂のうしろはたかくそばだち、山のこしに堂あり。堂にのぼる事平地より石のきざはしをつたふ。きざはしのもと左のかたに松あり。勾松と名づく。かの瀧水は、今猶みなきりおちて絶る事なし。人この水にうたれて諸病をいやす。門の前は大道にして茶屋あり。



入間郡 氷川大明神 略。上くみてしる氷川の宮の神こゝろめぐみあらたに世をうるふとは。

永田馬場山王權現 略。上承應三年回祿の後、いまの溜池の築山無双の勝地たるによりて、上命をかうふりて、このところとうつし奉る。月日いくばくならずして、造營の功をたてらる。金殿玉樓天にかゞやき、畫棟朱簾地に映せり。神事は六月十四日なり。江戸中の大神事として、諸大名がたは産土神にておはしませばをろそかならず、いづれももてはやし賜ふ。まことに大造の神まつりなればとて、隔年にとりおこなはる。略。下

牛右衛門櫻 略。上衛門のかみあづまにくたりし時、うへられたる櫻也といひつたふ。花は薬ながら、匂ひ一二町餘所までも聞ゆといふ。さればすなはち此前を柏木村と名づくるなり。

柏木のうへし櫻は匂ふ宮薫のあとをしたふなるべし。

堀兼井 牛込村のほりかねの井は、これ武藏の名所なり。略。下

牛穴八幡宮 光松山の八幡宮は、世に穴八幡と號したてまつる。略。中  
二柱たつや鳥井をみるからに、あなたうとやとおかむ八幡。

豊島郡 法明寺 略。上大猷院殿折々當寺に御成の事おはしましけるゆへに、御茶屋をたてをかれしと也。略。下

小石金剛寺 當時は、これは太田の道灌のこんりうとして、用山和尚の開基たり。略。中そのかみは其院もおほく、院内ひろくして、僧録首座請客侍者沙彌喝食維那所行者火番などもありて、祈禱祝聖開浴淋汗のしきくのつとめをこたらず、いはんや堂塔もきらびやかに、塔頭もにきはひけるを、今はかすかなるすまいにて、人げもいと稀なり。略。下

關口目白不動 小石川關口村豊山新長谷寺目白の不動は、本體はこれ弘法大師の御作、荒澤鑽火の不動明王、御長八寸の尊像なり。略。中まことにきどくの本尊なれば、人みなあがめ奉り、貴賤あゆみをはこぶ。

を、しあひてまいりのつとふ寺なれば、めしろ不動と名づけそめけん。

極樂の井 略。上くみてしる極樂の井の水きよみ、彌陀のちかひの底のふかさ。

小石傳通院 當寺はこれ淨土宗流の一派として、所化學道の談林なり。宗風をしたひ學業をもとむるともがら、あるひは聚螢映雪の切作をつみて、まこ



とを經論の面にさらし、あるひは反鵲乘露の點畫をかさねて、手を紙筆の上  
にひるかへし、回答は當樓那の辯華句ひあざやかに、解義は舍利子の智水浪  
いさぎよし。○下略。

谷澁金玉櫻 ○上略。櫻はことの外に蔭ふるびたる古木なり。花咲といへとも、こ

ゝかしこにありて、數すくなく、枝つきまばらなるが、花の色は白し。○下略。

村金杉天神 ○上略。社は五間に三間なり。此神の土産沙たり。人の家をつくるに、

五間に三間なるをば、忌事なりとて作らずといへり。本社は山の上により、山

の下に鳥居あり。神木は榎の木なり。○下略。

町白山白山權現 いまこの地にくわんじやうせし事は、元和元年の事也。もと

のやしろの地には、名水の瀧あり。○前略。

橋樹榮興寺 醫王山榮興寺は、仁王四十五代聖武天皇の御願として、行基ぼ

さつの開基し賜ふ所なり。○下略。

日比谷神明 武州豊島郡飯倉日比谷邑の神明は、本朝の宗廟天照太神の宮

所なり。○中略。寛永十一きのえ戌大將軍家光公御信敬をもつて、當宮御さいこ

うまし、これによつて舊例にまかせ、年ごとの九月十六日に神事祭禮を

こなふ。かつうは天下安全の御祈禱のため、かつうは武運長久の御ために、臨  
時の神樂をおこなひ、四海太平五こく成就、萬民安穩の丹誠をいたすと也。

あまてらすひかりはおなし飯倉の内外の宮居神さびにけり。

金輪寺 豊島郡王子村禪夷山金輪寺東光院の社は、若一王子の宮なり。○中略。

當寺に萬病妙應の五香湯あり。近國の人民これを信服するに、諸病をいやす。

七月十三日に祭禮あり。寺中十二坊より躍子をいだして、風流のをどりあり。

見物の貴賤はなほだおほし。

稻荷大明神は、これおなじく王子の寺内なり。○中略。當社は關東所々にくわん

じやうして、あがめまつる稻荷明神の棟梁なり。毎年十二月晦日の夜は、關八

州の狐とも、この所にあつまり狐火をとす。○中略。二月の初午の日は、詣人參

詣していのり申すとかや。

愛宕山 ○上略。愛宕山杉の木すゑに雪ふりて、さなから枝にかくる木綿四手。

吉原 爰は傾城町なり。大道より八町ばかりの堤を行て、北にむかひて門あ

り。只一方口にして、三方は堀切なり。門の内に江戸町二丁目すみ町・新町・京町・

あけや町、うちむかひて六町あり。○下略。



以上ノ外江戸城及日本橋ヲ載ス。

附記、二  
赤坂十景

〔附記〕 赤坂十景

藝藩ノ士上田重治、赤坂淺野邸内ニ在リテ十景ヲ標出シ、幕府ノ儒員林春勝〇ノ題詠ヲ需ム。

赤坂僑居十景

上田氏重治、自藝陽士林、來在江府寓居其邦君赤坂邸舍、就其所瞻盼、揭示十景、憑武田杏仙爲价、而求題詠。不能峻拒、遂應其請。

前林朝暉

星落窓明向早晨、林間旭日自寅賓、嵎夷不被重山關、萬朶千枝江一輪。

池邊明月

池面澄明霽月鮮、雲光水影似爭妍、仙娥偶誤落粧鏡、匣在波心蓋在天。

柳塘歸鴉

煙斜露暗柳塘陰、鴉噪暮雪日已沉、閃閃倦飛知所止、緙條爲枕葉爲衾。

蘆底宿鷺

白鷺閑眠淺水隈、蘆花同色雪衣開、風吹葉々如飛箭、彷彿佐卿爲鶴來。

徑路曙雪

前路先迷滿面寒、五更曉色雪漫々、屐痕踏作瓊瑤迹、馬上猶疑落月殘。

幽寺晚鐘

華鯨高吼送斜暉、漠々碧雲將掩扉、風外疎聲傳遠響、晚烟微處一僧歸。

日吉新廟

祕殿相攸梁棟隆、靈神如水自流通、王城久鎮艮山社、武德維新東海風。

愛宕遠樹

青々林樾一望間、愛宕元移自帝寰、蒼蔚陰森遙指處、屹然秀出白雲山。

房州遙岑

回首遙望一小亭、房陵隔地入窓櫺、迢々武野水雲白、中有遠山當戶青。

東海片帆

蒼海茫茫不有垠、輕舟如芥又如塵、風帆孰與世波險、請問浮家泛宅人。壬寅〇寬

文二年歟仲夏下旬。

—— 鷺峯先生林學士集

淺野氏赤坂臺下屋敷ハ、元和六年賜フ所也。

八月十六日丁巳

〇寬文二年(紀元二三二二年)〇丁巳(三正綜覽)。

幕府ノ儒員林春勝〇ノ子

加藤氏庭園

霸都時代ノ遊園



春信河○梅等、大洲豫○伊國、城主加藤泰興羽○出守。ノ子興義作○美守。ノ園中内○市淺

加藤氏庭園  
事蹟

加藤氏庭園 大洲城主加藤氏邸ハ、寛文頃下谷御徒町及向柳原ニ在リ。詠吟スル所水澤地ノ景ナルノミナラズ、御徒町邸ハ上屋敷ナレバ父泰興之ニ居リ、世子興義ハ向柳原邸ニ住シ、所謂十境ノ勝モ同邸庭園ニ在リシ者ト思ハル。

八月十六日〇寛文二年、應加藤作州〇興之招、分賦園中八境。余得其二。

流葉泚

泚畔丹楓落。燕支點水頭。人無紅怨在。何向御溝流。

孤松島

島小松還小。風清心自清。枝頭孤鶴夢。和月到蓬瀛。〇寛文二年。

——梅洞林先生詩續集

鳳岡林先生全集載スル所觀術泉、亦同邸ナルヤ否ヤヲ知ラズ。

觀術泉歌并序

伊豫州大洲城主遠州刺史加藤君、在東武之日、其園庭引泉飛流、濺沫日夜不止。

涓涓漾漾、導和納粹、滄冷冷、獨煩折醒、可以暢血氣、可以起心情。起而掬之、則可以漱口、坐而玩之、則可以濯足。矧夫群木爲屏、細艸分徑、惟岩碎沫、礪石通流、可謂勝狀也。余一日逍遙其下、悠然終日、澹然忘歸。乃應其求、名之曰觀術、且作歌曰、  
幽莊引得一道泉。崱嶷決決弄潺湲。迎風恰似白雨落。映空髣髴銀河懸。花時不借雨露惠。一洗炎暑脫塵緣。新月涵影晴偏好。飛雲點流聲暗傳。爲客要備畫堂供。非金非石又非絃。廬山漱玉豈必問。靈隱冷泉欲差肩。石門山下通水脉。誇說方山寺裡禪。呼起唐家潘師正。茂松添色志願全。太白山下田游岩。這箇膏肓不可痊。起聽坐聽臥又聽。半洗心耳半延年。人間無水不朝東。西歸豈可忘東邊。水哉水哉流無息。逝者如斯晝夜遷。聖門有教本源遠。觀瀾之術宜拳拳。

增上寺隱居  
所園林

九月〇寛文二年。增上寺本譽、隱居所ヲ麻布一本松〇市内。二賜ヒ、

僧房ヲ建ツ。園林ノ設有リ。〇三山志。

增上寺隱居  
所園林事蹟

增上寺隱居所園林 麻布一本松增上寺隱居所ハ、寛文二年九月賜フ所園林ノ設有リタルコト、八境十景ノ撰定ヲ見タルヲ觀テモ之ヲ知ル可シ。

〇隱居所

霸都時代ノ遊園



寛文二寅年九月、本譽上人へ境景の勝絶する地を見立べきのむき仰ありしあり、麻布一本松よて願われたるよ、やぶて僧房を建させらば、隠料として二百石を添賜へり。其後延寶四辰年四月御修復あり。又元祿二巳年惣御修復あり。同十二年九月又御修復あり。同十四巳年九月三日桂昌院殿御入、法義御聽聞あり。せらば、同十五年五月二日常憲院殿○徳川入御、同十六未年九月八日桂君御入其後度々御入、説法を聞し召せらば、拜領物あり。○下略。同年十月十八日憲廟入御略此外。正徳四年六月廿五日寶曆十辰年八月廿日兩度御修復あり。此後歴世山主現譽大僧正まで、皆縁山辭職の後必ち茲ようつり閑座念佛しをまひ、報壽をおくり、西土往詣の道をまゝはせらばしかど、統譽大僧正病よむるなくおのふをられし後、倫譽大僧正よじめて新谷よ隠棲を造らば、此地よ入せらばたりしあり。法室もあつた、と、修理年々に怠りたる故、今の白壁蕭門も颯々たる風の朝暮におとづれ、禪房閑庭よ春花秋霜徒よ積れる此よとして、蒼天東海此冥々よは壯觀をまつよ人なくして、庭前乃卉木あるじ、寂寥たる月よこふのよ。あゝ、文政二卯年四月十四日たる、禪扉をたゞき、法室の靜處よのぞき、清茶閑座のほいで、新よ八境十景を題す。

閑扉朦月

代々の貫主すませられし書院佛室東よむるひ、万里此海船を一瞬よ見渡し、南北の杜林壯觀をそふ。其春夜の月光秋天の明光よまさらん事思ふてあるべし。おのれ詩哥茂添あんもおこるはしければ、愚題よ景をあるして後人の此地よ清遊吟賦を述ん事を待のよ。

窓前虫聲

貞譽大僧正閑夜の誦經安禪の床よ、虫の聲よ、秋をつけて物さびしくあり、これをうめたる時、

草あげきたれまつ虫の數よ、よ夜さむ茂つけて窓をなくらん  
是より虫の聲のあれ茂ゆるしとて、渡園の草をかりもらせられざりしとあや。

斜徑散步

北よ西に杉の村立あげきたる下あげ、千草百種生そひて、春秋よ咲出ふおのり色よ、此花よをく露の玉さあよとひ來ん人此袖よたまゝありなれ。山主隱座の時よ、荇拂ひもまよめ、このころ有堂よとどり此下あげいと物



さびて、幽夕閑曉思ひやらるゝ事限りなし。天陽院普談の哥とて、  
 百くさ茂さけくる人乃あとまでもみどろつゝ、む杉比下まぢ  
 こくらすよとひ見れぬ、人中よさああら仙窟をうつせるよやぞおもえれ、  
 塵思さゝちよたちて、緩歩あへさをおもひぬ。

垂絲綻花

常憲院殿あつせ給ひ法談を聞せさせられしゆにて、此櫻の枝よ御詠あ  
 どありて、其比の時めきて人もめでつゝ、花の陰よ春風さちてのゝちの詩  
 哥比短冊色紙あど緇素ともよもてまやせしとあむ。又桂昌院殿御入の時  
 と、此樹のかけよて哥よませられ、官女侍尼皆醉裏よたゝずと、法音の妙縁  
 をむまび、安養の行樹を觀想ありしとなむ。遠き比妙譽大僧正うつらせら  
 れし時も、猶官女あまるとひ可いらさ、此樹下よて法の哥とも讀れしも有  
 しとぞ。

山井清澄

此地もとより高く井水又たぐひあし、本譽上人開基あられし時、穿て便井  
 とせらる。今猶數十丈あゝごろ崑穴よして木圍を用ひず。

氷川鎮祠

麻布の氷川社の産子なり。故よ本譽公開基の時産鎮とせらる。憲廟桂君と  
 もよ入御のさびよ、法樂をさゝげ、供物を備へさせ給へり。今の年ふりて叢  
 社そのあま比係をのこせり。

秋園芳草

證譽大僧正と詩文を好む賦興を般舟のいとほまたのしまれしあば、珍花  
 奇草をあつめらさ、春秋乃造花茂觀念のたよりとせられしとなり。されぬ  
 大夫旗下の士女説法聽受のさめこゝよ至り、かへさ乃時よ再ひ草花乃約  
 ありて送られしとぞ。すべて今庭前よ残るる木草ともよ憲廟桂君のたま  
 もの多く鉢よておくり給へるをうつせるもあまよなり。

祖塔蒼苔

開祖本譽上人を葬りし墳なり。年百を過、苔みとりよたゝ、きて暮風をぞ哀  
 色をのこぬ。垣塵埃ををぢちて、夢無常ををめぬ。

かまの八よ此所比境地よありて雅幽の良媒あり。又遠近を一瞬ようあべ、壯觀  
 を一時に争ふよ十景なり。



長傳幽鐘 麻塵炊鐘 總山晚雲 赤橋行客 杜間流螢 芝峯層塔

海路遠帆 孤松膏雨 枯林宿鴉 春天紅霞

この外々筆にあるさび、希くハ文人才子勝遊、我春秋ヲ愛シ、遠近を路亭にいと  
いぼして、あゝに登躋し、百景千觀、予ハあるせる上ニ出て、萬載の外々志を同ふ  
せんことを。

——三縁山志

龜戸天神社  
營造

靈元天皇寛文三年癸卯

三〇紀元二二〇三年

龜戸天滿宮

南武藏國南葛飾郡

神殿以下

反橋心字池等ヲ營造ス。

本。葛西志一

龜戸天神社  
營造事蹟

龜戸天神社營造

龜戸天滿宮ハ、寛文元年太宰府ノ天滿宮ヲ勸請シ、三年今ノ社

地ヲ賜ヒ、神殿以下ヲ營造スト云フ。

略。上近年筑紫宰府の天神を勸請して龜井戸の天神と號す。梅ハ天神の神木に  
て則紅梅殿といふ。むかしより此梅有し事、天神を勸請すへきしるしにや。抑こ  
の天神は、筑紫安樂寺より信祐といふもの江戸へ下り、此地に天神を勸請し奉  
る。はしめは僅かなる宮居なりしか、參詣の人おほく、利益日にあらたなる故、社  
よりはしめて、御手洗の池、拜殿、廻廊、末社まで、安樂寺をうつしてきれいに作れ

り。

——紫の一本

龜戸村

宰府天神社社地三千四百四十六坪。内除地二百六十六坪。二天神橋と云。東壹町餘略。中太

宰府の社職菅原善昇略。中十八世の孫大鳥居信祐といふもの。江戸へ下りて

此村の中ぞど有し天滿宮の小祠を修造して、かの神體を遷せり。時ハ寛文元

年八月廿三日あり。是を元宮天神と號す。その地の今略。中の社地と云。東の方へ六

七町隔りたる所あり。略。中おなじ年の内、たま／＼台命有て、本所方一里の地

を開かき、武家町家ヲ賜て、居住の地とせしめ給へり。その時築地の奉行より、

御旗本の士徳山五兵衛政。重山崎四郎左衛門政。重を略。中しかむ、信祐ありつる事

どもをかの二人へ訴し、翌二年二月十九日時の執政松平伊豆守信綱久世大

和守廣之指揮ありしハ、此社新地の鬼門も當りたるハ、何の幸りぞかんや。此

後當所の鎮守と定べしとて、今の社地を賜へりしと云。同三年神殿以下反橋

心字の池あど至るまで、こと／＼く太宰府の社ヲ擬して作りおせり。此年八

月祭禮の儀式行われしも、まさ太宰府の例略。中にあつひて、神輿をわさせり。か

く大裏にても御信仰淺からざるよと云。神威日々にいちおるしく、年を追て繁



榮の地といふを。まをさき、延寶五年二月十二日嚴有院殿○德川家綱御遊獵のつゐて台駕を枉させられ、御拜有しを、世々の將軍家あむく渡らせ給ひしを、終に享保五年西連歌屋の邊へ御茶屋を建させられ、御休息の所といふし給ひぬ。○中

石鳥居○中 惣門○中 三ノ橋、惣門の内、心字池に架をり、長六間高七尺餘の反橋あり。二ノ橋、おなじ池の中央に架をり。一ノ橋、こきもおなじ。池の北の方○架をり。以上の三橋、寛文中始て造營をといへり。○中 中法華堂○中 東法華堂○中 西法華堂跡○中 辨天社○中 瓊門○中 繪馬所二○中 本社○中 紅梅殿社、本社に向て右の方に有、小社あり。社後、太宰府飛梅の童木一株を植へり。實生あり。變して白梅あり。寛文中の勸請と云。○中 老松明神社、本社に向て左の方に有。こきも小社にて、社後に太宰府老松の實生一株を植へり。延寶二年八月十五日の勸請にて、其比の本社の後、建たせしを、享和年中今の所へ移せり。○中 橘樹、老松明神の側、有。こきも太宰府の實生を移して、寛文中植せりしと云。○中 御供水○中 千本松、御供水の南の方、繪馬所の側、有。童木二十餘株の松林あり。寛文中、北野を移し、植しを、天明六年の洪水より、移して、その木のこき死す

をしかず、その後高辻中納言福長卿の寄進に依て、再びかの小松を植られしと云。吳竹臺、紅梅殿の南に有。こきも寛文中、太宰府より、ひて植たせしと。○中 舞殿○中 木鳥居○中 御嶽社○中 御供水、鳥居の側、有。龜の井といふ。○中 疱瘡神、庚申、竈神、御饌殿○中 若宮八幡、大黒天、合社○中 三輪大明神、淡島大明神、合社○中 客人大權現、福部明神、合社○中 御成門○中 神輿庫○中 兵洲部神社○中 花園大明神社○中 奏神社○中 三峯社○中 五行神、合社○中 神厩○中 西門○中 木鳥居○中 連歌屋、西門の内、心字池に臨て、建。六間、四間、古の東西連歌屋とて、池の兩邊に有し。東連歌屋、後、廢せしと云。○中 梅林、西門の内、南の方にあり。三方にわづある竹がきをゆひまいし。その中、數十株を植。中央に御成御殿跡と書たる標示あり。○中 社記、享保九年四月十二日、有徳院殿○德川吉宗 當御殿へ渡らせ給ひ。時の別當信政へ、藤の發句有べしと仰ごと蒙。夏も藤の咲残るや、水かゞと、おそれ多くも御返答に及びせしと有。此發句のさはよても、御殿の池邊に臨きたる事あるべし。神明社○中 御馬建跡○中 稻荷社○中 愛宕社○中 大和姫社○中 祖神靈社○中 雷神社、八社○中 眷屬社○中 御靈明神社○中 柳神子社○中 天神子社○中 玉神子社○中 荒神社○中 神庫○中 別當東安樂寺、社地



の東北に居住せ。天原山聖廟院と號せ。開基を大鳥居菅原信祐と云。○中社家比良喜和泉略。○下

——葛西志

龜戸天満宮今の地へ營建、樓門心字の池、反橋等成。此年八月祭禮、神輿行列等の地を巡行せ。梅翁句集よ、本所安樂寺の新らよに成さる時、新地よも、くくなるものか梅の核。

——武江年表

元祿十五年二月廿五日聖廟八百齡御年忌、於龜戸御社詩歌連俳令興行一座

梅松やあかむる數も八百所

——五元集

謁龜井菅廟

岸下繫舟入翠微。林間廟宇自依依。古藤花後餘蛇影。夏木綠時見燕飛。未採蘋蘩先致誠。更携翰墨自忘歸。莫論延喜千年事。空使英雄淚濕衣。

四月十六日謁龜井神祠

古藤花映蘩珠宮。廟宇森沈祀相公。萬里謫居悲竄逐。千年遺恨泣英雄。池中魚躍綠蘋水。橋外燕飛黃麥風。此日拜趨無限思。不知幽意幾人同。

此日賞廟前藤花

紫藤四月好歡娛。醉容倚欄興不孤。錦繡何須勞女手。鬢髮還欲撫龍鬚。朶雲勻結機

中字。明月低垂領下珠。日暮廻廊人散盡。空潭花落自虛無。

——鳩巢先生文集

龜戸の藤

暮行春は、惜しめともつななくして四方の霞もたと／＼と、四季に花は皆こゝろみじかくちりゆくがうらめしう、なくにしとまるものならばとおもへど、いかゝはせん、此ころなんしばしがほと木梢さひしう思ひつゝ、けらるゝに、龜戸の藤や咲はしむらんと、ゆかしきに、たれも／＼出たつなるへし。こゝはふた國のはしより廿町あまり東にて、所のさまむね／＼しからず、かやふける家ともおほく、いとひなびたるものから、中々をかしき道のほとなり。されとかたいの女こゝかしこより出來りて、袖にすりよりつゝ、ものこふがいとうるさく、かへりにやとらせんなつきそといへば、御かへりは裏門よりや出給はん、さる事のためはずととらせ給へ、いと賑はしきおものまうでや、おのれらの外は多くもあらしな、わづか五人の中へうら浪ひとつとらせたまへ、いさ下さりやしよと、くちひるかるらかにいふ。かしかましかれと、そらおほれして過れば、何事にや有けんうちつふやきつゝ、ゆきぬるいとにくし、きぬはよけれと、錢はなしなど



いひたるなるへし。とかくものするほとに御やしるもちかつきぬ。このあたりはくひものでうしてあきなふ家多くありて、ことにこゝはしゝみてふものゝよき所にして、なり平とてみな人のもてはやしぬるが、かたちもいやしく色さへ黒きに、いかにしてかゝる名をやつきげんと思ふもをかし。このわたりのわらはべとも、さゝやかなるたらいに水を汲みいれて、惣門の前につとひゐて、手あらひ給へ口そゝきたまへと云ふ。そか中より一二人出来りて、よめな買給へ、土筆もとめたまへやと云ふをみれば、髪は赤熊さくまかふりたるやうにて、袖のあたりはことにあかつきよごれたるもあり。はらからにや有るらん、みのむしのさまにおひて来るものあり。いつれもくきたなけなれと、にくゝしもあらねば、かふ人もありぬへし。さて御社にうち向へは、まへなる池に三つの橋かゝれるか、そりはし二所はかけわたして、このかたはらなる藤の花にそちりにし櫻のうらみも取かへすへく、めもおとろかれぬるよ、松にかゝりておもしろうさきみたれたるか、いとえんになまめかしう、いかなるものゝゆかりにやと、ねたきまてに思ひゆるるゝ花の色なめりかし。ことにはしの右ひたりより、池の上におほひかゝれるかわたり十たけあまりにもおよひたるを、橋よりみればみ

なそこまでも花もてうつみたるやうにて、紫深くともいはまほし。こゝより樓門をいりて御やしる拜み奉ること、いとかうくしうたふとくぞおほゆる。事にあまり人の多くもいりこされば、をのづからうかはしき事もなく、心のどけくぬかつき奉るへし。ひかしの方なる妙義の御社は、上野の國よりうつしまつれりとなん。この外末社の官居おかみつゝ、さるにてもふちなみのたちさるかた、池をめぐりて見たせは、橋のらんかんにしたひかゝれるさまは、たゝ紫の雲のやうにて、よのつねの色とおほえす、夕暮いとゝ、色まさりぬへけれど、入相の鐘におとろきて、おのゝ家路にかへるなるべし。その御社の事たつね侍るに、寛永の頃信祐といへる人、しらぬひのつくしより來りて、かしくもおほやけの仰事を蒙り、それよりこゝに御社をたてゝ、あまみつ御神をまつりたてまつる。かの安樂寺あなぐらより他の國へうつしまつれるは、こゝより初りけるとなにかたりつたへたる。

——ひとともと草

〔附記〕 阿部氏別墅

所謂忍城主阿部忠秋ノ別墅ハ、恐ラクハ麻布百姓町區霞町ノ邸ナル可シ。

仲冬十五日遊忍拾遺君忠秋阿部別邸賦即景



菜圃需恩足。松陰石經紆。心清香一炷。汗潤茗三區。階下鳥爭食。洲邊魚入罟。溫公雖獨樂。却覺與衆俱。○寬文三年。

——梅洞林先生詩續集

樂只園築造

四年甲辰○寬文○紀元二三四四年。秋林春勝○鷲峯。樂只園記ヲ作ル。園ハ三次○備後國。

邑主淺野長治○因幡守。甲邸ニ在リ。○鷲峯先生林學士文集。

樂只園築造事蹟

樂只園築造 淺野長治上邸ハ、正保寛文兩圖櫻田井伊邸ノ南、藝州淺野氏霞關邸ノ西北ニ載ス。寛永圖ニハ、長治ノ父長晟ノ下邸ナリシコト見ユ。

樂只園記

靈囿靈沼之樂。周雅詠之。梁王沼上之樂。孟子論之。何氏之園。少陵作詩。獨樂之園。迂叟自記焉。因州太守淺野君治○長。江城之下。第宅之園。高低之境。遠近之詠。可以樂者許多。名曰樂只。一日應其招。吟步園中。則花樹之美。水石之勝。談豈容易。堂之南園有松林。其中有沼。種蓮以獨愛爲名。取諸周子之語。竝其西有井。建石爲欄。拔灌花二字於張卽之墨痕刻焉。其上有山。號止靜。蓋擬艮卦之象。山上穿地道。引多麻川之水。水自巖穴飛流。其麗如玉。其長十餘丈。殆如龍尾。聊形容之名。玉尾瀑。且多麻二字。其訓與玉字合。則於多麻川之尾流之義。亦的當。其泉之美。觀于堂。觀于寢。在斯。偏好。在彼

亦奇。固是園中第一之絕觀也。瀑溜迸落爲池。以清淺名之。小石剝剝。可以激焉。群魚潑潑。可以觀焉。池中有石。形如龜背者。命龜曝之名。乃是池晴。龜出曝之髣髴乎。其西岸之長。似虹蜺橫曳之勢。以虹飲爲之號。傍池而北。則有門。扁爲飛二字。是亦卽之墨痕也。其下有細流。透門過寢之前者。稱一帶流。其畔有小店。曰觀瀾。倣孟子之言。聞其所倣。而其所慕。可推知焉。件件總稱曰園中十境。由店戶歷馳驅之場。而開柴扉。深入幽徑。脩竹夾其左右。號翠密洞。出洞至高岡。則栽花之畦。區別彊場。名聯芳塢。又進步則有磴壇。稱待月榭。樹上概一字。曰吞海亭。東望則大洋漫漫。層瀾浩浩。雲水一色。征帆萬里。是岡上無雙之大觀也。亭前有軒。端松以藤戶部小倉之詠爲之證云。其南關長溝架石橋。其下一派者。玉尾瀑之所出也。故呼爲逢源。疇是亦據孟子也。北眺則紅葉山之神廟。輝夕陽。以照群國。西城之粉堞。映金殿。而臨多方。當隔海之東。覽鴻臺之古戰場。指千葉山之遠林。則房總二州。亦連烟霧之鄰。近而送霞關之歸鳥。於巽方。對愛宕之雲樹。於正南。其餘景象。不可勝計。標其大槩。總稱岡上十二詠。維此十境。十二詠。應其請。與子弟共探闡。分題焉。少陵之作。雖不可跋及。然園中豈劣於何氏哉。太守朔望拜趨之暇。弄花於塢中。洗暑於瀑布。待月於榭頭。伴松竹於歲寒。或獨樂于此。或與衆樂于此。其賓客滿堂之樂。非池流之動乎。客去寂然而樂者。非止靜之山乎。果其



孰與迂叟之樂哉。方今國家太平，而太守亦蒙鴻庇，其封邑數萬戶，一家和樂富庶，想夫封邑本也。園境末也。不有封邑之優，則豈得園中之樂乎。乃知先治其封邑，而后樂於園中。則詩曰：樂只君子，可庶幾而名園之意，不爲虛談乎。況夫太守平生寄心於儒風，則觀瀾之眼，可有所著，而逢源之工夫，待所自得乎。自得之則居之安，居之安則身脩家齊，封邑治，而園中之樂亦長也。其如此，則所謂賢者而後樂者，園林云乎哉。山水云乎哉。甲辰○寬文四年。秋○侯爵淺野家回答ニハ、寬文四祀甲辰亥月二十二日記。官賜弘文學士院林子。下有リ。

—— 鷲峯先生林學士文集

園中十境

玉尾瀑

弘文院林學士

園中有山山有泉。一派細流瀑布懸。濺沫不舍晝與夜。非是銀河落九天。鑿開激行通地脈。多麻川尾長水傳。多麻二字訓爲玉。玉尾之名非無緣。況其瀑泉清湧出。山光磨成美玉駢。奔流直下數十尺。水勢飛落龍尾延。壁崖迸巖園池洒。混々不濁貯清漣。近疑縞練脫機外。遠看珠簾垂檐前。花柳浸枝愈潤澤。綠樹倒影特新鮮。楓葉流紅如濯錦。雪紛飄素似擗錦。青雲界破朝日浴。黃昏練漉庭月旋。浪高忽點躍魚額。雷響幾驚宿鳥眠。若有騷人來遊歷。亭前漱玉憶坡仙。試使汝湯勸醉飲。指爲酒泉可流涎。或有

巖栖栖遲者。洗耳濯纓保天年。更就武人身上說。廣利佩刀不須穿。誰於此下談固易。蒙卦兩象良坎連。兩象之意君知否。果行育德在這邊。古昔君子德如玉。力行不懈首尾全。匪啻瀑泉呈壯觀。玉尾之名豈偶然。—— 侯爵淺野家回答

淺因牧治○長。席分賦其岡上廿詠。余得三詠。

楓山夕陽 十景之內。

殷栢夏松何處求。霜楓映廟晚山幽。夕陽添色滿林錦。衣被扶桑六十州。

待月榭 十境之內。

榭頭回首暮雲隣。要見纖阿引玉輪。應是陳王禾宵宴。先教風伯掃芳塵。

灌花井 十境之內。

灌白滌紅勞汲引。幽根帶潤兩三疇。干英百藁不違約。短綆矮瓶無暫休。豈使元功讓甘雨。唯知芳意屬清流。春來定有賞花客。試問主人投轄不。

同席卽興同藤倉部韻。

秋風掃席冷松陰。靜話悠悠夜已深。幽洞泉鳴疑有雨。驚看佳月到天心。○寬文四年。

—— 梅洞林先生詩續集

十二月十五日壬申

○寬文四年(紀元二三二四年)○壬申(三正綜覽)

德島

○阿波國

城主蜂須賀光



蜂須賀氏目  
黒別業事蹟

隆波○阿別業ヲ目黒○武藏國ニ賜フ。

○侯爵蜂須賀家回  
答。小澤園林雜記。

蜂須賀氏目黒別業 侯爵蜂須賀家回答ニ、

一、寛文四年十二月十五日於目黒下屋敷被下。

ト見ユ。小澤圭次郎筆記謂フ所ノ白山山莊是歟。同筆記云フ、

蜂須賀侯白山山莊

白山山莊ハ、江戸城南ノ白金町八丁目北側ニ在テ、阿波國徳島藩主、蜂須賀侯ノ別墅ナリ。東ハ五島侯及大村侯ノ兩下邸ニ接シ、西ハ小徑ヲ隔テ、松平讚岐守侯ノ下邸ニ隣シ、北方モ亦小徑ヲ隔テ、松平和泉守侯ノ下邸並ニ光禪寺ニ相對スル境域ナリ。此山莊ノ林泉景勝ヲ録セシ者ハ、世ニ傳ハラザレドモ、幸ニ屋代弘賢カ、文化元年四月、此莊ニ遊ヒシ時ノ記文、原稿ノ存在シタルヲ以テ、僅ニ其面影ヲ今日ニ髣髴スルニ足ルモノ有リ。原稿ハ、屋代氏ノ自筆ニテ、鼻紙ニ認メタル者ニテ、山莊遊覽ノ際ニ於テ起草シ、脱稿セザルヲ以テ、其文章ハ未タ結尾ヲ完局スル能ハズ。此稿本ハ、今ヤ螢澤散人加藤直種子ノ所藏ニ係ル。散人親ラ之ヲ淨寫シテ我ニ贈リ、圖書編纂ノ資料ニ供給セラレタリ。我之ヲ屋代氏ノ原稿ト、對照校讎シタレトモ、猶未タ明瞭ナラザルトコロ多シ、姑ラク疑ヲ缺キテ、其儘ニナシオク者ナリ。明治三十一年戊戌二月、醉園居士、小石川區丸山町廿番地ノ僑寓、天雀堂ノ南軒ニ識ス。

阿州侯白山山莊遊覽の記

輪池屋代弘賢撰

文化元年、卯月はしめの八日、やしなひ子清通と共に、阿波國の太守の老るゝね乃山莊見よまある。けさ巳の時ぞかり、そのかたさまの露口□□立よりて、いざといふよ、うちつれて、まづ三田の別邸よに住める森田專珍をとふらひて、ともに老るゝねよいさる。去年よりのあらましよて、此の專珍、よろづにものして、事なりぬとて、げふぞ思ひさちける。去の日頃、くもりがちよて、きのふも村雨ふりなどあければ、げふの空うしろめだかりけるよ、朝よりいとよくはきて、心よかゝる雲もなく、いとうれし。この山莊の東南よ向ひさる門を入りて、左右よ長屋あり。右よ折れて行けば、あゝのあづかりを、坂本門藏といふ、その手さきものをおあいまて、園中よ入りぬ。園は長屋のなかばより西よ折れて、北東よゆけば、右よかりそめなる木戸あり。此の木戸を入れず、うちひらきさる芝生に小松おほくあり。まづうき世をよそのけしきよ、はかなき小艸の花すらも、いとなつかしく見ゆ。



此の小松を分け下まば、ひろき池あり。左よいと高き樅の二木三木とて下にて、茶屋一かまへあり。そのまへに、芝おひたる土橋をわたりて、たつみやむらひて、小ぐらくあがりたる、木りげをのぼれず、いと山ふかきあちして、おくは稻荷の祠見ゆ。左よ臺のさましする所あり。そこよのぼりて見れず、おもひしよりも高くて、今おしかと、目のあさよ見ゆ。むらひは茶屋あり、右よ神社あり、左よ小松原あり、前よ池あり、橋あり、茂林あり、脩竹あり。おとに楓樹おほくて、わら葉の風よなびきする、心のすゞしさいふもさらなり、いとひろき山水の木立ものふりたる、わすれては園のうちよあらで、おのづからの野山かとたどらる。

聞きしより見るはまさりて園のうちよあらぬ野山のみとりそふりげもとの道よおりて、稻荷の社にぬるづきつゝ、前なる坂をくぐまば、半よ小亭あり。杉のはしら、竹のゆかなり。すべて竹もてかまへれば、竹亭などいふまや。うちをのぞきたれど、額かゝれり、大篆もて、松竹庵とかけり。おの坂をくぐりつくせば、左よ池のめぐりたる所よ、土橋をかけたり。それを見ながら、むらひの坂をのぼる。おのあさり、いとおほきなる竝木ありて、おとよものふりたり。猶行けむ、椎の古木あまゝあり。木高きさま、源三位頼政卿のふることまで、おもひ出られ

て、その頃のものとや、おどとへば、いな、この園は、七十年ばかりさきよ、買ひしあり、そのほど、三尺ばかりの苗を、うゑたりと、ふるきものゝいひつたへしあり、土地のこえさきば、木のよくそごちぬるなりといふ。猶ゆきくゝて、足たゆきまで、めぐりありきて、柿園、梅ぞのあどとほりて、観世音のいます前を過ぎて、坂をくぐりたれど、はじめ見て過ぎし、茶屋にいさりぬ。人よ従ひて内よ入れど、事そぎさるさま、いとをやし。南それの家よて、東西よも、あかり障子立て、簀の子めぐれり。北よ床の間あり、その次一間あり。又その次の一間ある所よ、座をあらめて、池よのそみ居て、新樹を見る。おは、東南よむらひぬらん。あないせし人の、此の園のさくら、かえでおほくあり、春も秋もあらむこそ、折も折とて、けふとく来たまひしぞ、のまりおほきことゝいふを聞きて、

見すともけふをせよせん花もみちその春秋をおもかけよして、さくら、かえでおほくあれど、春秋をさらなり、いま青葉の色、いづくよもあえて見所あり。鳥の聲、風の音より外よ、又音なふものともなく、世ををあれさるさま、いとすゞしといへば、雪よわけ見ましかぞ、いかならんと、清通をいふよげにさなりとて、



四の時その折々のながめをも外よとめぬるるねの園四十からよ似て、いと小さき聲のするを、なにからんと問へば、すあはち四十からなり。世よはわたり鳥といへど、まゝは常よ居て巢りけあどすといふ。ほゝ鳥も啼き、水こひ鳥も鳴きぬ。かゝるをかしき所に來て、なまのゆれさるねをのまなくらんと、聞かまほし。見るも聞くも、みあめづらかよて、おもひのこさぬ折あらあるに、郭公の一聲も音つれざるぞけふのうらみなりける。むかひの岸に、藤の花さかりあり。あすは、太守のいらせ給ふと聞きて、

池水のきしにかゝる藤浪もあすのためとやさきのまりけん

門藏あとより來て、うす茶たて、たうべけるかたじけなきを、

夏木立めさまし艸の情をもけふくみそへし庭の池水

まゝを出で、もとの木戸よいづる。右のかさよ、草花あまさうゑあべて、いとをか。し。所あらまや、同じ木艸も、色ことに見えさり。木戸を出で、すまし行けど、右にいかめしき門あり。まゝは太守の母君をばうふりける所ありといふ。ことさらに、おゑみ見まほしといへば、さらむとて、その方にああす。かのいかめしき門のうち、十歩ばかり入て、唐門立てり。右よ手水鉢あり、石よてつくれるよ、眞文

宇にて、顯若といへる銘ゑり付てあり。專珍が書るなり。唐門は、楓の木もて作れり。木地よて、もく目うつくしきよ、菊から草のにくるみのあな具よ、まゝねの色。の菊の座うちさり。屋根は、あかぢねもて葺きて、黒く塗るに、棟のこぐちよ、黄金の萬字を附されむ。夕日にかゝやきて、まぢゆきまで見ゆ。豎も横も、十歩まかりもやあらん。四方よめぐれる垣も、みあ木地なり。上のかたよ、楯形の窓あけて、青瑣をまあび、菊花の瓦もてふきさり。唐門の内、石だゝみかぎの手よ布きて、おきつき所よ、いとる道とせり。右に神道の碑立てり。圭首ある高さ□尺、ひろさ□尺、あつさ八寸あまりの石を、玉とみぢきて、銘文ゑりたり。龜跗は地盤と、ひとつ石をそのかさちにきぎみ成せるなり。

おきつき所は、横二歩あまり、豎三歩まかりよ、高く築て、石のいかきあまはして、正面よ扉あり。その内よ、いとひろき拜石をすゑて、奥のかたよ、まろくたかき塚見ゆ。其前よ、高さ□尺、ひろさ□尺の石文立てり。墓表とす。

これも專珍が書けるなり。神道の碑の前に、廬橋一もと、西の垣にそひて、七かまど四もと、木玉二もとうゑられたり。よの二種は、なるかみをよけぬる木とかやにて、御まかのまもりと見えさり。西に脇門あり。その外よも、石の手水鉢あり。こ



れまうちの人のためとぞ。されまも、八分字まで、鐘潔敬と題したり。これもまも、  
專珍が筆のあとなり。そのかゝらまら、小屋をかまへて、番をする人をするより。  
唯ひとり居て、まもかのめぐりを、夜行すとぞいふある。さても、此のまもあの作  
りみあゝれさるを見れむ、太守の御孝養のうとさをおもひ、茶屋の事そぎさ  
るを見ては、儉素のかしこさを知らる。

なきたまにつあふる道のかしこさに心つくを神やあるらん  
行すゑもときのかきまよさあふべきおやのまもりいままもくちせて  
などおもひつゞけ、此のまたまのいさをもかしあく、太守のまもろも、かゝる  
けなく、いがあるおほんちぎりなりけんと、涙せきあへず。

白山山莊斷案

醉園居士小澤圭次郎

按スルニ、此時ノ莊主ハ、從四位侍從、松平阿波守治昭侯ナリ。國主大名、高二十  
五萬七千九百石餘、阿波淡路二國領、居城徳島、此治昭侯ハ、賢明ニシテ右文左  
武、能ク藩國ヲ治メ給ヒシ由ナルカ、侯ノ息女綱姫君ハ、我カ舊藩先君、白川少  
將樂翁公ノ世子定永侯ニ嫁シテ内室タリシカバ、樂翁公ガ文化元年甲子春  
二月、京都北野菅廟ノ神庫ニ奉納セラレシ、天滿宮御略傳繪卷物ノ詞書ノ一

段ヲ、此侯ノ揮毫アリシコトヲ、公自跋ニ記載セラレタリ。蓋シ侯カ母君ノ墳  
墓ヲ、此白山山莊内ニ築成シテ、其詞堂ヲ最莊嚴ニ建設セラレシハ、頗ル異舉  
ニシテ、苑圍上ニ於テハ、絶無僅有ト謂フ可キナリ。屋代翁カ監園吏トノ問答  
ニ據レハ、凡ソ七十年前ニ、此山莊ヲ購得セント云ヘリ。然レバ、享保年間ノ抱  
屋敷ニシテ、其頃三尺許ノ椎樹ノ苗ヲ栽培セシモノガ、文化ノ初ニハ、既ニ拱  
ヲ成セシコト、此記文ヲ以テ、之ヲ徴知スルヲ得タリ。又此莊ハ、櫻樹・楓樹最多  
クシテ、春綉秋錦ノ麗景美觀ニ富贍ナリシ由ハ、園吏ノ言ニ演シ所ナレトモ、  
惜ムラクハ、他ニ好文章ノ記載アラザルコトヲ、抑モ當時、大小列侯ノ園圍中  
ニハ、此白山山莊ト齊シク、佳麓ノ林泉有レトモ、世人ニ知ラレサリシ者甚鮮  
少ナラサリシ事ヲ想フベシ。

六年丙午〇寛文〇紀元  
二〇三二六年。雜司谷鬼子母神〇武藏國  
北豐島郡。堂舎ヲ營造ス。是

ヨリ來リ詣ツル者漸ク多シ。〇紫の一本、江戸砂子、新編武藏風  
土紀稿、江戸名所圖會、武江年表。

雜司谷鬼子母神 雜司谷鬼子母神寛文六年堂舎ヲ營造シ、是頃ヨリ來リ詣ツル  
者漸ク多ク、延寶天和ヨリ元祿頃ニ亘リ、賽客群集ス。

雜司谷鬼子  
母神事蹟

雜司谷鬼子  
母神



鬼子母神社 村○武藏國豊島郡雜司ヶ谷村ノ鎮守ナリ。圓満具足神大黒天ヲ配祀セリ。相傳フ、當社造立ノ由來ハ、永祿四年五月村民丹右衛門ト云フモノ村内小名清土ノ畑中ヨリ一ノ佛像ヲ掘出シ、地主柳下某カモトヘ持行テ、カクト告ケルニ佛像ナレハ法明寺々中東陽坊ヘ納メ然ヘシトテ、彼坊ニ安置セリ。其後安房國ノ旅僧來テ彼像ヲ奪去シニ、歸國ノ後、狂亂シテ云、我ハ是雜司ヶ谷ノ鬼子母神ナリ、イカテカ此地ニ移ルヘキ、急キ舊地ニ復スヘシトナリ。ヨツテ其由ヲ懺悔シテ東陽坊ヘ返セシヨリ、僧俗トモニ參詣スルモノ夥シ。斯テ天正六年四月今本地堂ト唱フル稻荷ノ社地ヘ假初ノ社ヲ營ミ安置セリ。○中其後寛文六年松平安藝守光晟○淺野ノ室法名自昌院英心日妙カ寄進ニテ、今ノ如ク宮殿拜殿等新ニ造營アリシヨリ、世ニ聞フル靈地トナレリ。毎年正月十六日奉射祭ノ式アリ。又近キ年マテ六月草薙ノ祭ト云モアリシカ。今ハ廢セリ。十月八日ヨリ十八日迄ハ、日蓮影供ノ會式ナレハ、參詣ノ人群集シ、イト賑ハヘリ。法明寺寺中大行院持。

——新編武藏風土記稿

鬼子母神堂 雜司谷ヨリあり。法明寺の支院大行院の持なり。○中天正六年戊寅四月十日ヨリ始テ斧を下シ、同五月朔日、經營落成シ、○中其後寛文六年ヨリ至リ、自

證院殿新ヨ寶殿を造立せらる。今の本殿是なり。自昌院殿ハ、加州黄門の息女ヨリして、安藝太守の令室也。

此地ハ遙ヨ都下を離るゝといへとも、鬼子母神の靈驗著明ク、諸願あやまゝに協給ふる故、常ヨ詣人絶えを依テ門前の左右ヨリ貨食店軒端を連ねたり。十月の會式ヨリ、殊更群集絡繹として、織るゝ如し。風車麥藁細工の獅子、川口の館を、此地の名産と云。又當山ハ花の名所あり。近年境内ヨ櫻數多植テ、往昔ヨ復せしめんと云。

延寶天和の頃、雜司ヶ谷群參の輩此地○高田馬場ヨいさり、賭的、大的、小的、騎射其

外能囃子土佐外記放下の類出テ賑ハしありしとなり。

——江戸名所圖會

雜司ヶ谷 目白不動のさき鐘の銘僧司谷とあり、もとの寺は法明寺といふ。六老僧の御影あり。寺は東陽坊といふ。本堂より手前に鬼子母神の社あり。其あたり茶屋あり。七月十六日の夜、本堂の前にて年毎に相撲あり、近郷の百姓大勞集てとるなり。

——紫の一本

鬼子母神の前ヶ谷○雜司。茶屋町あり、そま切の名物也。

雜司谷八境 星跡清水。御嶽夜雪。姿見橋鷺。絃卷川螢。威光山花。三島神籬。鼠山



木玉池箇谷月。

——江戸砂子○享保十七年。

此年間○元 記事雜司谷鬼子母神參詣群集する事始る。江戸町人伊勢屋武兵衛といふ者社を再建す。

——武江年表

雜司谷にて

——五元集

山里は人をあられの花見かゝ

雜司谷道中作

籃輿遙涉草萊中。古木深藏古梵宮。茅舍雞鳴村遠近。板橋馬度路西東。干林露下望將夕。萬壑水流聽不窮。此日忻逢晴景好。猶自回首向秋風。

——鳩巢先生文集

附記  
汐干狩

〔附記〕 汐干狩

是頃ヨリ行ハレタル者ノ如シ。深川・洲崎・品川等其所歟。

龍宮もげふは江戸なり鹽干狩

左京 政 信

——江新道○延寶六年。

品川沖 爰にて漁船を引魚を釣江都に送る。例年三月三日潮干にも蜃ヲ拾

ひて遊ぶ所ス。江渚此をとりは漁樵して魚蝦を友なふともいひつるきや。向よもるあふ見ゆるの房州浦ス。孟秋のころよりして江都此老若小船に棹して蜃蝦を餌として少魚を釣なり。

——江戸鹿の子○貞享四年。

品川沖 爰漁船おそく網を引魚を釣沖のあめ万興あり。毎年三月三日鹽干乃眺望住吉乃沖よひとし。

——國花萬葉記○元祿十年刊。

永代島八幡宮奉納

汐干なりたつねて參れ次郎貝

親にらむ比目魚を踏ん汐干かゝ

紀の國の鯛つりはきて汐干あゝ

——五元集

三月汐干此所○深川 洲崎○中 よあそふ品川と同じ。

——再校江戸砂子

洲崎辨財天社○中

此地の海岸にして佳景あり。殊更彌生の潮盡みの都下の貴賤袖を連て眞砂の文蛤を搜り、又の樓船を浮へて、妓婦の絃歌に興茂催きもありて、尤春色を添るの一奇觀たり。○下

——江戸名所圖會

汐干 當月○三 とり四月に至る。其内三月三日を節とに。南風烈しなれは、汐



乾兼るあり。凡潮汐の來去、國所よとつて大に違へり。又四季にて遅速あり。月の大小、亦とりても一定しあさし。或人云、今世は朔日を六時四分の満と心得ざる、大坂の汐あり。朔日正六時を満と定て可ありといへり。

芝浦、高輪、品川沖、佃島沖、深川洲崎、中川の沖。

早且とり船に乗して、まゝの沖に至る。卯の刻過をり引始て、午の半刻より海底陸地と變ま。亦、におりさちて蠣蛤を拾ひ、砂中のむら宛茂ふを引残りたる淺汐より小魚を得て宴を催せり。

——東都歲事記

あほひの記

文寶〇龜屋久  
右衛門。

彌生の空うらくとはれ渡りたるに、あほひ瀉みんとて、人々品川と云ふ所へいたりぬるに、こゝはあつまよりみやこのゆき、にして、五十あまり三の驛路のはしめなれば、旅人の登りくたり、あるは送りむかふなど、こよなうにきはしう、まいて海のおもていとのかに、たゞみきたるやうなり。一里あまりも沖の方には、諸國よりおくれるあきものなにくれとなく積來りし檣垣といふ大きな船とも、みなこゝにうちつとひつゝ、出船入船たゆる時もなく、大江戸のしけくさかゆる、いかにいふへくもあらず。此あたりゆきかふ

小舟などは、たゞくろきもの、はしるやうにて、遠くをゆく帆かけたる船は、うごくともみえねと、今までそこにありしも、かしこにゆき、あとに見えしもいつしかこゝに來る。はるかに見渡せば、安房かみふさの山にも霧渡りて、繪にもかゝまほしきさまなりけり。こゝにつとふ人々、思ひくゝに舟つなきて、老たるも若きも、男も女も、うちまじりつゝ、こゝかしこもとめありき、貝ひらふさま、いときはしう、ことたらぬひなとはいはし、都人にも見せまほし。舟の中には酒のみものくひ、拾ひし蛤など、とみにてうし、ものするもあり。あるは時めく一ふしもの、音にかよはして、うたひつゝ、ゑひたるまゝに、あしもともおほつかなう舞たはふる、もおほかり。あるはわかき女のうつくしきか、はきたかうかゝけて、そこらうちわたれるを見るにも、むかし何某のやま人の、雪のあしふみはついたるとか、さも有けんと思ひやるさへをかしう。沖のかたには、あみふね釣ふねなど、さまゝにして、笹みよみつあひ蛤蒔などいへるは、みゑ海の上の名ところにて、すなとりにたよりある所となん聞傳る。此ほかにもなほ有ぬへし。こなたのかたはらには、遠めかねといふものを見するをのこの、口つきまめやかにいふをきけば、こゝより北の方は佃島、石



川島はるかむかふなるは行徳といふにて、しろきものゝみえ侍るは、村長何かしか家なり。かしこにて壁のしろきは彼の家の外さらになしなど、いきもつきあへず、いとしたりや。とかくするほとに、はや汐もさしなんとて、たれもいそぎふねに取のりつゝ、見るかうちにはやうちよするしら浪のかへり見かちに漕出せるなるべし。中にも若きをのこらは、今日の汐干をさちにして、此宿のあそひの許にと、まるもありて、今宵はいかなるかひをやひらうらんと、ともにわたりても見まほしきそかし。すへて賑はしきはこゝのみにしもあらず、行徳、深川、洲崎など、海ちかき所、あるは野やまの花の木のもと、いつちもいそせう人のむれ来て、大江戸のひろうにきは、しさいひつゝ、けはことゝしううたてくなりぬへく、濱のまさこのよむともつくましう思ひ侍るになん。

——ひとと草三〇文化

松平氏三田別業

七年丁未〇寛文〇紀元八月廿八日庚子〇庚子、三正綜覽。福知山〇丹波國。城主

松平忠房〇主殿頭。三田二丁目〇市内芝區。二邸地ヲ賜フ。勝景有リ。〇寛政呈譜。續

江戸砂子。

松平氏三田別業事蹟

松平氏三田別業 松平忠房淺草ニ別業有ルコトハ已ニ之ヲ記ス。是ニ至リ轉ジテ三田二丁目京極高國〇丹波國。後守。上リ屋鋪ヲ受領ス。高國寛文六年封地ヲ收メラル。邸地亦上收セラレシ者ナル可シ。

忠房從五位下主殿頭。叙四品。後大炊頭。初五郎八。

〇上略。同文。七丁未年八月廿八日常盤橋淺草兩屋敷御用ニ付差上、三田二丁目

京極丹後守〇高國。上リ屋鋪被下置候。——寛政呈譜

月波樓 三田松平主殿頭殿別莊看樓の號之。此地の眺望洞庭の多景を縮めるりおとく、岳陽の大觀をうつそよ似たり。城南第一の勝景なるよし。又泰山府君の櫻、八入の楓二種の希珍あり。羅山子の東明集よつまひらりなり。

——續江戸砂子〇享保二十年。

附記 松平氏千代崎抱屋鋪

千代崎松平主殿頭肥前國島原へ移封セラリ。抱屋敷ハ、御府内場末往還其外沿革圖書ニ、

白金村今里村三田村中下之内〇中略。

一、右地所之内、當時東之方松平主殿頭抱屋敷貳ヶ所〇中略。延寶年中者東之方

霸都時代ノ遊園



松平主殿頭抱屋敷貳ヶ所略。○下

ト有レバ、延寶頃ハ已ニ其抱屋敷タリシコト明カ也。衣掛松ノ傳説有ルノミナ  
ラズ、泉石ノ設備亦之有リ。○尙文化十二年ノ條ヲ看ヨ。

小崔嵬松平主殿頭千代  
崎別墅追加三詠。

石徑自榮回。烟雲任去來。陟高望已久。誰又酌金甌。

微霰巖

怪岩微霰零。濺沫玉玲瓏。非雨又非雪。靜中敬耳聽。

大畜嶼

輕舟川利涉。雲嶼送微風。星似連山象。天衢亨又通。——鳳岡林先生全集

〔參考〕 鳳岡林先生全集又左ノ詩ヲ載亦或ハ本屋鋪ニ在リシ者歟。否歟。

飛白亭即事松平主殿  
頭別墅

瀑溜懸泉落。雄瞻驚我聞。水光籠暮靄。樹色染晴雲。新畫丹青妙。怪岩黑白分。清

風何處所。花氣自濃薰。

千代り崎 永嶺村の内也。目黒の邊ニ。松平主殿頭殿下屋敷の所。

絶景觀 同所同館別莊の號なり。其閑寂無爲、自然の徳、其地と相應して佳

景の地也。

——續江戸砂子

藤君辛卯漫筆九月條 島原侯別庄

九月廿三日、侗菴○古催ニる。目黒爺茶や在方の島原侯別莊ニ遊ぶ。此遊已

ニ三度め也。前日侗菴より其事告來ル。早天松陰櫻墩と約して通鑑を會讀。故  
ニ其事終りて可行と、野村篁園ニ書を以て告置。庄ニ至るよ、大手前より南  
方白金へ出て長濱ニ至れ、稍近し。予街名を忘る。故ニ路を迂して目黒ヨ  
行。老爺茶屋行、莊を問て漸く至る。侗菴、篁園、石川秋帆、土屋□ヨ來り有。藩  
の□氏□氏皆兼る知る所也。會津藩牧原只次郎儒者是も來ル。跡より翠  
岩設樂氏謹兒も來ル。例の亭ヨ至る。扁額

千代崎追加十境 窮目樓、小崔嵬、洗詩亭、踏雲橋、玉簪沼、微霰岩、太古標、大畜

嶼、小畜嶼。

庚申春日 鶴山宜卿

侗庵石川謹兒等池ニ釣して興甚。小鱗數尾を得て大ニ悦ぶ。池ハ新田義興の  
妾千代といへるヲ義興死せしを以て不堪。悲、此水中ニ投して死せり。節操可  
感歎。衣を懸る松ありしヲ、今ハ取し。昔年枯稿は、今僅ニ一株ありて、古を慕



ふこゝる。莊亭西面して、富士直西あり。一目可觀。先遊已に再度あれとも、陰雲見る事を不得遺恨取りし。本日晩天甚晴て、暮日其山の右邊ニ落、山色如畫、一點此障目の物取し。興趣不可言。加之池之瀑布、初遊已ニ水枯て簾を不見。再遊纔ニ飛流ありし。纔ニ其勢を見るよき。本日瀑聲如吼、水勢□迅、泉簾妙致、不可言。今日此二奇を兼并て我有と取、眞ニ不可得の佳境、四美兼りといふべし。莊中逍遙數度、巨竹數章、勢天をつく。楓葉纔染、且天氣清朗、大ニ前遊の恨を償よる。薄暮庄を出て、白金より赤坂を過、番町ニいそぎ、飯田町より牛門を出て、手を分つ。石川、翠岩、土屋氏等早く散、篁園例の親眷の家を□訪ふ。故よ是も早く辭し去。詩二首を止めらる。我輩不成、曳白して退く。侗庵書生四五人陪せり。牧原氏□氏酒人也。頻ニ傾く。書生中一二輩酒人ありて相對して酌り。石川氏設樂氏尉傳を侗庵ニ送らる。□亦些の佳肴を設く。牧原氏の□二子と同居残りて諸具を擲擲して去へしと辭せり。家ニ歸る時の四ツ過く。少し其趣を謝せん。あゝめ、燕詞を呈せり。

——名園記

千代崎

不忍池中島架橋

不忍池中島架橋事蹟

目黒村下目黒村ニアリ。行人坂ノ北ニシテ、上大崎村ニ界ス。舊島原藩松平氏別墅ノ地タリ。高丘ニシテ、小池アリ。池邊ニ古松アリ。衣掛松ト稱ス。里傳云、新田義興矢口渡ニ死ス、其室之ヲ聞キ悲悼ニ堪ス、衣ヲ此樹ニ掛、池水ニ投シテ死スト。

——武藏通志

是年

元〇寛文七年〇紀元二二二七年

不忍池中島架橋

傳フ、  
〇市内二橋梁ヲ架ス。

〇東叡山縁起。續江戸砂子。昌平志。

不忍池中島架橋 傳フ、

〇上 寛文中、渡于長橋、常通群詣。

——東叡山縁起

篠輪洲中嶋 むかしハ小船一艘ありて、參詣の輩おまよ乗りてこゝる。其時の祠ハ、今北の筑出さる小嶋聖天宮のある所なり。尤嶋の中ニ坊舎もあし。寛文末ニ通路の道をつくり橋をこゝに、靈驗比辨天さるあゆへ、日にそへて榮え、今花美の社頭とあれり。〇下

——續江戸砂子

寛永壬午〇十年。僧天海與伊勢守水谷勝隆謀、新築洲於不忍湖。〇中 寛文丁未〇七年。

——昌平志

増築甬道、架以石橋、以便往來。

觀櫻漸盛

八年戊申

〇寛文〇紀元二二二八年

二月、是頃江戸士民ノ櫻花ヲ賞スル者漸

霸都時代ノ遊園

四四一



ク盛也。東叡山○市内下谷區ノ花見ヲ第一トシ、淺草觀音○市内淺草區之二次

グ。其餘谷中感應寺○市内下谷區、四谷自性院○市内牛込區、芝大佛○市内芝區、澁谷金

王八幡、柏木圓性寺○武藏國豊多摩郡ノ櫻花亦其名著ル。○元延實錄。國史館日記。鳩巢

先生文集。溫故集。紫の一本。

觀櫻漸盛

上野の櫻花ハ、寛永年中既ニ世ニ著ル。羅山詩集之ニ關スル吟詠少ナ

カラズ。淺草寺ノ櫻花亦同書武州州學十二景中、淺草花雲ト題シ、春風無日不登臨。

花靄漫漫吹我襟。門外薄霞紅錦厚。窓前淺草白雲深。ト見ユ、而モ都人ノ最モ多ク出

遊スルニ至レルハ、寛文前後ヨリノコトニ屬ス。

同年○寛文八年

三月六日、上野の花盛なり。將軍家綱公上意に云、例年は花見東叡山

に群集して繁昌す、當年は二月朔日ハ六日迄打續たる大火にて、不燒處少なし、

定る上野に無人、花も色を失ひ、寺中寂莫たるへしと被思召也。ト大久保出羽守

○忠を召て上野へ參り、花見の者共有哉否哉を見て可罷歸從者不召連、穩便に

して可參旨被仰付。出羽守則參向す。白小袖を脱、袴はかり著し、編笠を著て馬に

乗、鎗をも不爲持、徒僅に五六輩を召連て二王門の外にゐ馬より下り、侍一人草

履取一人、挾箱持一人、主從四人にて此方彼方を巡見るに、花見の貴賤男女群集

して、内幕外幕を打なぐへて酒宴し、諷ひ舞もの有、或は幕なき者は席を設け、琴

三絃にて諷ひさゝめきし所もあり、己かさまゝに戯れ、興を催す。出羽守則歸

參して委細に申上る。將軍家御機嫌不斜、仰に云、今度の大火に士農工商共に財

寶を悉燒失しぬれば、四民共に困窮して花見の事は中々思ひ出すへからすと

御推量之處、愁の色もなく、例年に不相替、花見遊興する事、江府の未衰微せざる

——元延實錄

證據也、是大に喜悅の所と上意有之と也。

忍岡觀花吟、倣東坡潮州廟詩體

武州忍岡詠於倭歌、世皆知其名、然未知其地所在。去冬偶見法印堯憲東北遊歷

記行、其中有云、自隅田川邊鳥越到武藏、禁、優遊忍岡。此地之鎮祠者五條天神也。

竝其地之處、號油中嶋、鎮坐於此之神者北野菅靈也。鳥越今在淺草邑中、五條天

神其祠猶存舊、與余別墅相並共在高所。四五年以前有故爲平地、今在余別墅麓。

油井島、今日湯島、而菅祠自若、與余別墅隔池斜對。由是觀之、則余別墅是古忍岡

也。今唯曰上野、曰下谷、不知古跡之名。堯憲記文明十七年所作也。距今可二百年、

地名改易、岡變爲廣路。唯余別墅獨高堆、而存忍岡之名、不亦奇乎。今若不證之、而



堯憲記滅而不傳，則此岡失其所在。故今日以忍岡觀花爲題。

昔聞武藏野忍岡。今知其地我山莊。滿岡櫻花遠聖堂。吟遊欲尋泗水芳。堂前一株先仰望。有德有光玉溫良。株株相竝數仞牆。春風斐然各成章。譬諸十哲配坐傍。准擬諸儒列廡廂。樹有小大與短長。匹似稚子侍爺孃。枝有前後又低昂。恰如昆弟不亂行。這邊觀花豈尋常。綱倫之道可推重。成觀爽路聞高塘。想像簪紳立廟廊。或瞻隱竹掩其光。彷彿隱逸名跡藏。或瞰抱石映松房。取象賁卦柔文剛。或視舞空隨風揚。可戒流連姑顛狂。如雲如雪錦繡粧。衣被阿誰那無比方。何事牡丹漫稱王。一場春夢競艷陽。人間富貴熟黃梁。

再吟

時維三月初三日。隨例拜趨細柳營。退公歸家日近午。攜友同催忍岡行。行到忍岡回頭見。千朵万朵滿蹊櫻。喚起鐘山王介甫。樟亭合江不足評。形容疑侶雲耶雪。人九貫之不再生。遊戲隨意蜂耶蝶。吟唇含華又阻英。時有同志提壺酒。一飯一甌兩三羹。九衢塵慮都忘了。賞心樂事二難辨。春風欲言點也志。花前聽希鶯瑟鏗。豈料商軒俄然過。僮僕傳呼滿坐驚。高軒爲誰今執政。六義堂上謹逢迎。孰與魯侯尋顏闔。治具不備塊懇情。任賓辭去慇懃送。入德門外輿馬輕。歸繞園庭花自若。看看不足夕陽傾。夕陽

可惜又添興。纖月出皎花逾明。月藏雲間燭折聖。歸歟約花尋騷盟。

——鷺峯先生林學士集

東叡山有櫻花數千株。年年開敷紛白圍繞。遠望之。則如白雲低樹。近見之。則似白雪委風。固絕景也。世人或携手於枝下。佚遊消日。或設宴於花邊。歌舞酌霞。羅山先生有詩曰。山櫻往往笑春風。世上小兒奔走忽。我亦有花君信否。小林花在六經中。可謂儒者之風也。

——梅洞林先生文集

赴上野別莊見櫻花

光景無邊滿目新。東風櫻綻艷陽辰。花如嶺上白雲起。上野遙思吉野春。○萬治元年。

二月二十三日。○萬治二年。上野莊見花而有感

不管停車與醉裙。花前感舊思紛紛。帝鄉路斷無消息。空見白櫻枝上雲。  
爛漫櫻花滿樹頭。憶從祖妣共欣遊。如今還異舊時看。采采香風吹却愁。○萬治二年。

忍岡春遊

忍岡之莊風日好。占得白櫻花下遊。時維暮春初三日。天朗氣清雲亦收。任他溱洧采芳蘭。不管西湖折垂楊。好是白櫻花下遊。主人與客兩相忘。一瓢春酒勸微醉。七椀清茶洗詩肺。花上流鶯交幽語。花下舞蝶共狂態。不用金鴨薰鸚斑。花氣芬芬襲人裾。不



用女巧弄機杼。花飾綺繡掛林於。不用韓球金線細。滿地踏花襪自香。行看坐看又臥看。拖吟筇分倚胡牀。小大高低各殊態。古來品評稱某某。貴妃滿顏逞紅粧。老嫗一笑嘆落齒。頰象揮牙鼻太長。鹽竈煮素烟不起。牡丹苟藥又海棠。宜與此花爭美名。梨花杏花漫妖艷。可笑桃暗與李明。唯恨詩人不著眼。何事靈均遺騷經。唐宋諸賢知者少。趙昌徐雛懶盡描。幾向花前叫古人。千年遺恨終不消。中華之事姑舍是。本邦古來歌詠長。履中天皇御遊日。花逐微風落玉觴。左近衛陣車馬簇。滋賀舊都空漣漪。嶺上白雲悅入丸。樹下晴雪凜貫之。最喜今日忍岡地。對花喚起舊風流。自午逮晚看不足。呼童把燭擅吟遊。一樽漸眠夜未深。歡笑依然無盡時。傍人莫怪秉燭久。明日風雨不可知。國俗櫻花名品太多。貴妃老嫗。普賢象。鹽竈。亦是其類種也。○寬文三年。

暮春遊東叡蘭茗觀花

韶光滿目自顧誤。風引遊蜂度綠蕪。試問上方香世界。不知有此白櫻無。○寬文四年。

——梅洞林先生詩續集

依昨夜之風雨。滿園花落者半。殘者半。又有遲開者。或有未開者。如祖鞭吳笠。則皆落。白鷺洲商皓遺愛半落半殘。千里鵝毛瓊樓玉宇。二株落者多。落者少。王家連珠落者少。殘者多。唯孟之反未開。其餘群櫻開落有差。○寬文六年三月十六日條。

頃聞城下士庶往來絡繹。見東叡山花。或歌于櫻邊。或宴于松下。張幔幕鋪筵。翫老少相雜。良賤相混。又有僧有女。各引類伴。朝午晚之間。如堵如市。○寬文六年三月十六日條。此山江城第一之佳境。櫻花挾路。千松交色。滿城士女成群。櫻下松間。張帷幕。陳酒肴。歌舞遊宴。不知幾處也。○寬文八年三月十三日條。

上野にて

假幕や小袖の咲て八重の花

芝の雲上野の櫻咲にけり

心色  
阿瀬一鐵

——江新道六〇延寶

花幾重通鑑綱目上野山

山夕  
——俳諧江戸辨慶八〇延寶

花見には吉野まさりしや上野山

山  
——太夫櫻八〇延寶

上野花見行記

日とひは目のやえもほはれ候。間ある心地し侍りしかは。上野の邊にたうりもてゆきとある木陰に腰をかけ筆をならしぬ。

身獨軒一夢子



目なしどちく／＼聲に付て來ませといへる友もなく、とぼく／＼としてよりなし  
 の杖をつきそう物とては、身に順ふ影のみにて、東叡山にまかりぬ。實にや  
 名にしおふ寺は、都に近き江のその絶景をむさしあぶみ、さすがにかけし御  
 ねかひにうつさせたまへるとにや、すべて年毎の花は、芳野の春よりも爰ぞ  
 上野のながめそと、暮中うちつゞく花の下は、敷島のむしろを見はりて、連歌  
 催すもあり、ほうつえにかほをすかめて俳諧をつらねともものするもあり、歌  
 を謠詩を吟じ、さゝめきさゝのむさま／＼は、實にや東のはてしまで、人の心  
 のおくそこもなきたはぶれかなど、爰かしこ見やりめぐりて、

露の身とおもひ捨てと春ことの華にはおしきいのちありけり

と、かくつぶやきながら、普門院に下り、大師の尊像を拜し奉り足休めし侍り  
 しに、時ならぬ風の花をちらしたれば、

よけてふけ雲の上野の花の風

つとふ中に、いたいけしたる子の花たべといらひさけびけるに、あるし方の  
 僧衣の袖に一枝を手折あたへられしにぞ、心ちよけに笑ふくみたれば、その  
 たらちねにかはりて、

給はるは菩提の行そ普賢像。

下谷にくだりて、

里のなの下谷も花の上野哉

しれる書舎のもとに立より、往來の人をかぞへおりつゝ、

み<sup>廻文</sup>なはな見はるはそはるはみなはな見

日も山の端に入相の耳の許へつけくれは、

入相のかねやこゝろせよ花の暮

さらはあすあふみてかへりぬ。

丑の二月廿八日

追句

みる人はこゝろうへの、花見哉

——江戸雀

我<sup>新井美</sup>○幼き頃は、上野物語といふ草紙ありけり。これは寛永寺の花見に、人の  
 群來る事共をあるせし也。 ——折たく柴の記

寛永寺看櫻花<sup>余時○寛文十年年  
十三。從先考在武陽。</sup>

寛永寺花西復東。暮春日霽景融融。遊人賞醉微吟去。山路雲飛處處風。

霸都時代ノ遊園



鳩巢先生文集

荒木加支

上を下へえいとう山の花見哉

此の人は寛文中を盛りに經る、江戸兩替町に住し泰庵といへる醫師なりとぞ。

——温故集

花

東叡山

東叡山黒門より二王門の竝木の櫻の下には花見なし。東照宮の脇後松山の内、清水の後に幕はしらかして見る人多し。幕の多き時は三百餘あり。少き時は二百餘あり。此外連立たる女房の上着の小袖、男の羽織と辨當からけたる細引に通して、櫻の木に結び付てかりの幕にして、毛氈花むしろ敷きて、酒飲むなり。鳴物は御法度にて鳴さず。小歌淨瑠璃躍仕舞は咎むる事なし。本町通町を始め、有徳なるものもさなきも、町方にては女房娘正月小袖と云ふは仕立す。花見小袖とて、成程結構に手をこめ伊達なるもの、數寄に好みたるを着て出るなり。花より猶見事なり。花の頃は空くもりて、大形晝過より雨降る。然れとも笠をもさす。小袖をぬらし歸るを、遊山にも又手柄にもするなり。花の盛りには、黒門前の

石橋よりはなか／＼先へは行かれず。子細は江戸下町の者共は、筋違橋和泉橋を渡りて廣小路へかゝりて來り、湯島小石川小日向筋の者は、池のはたの町へかゝりて來るゆへ、黒門にては下谷よりの見物、谷中筋よりの人、四方からの集まりなれば、ひしと詰りて動きはたらしもならず、車坂からも上り、屏風坂からも上れば、上野の込合夥しき事なり。されとも御法度を守り喧嘩口論なし。花は輪藏堂より二王門への通筋の西の方に向ひ勝れたる櫻あり。遺佚かよむ、

咲にけり櫻をおほふ白雲と思ひまかへて風を待つまで

陶々齋も詩を作る。

東叡山頭紅白櫻。遊人醉賞去還行。霞幃雲幕開花地。飽領春風歌舞聲。

あなたこなた見る内、遺佚いつ方へ行きたるか見えす。陶々齋方々尋ね歩きたるに、いつの間に仕度かしたりけん。大佛の後の窪に櫻の花盛りなる其下に水風呂を立て、其湯へ花を入れて温泉水滑かに岸洗ふ。たはことつきて足をすりて居たり。餘りにくさは、是は氣か違ひたるかといへば、遺佚か返事歌をよむ。水風呂のあかなく思ふ花なれば上野の山も入てこそ見れ

陶々齋則前の絶句の落句をかへて、

霸都時代ノ遊園



霞幃雲幕園花地。虚入永風呂出頭。

と云てはや歸るへしといひければ、遺佚は猶水風呂にありて、

明日もとて詠め残さん花もみよの間の風のあはれなる身や

清水の方へ行きたるに、松原よりの坂の上り口に石塔あり、遺佚後の形見とや

おもひけん、腰の矢立の筆取出して其石に書付ける。

残しおかんうしと見し世になからへは今を忍ふか岡の言のは

其頃元三大師は最教院におはしませは、參詣の輩道もさりあへず。清水の舞臺に休らひ、花見て暮す春そすくなきあと、古き事を思ひ出して詠居たるに、きよけなる侍一人いそかはしけに目をくはり人を尋ぬる躰なるか、遺佚を見付爰にこそ居たれとて胸つくしを取て引たて行く。是はいかなる事と云へは、我かたのみたる人今日花見に旦那寺へ來りたまふか、乗物の内にて其方を見かけられし故、進れて參れ歌よませんと仰らるゝ、そいそきまいられよと連れて行き、椽のはなに居さする。程なく歌の席定り、兼題の詠歌懷中より出して秀歌を吟して一紙に書き、當座に數多の題を書て、探題にて皆々よまるゝ。遺佚暮春鐘と云題をたまはりて、

うきも今わすれ形見の鐘の聲散りし名残の花の夕暮

谷中感應寺

本堂より西開山堂經堂の前の花を見る。卵塔場へ行く道の方へよりて匂ひ勝れたる花あり、したれ櫻の盛りなる頃は、未餘寒ありて見る人すくなし。淺黄櫻は風呂屋のまへにあり。

淺草觀音堂

空の氣色も薄曇り今櫻咲ぬといはぬ計りなれば、橘元任か是はかりたに人におくれしと讀みし心もおなしきに、駒形堂へ出たるに貴賤群集の花見袖をつらねし有様、咲く花にひとし。駒形堂の舟つきにかけたる屋形は數しらす幕はしらかし簾かけ、赤毛氈に花毛氈繪、蕙薄縁しかせしは、是水邊の花なるへし。

駒形にかさりし幕を張かけて舟の花こそ盛なりけれ

此舟のまへの板戸は櫻にてひらけは花の蕙もうせん

並木の茶屋へ入りたるに、右左の幕の内よりやすみくと呼ぶこゑに付て見入たるに、年のよはひは二八はかりを先として光りかゝやく玉かつらかと見ゆるもあり、たか袖ふれしかとなつかしき梅かえ頃の年もあり、藤の一葉のう



らめしくわかなと見ゆるよはひには我魂もいつしかに飛ふ火の野邊の春の雪消え／＼となる計りなり。伊達染小袖は、廣帯尻のとかりに引かけて、せひとやり戸を押明けてお客おそしと待たるを見るに、心もうかれつゝはつたりと手を團扇屋のお久米おせきかなりふりに、千度百度こりもなく、よせてはくたく浪屋の花荒磯風に漕きかぬるか、いやと聞くもなつかしや。桔梗屋海老や三文字や、松に巢かくる鶴屋には、おせんの君と聞くからに、方々年の齡をも深川野へのお杉とや、目元のしほはほろ／＼とこほれかゝる梅か香に、匂ひ勝れる丁字やひしやか脇を東へ竹町にこそ出にける。是は餘りに人多し、刀脇差の鞘もひたとあたりたゞきわり、新造の袖に羽織も破れ、鼻紙袋もぬかれそうなれば、通り道をよけて廻りなれとも脇道を行き、六地藏前廣小路より神鳴門へ入んとするに、門より内は見えず、人の上に人立重りて、茶屋町より廣小路までひしと人にて詰り、神鳴門より出んとする人のきほひ、強き時はむら／＼と押出され、又門へ入る人のゑんやこゑにて、つき入る時は、すら／＼と押返して、出る人も入る人も歸り兼てたゞひとつ所にありてもみあふ計りなり。足よわきぢぢばはつきたをされて氣を失ふ。女わらはは、泣きわめく。山伏はしやくち

やうを振つて代僧代參と呼へは、數々の賣物は聲をはかりに其品々を呼び、只何のわけも聞えず是にてはなか／＼觀音堂に行かれまし、三十三間堂を見物せんと廣小路を西へ行けは、戀しくは尋ねてもこよ我宿のしるしは三輪の山本屋おはつは勝れたみめよしなり。泉屋のお杉、吾妻屋にてはお倉のきみ、一のや帯の腰付は青柳よりもなよかなり。松やのおてふ、蝶やてはおはつはすくられたしなしもの、同じくお龜かふりよしや、玉やのおかんおこう、茗荷や伊勢や三文字や藤やのおふちお花はとほりもの、姿形はよけれども、目元に不足な所あり。心つくしのはかたやへ、角力をとりし大黒や、行司をなしてえひすやに、釣られて針にかゝるなど、數多の茶屋を見て通り、又並木にそかゝりける。先程にかはらす神鳴門は、いまたもみあひて入りかたければ、なか／＼花も見らるまし。酒を飲みあそはんと、爰かしこを見るに、虎屋鼠屋一文字屋、澤邊に茂る澤瀉や、流の水は巴屋の、いなにはあらぬ君か名のおかやと申は實に最上やの名物なり。九曜屋鯉屋ほてい屋に、井筒の内の藤の紋、島屋かまへを通る時、唐土はしらす吾朝に隠れこさらぬ白鼠、福やおなつが出てまねく、いさ立よらんなど云こそ程も久しけれ。手々にあみ笠ひんぬき／＼はいりける粧ひは、狂亂人も面



を向くへきやうそなき。福やか所には、おなつお花おくと云あり、それをひとつによめといへは、遺佚か其儘讀む。

花の色なひくにつけて春風の吹やかをりのおなつかしやな○中略

四ッ谷自性院

麴町四ッ谷本村赤坂あたりの者、花を見る幕を打ち賑なるとはなし、卵塔場のはつれの山より、隣屋敷を谷こしに見れば、からかさ作りの茶屋見ゆ。

芝大佛

少しはかりの櫻あり、然れとも芝筋の人は其所ならて近所に花なき故花見あり。門へ入れは、右の方に観音堂あり。其脇より山へ上る、天神の社あり。此松山より芝の海よく見ゆる、よき景なり。大佛の脇にはひ藤あり。其下に茶屋を構へる、腰かくる人多し。

澁谷

澁谷の金王丸か植しより金王櫻と云といへり。此櫻の實を紀伊大納言頼宣卿母公養珠院御庭にふせさせたまふに、生ひそたち漸く花咲く頃に、澁谷の金王櫻枯れたり。此由養珠院聞し召し、御内の侍澁谷是入と云者を召し、汝は金王か

子孫の由聞し召す、今金王櫻枯れて名木絶ぬ、幸我庭に實植の櫻あり、餘人の植たらむよりは子孫の汝植たらんには、先祖の孝にも成るへしとて、此櫻を是入にたひたまふ。是入謹て頂戴し、則其櫻を植る、今の金王櫻是なり。

柏木

此村を柏木村と云、圓性寺と云寺の内にあり。花の色勝れ、匂ひ深し。柏木村の名木なる故にや、右衛門櫻と名付る。匂ひうるきやうに似たり。花を折らせしとの爲に、櫻の廻りに竹の垣をかこふ。其脇にて酒をのみて遺佚かよむ。

柏木のふりたる塚は見えねとも昔を殘す花櫻かな

といへは、史記の晋文公か狄の妻に契りし古事より思ひ付たるとて陶々齋ほむる。

——紫の一本

左

石の枕に鮪屋ありける今日の茶屋

農

人

右 勝

芝もの、涼しき常夏の巻を見て思ふ

野

人

石の枕、古歌明也。竝木の茶屋の繁榮も、其ひとつやの名殘とや。且芝肴の取ま



せ、かの卷の鮎石ふし、御前にて調しさせ玉ふ折ふし、思ひやるさへ涼し。

——田舎之句合〇延寶八年。

金王櫻右衛門櫻ガ是ヨリ世ノ賞觀スル所ト爲リタルコト、左ノ諸書ニモ見ユ。

金王櫻 是澁谷郊金王丸ヲ植置しさくらの木なりといふ。花の色白し、春の比

の、江都の貴賤茲ヨ來テ遊興まる之。——江戸鹿の子〇貞亨四年。

金王櫻 百人町山。〇青ハ八町程未方八幡宮の社前ニ在。昔源義朝鎌倉龜ヶ谷の

館ニ植られし慶志櫻を金王ニ給りしりの、此地ニ持來テ植シト云傳ふ。近世紀

州大守此木の實生を御庭ニ植置れし、澁谷の櫻枯しりの、則彼實生の櫻を賜

テ、爰ニ植耒め給ふと云。——江府名勝志〇享保十八年。

衛門櫻 四谷の末

此櫻誠ニ名木ニ。花のころの其香遠ク薫シ、花の老蒼長く大きくあて、江都ニ此  
木ニならぶ蒼き花なし。いつのころまでりの此木名もなかりしり、そのころ此  
木りれて根もろり残しに、或諸侯乃倍身何の在衛門と云し者、此木のとり木  
茂秘藏あるに、彼本木の枯ざる事をなげきて、こゝより來テ枝を續替れも、それ

より此木葉をきりてへて今もああり、故ニ名付てゑもん櫻といふ。柏木のゑもん  
と云の筋な事や。——江戸鹿子

右衛門櫻 中の百人町の末柏木村延生寺の内ニ在。此花初の名も無し、老  
木と成て枯し時、武田右衛門とりや云る者枝を繼しよ、此名を得りといふ。  
花大輪ニて、老蒼長く、其香苗香ニ似たり。他の花より開く事遅しと云。所の名を  
柏木村と云ニ因テ、源氏物語ニ書し柏木右衛門ニ附會し、其墓あるしと云。  
又柏木右衛門の東ニ下りし時植しなど、妄説ある事、如何そや。彼源氏の書  
の作り物語あれ、柏木右衛門と云も實ニ其人有ハ非キ、何ぞ證とをえんや。

——江府名勝志

醫光山瑠璃光院圓照寺

淀橋町。柏木村字中。城内三千七百坪。〇中境内藥師堂前ニ一櫻樹アリ、右衛門

櫻ト稱ス。正保元祿圖共。萬治寛文ノ頃ハ游賞者多カリシト云。今朽殘シテ、僅

ニ小幹ヲ存ス。按ニ右衛門櫻物語云、後一條院御宇、柏木右衛門佐頼季ナル者アリ、

ケ。手カラ之ヲ植ニ、右衛門櫻ト名ツクト。此書後人ノ作ニシテ、信スルニ足ラズ。紫一

本云、柏木村ナレハ、右衛門櫻ノ名ヲ得シナラムト。或云、近里ニ武田右衛門ナル者ア

——武藏通志



後樂園詩會

四月八日丙子

〇寛文八年(紀元二三二八年)〇丙子(紀元二三二八年)〇正綜覽。

水戸

〇常陸國。

城主德川光圀

〇參幕

府ノ儒員林春勝〇春齋等ヲ招キテ後樂園ニ燕シ、詩ヲ賦セシム。

〇國史館日録。

後樂園詩會事蹟

後樂園詩會

左ニ國史館日録

〇編年史ヲ抄ス。園中是頃ノ勝狀ヲ推ス可シ。

館事畢後刻

〇申渡。携春常勝澄。〇春齋。赴水戸邸。友元伯元伯庸。〇紅葉山廟冷人。伯庸。春齋門人。通稱上左兵衛。

能同行。正竹會於途。既至。虎林

〇天龍寺慈濟院。先有焉。參議對談。辻達野傳侍焉。

參議今日齋也。故賜虎林素食。既畢。特賜余輩餐膳。

〇味。白井氏宇都宮氏相遇。餐畢。參議遊園中。余從之。虎林等初見此園。園中有山有池有橋。嘉木奇巖無不備焉。徑路迢迢如村野。其間清水長流。巖瀑迸出。水車挽水回轉。虎林曰。如此佳境。未曾見焉。

頂有堂。號少廬山。是應故黃門之求而先考記。今猶存。山下有閣。其間有巉巖。其路細

而斜長。參議先導。虎林春常友元伯元正竹伯庸及野傳等從之。余脚不健。故與辻達

玄仍等。自平路往。其間有田。有植稻。有隴麥。

〇我脱力。有藤架。花開爛熳。又有洞。有洲。植杜若。以片木八段斜橫。移參河八橋。此所者。余亦初見之。既而入閣。其前有山。躑躅。紅白相交。新綠重陰。其下鋪五色小石。其間有小叢竹。其形似筓。故號鳳凰竹。自朝鮮來。實是希

有者也。其餘不可勝計也。少焉參議歷坂路入閣。虎林等從至。座定。參議求詩。辻達傳旨請余出題。余曰。唯賦園中勝者而有餘。何及新題哉。虎林曰。實然。參議乃定鳳凰竹爲總題。而算在席者。則加參議十三人也。故分賦十三物。新錄也。紫藤也。棕櫚也。幽洞也。八橋也。稻田也。池艇也。麥隴也。石砭也。水車也。巖瀑也。乳泉也。庭鶴也。各探鬪得之。日未暮。各棹舟遊池。余與辻達留在閣。入夜各吟案。其間屢進肴餅。及戌半而詩各成。參議唱上句。各逐次聯之。至十六句。又進蕎麥麵。酒數巡。談闌及半夜而罷出。而至晝座。辻謝而各相別去。村願言〇春齋。病瘡。不預此高會。可謂不幸也。余春常歸岡。既及丑刻。〇寛文八年四月八日條。

三侯舟遊

七月十九日丙辰

〇寛文八年(紀元二三二八年)〇丙辰(紀元二三二八年)〇正綜覽。

儒員林春勝〇春齋等舟ヲ淺草

川〇武藏國ニ泛ブ。是頃三侯〇市内ヲ中心トシテ、士民ノ舟遊太盛也。

〇國史館日録。江戸名所記。紫の一本。

三侯舟遊事蹟

三侯舟遊

寛文前後、納涼觀月ノ舟遊太盛ナルコト、諸書之ヲ傳フ。

〇前略。前。亥前、月出、水面如畫。又各聯句。及子刻、漸到兩國橋。風穩、月明、遊船會同。或放花

火、或釣魚、或歌舞。左右東西、隨流往來。〇寛文八年七月十九日條。

——國史館日録

霸都時代ノ遊園



こゝを三俣と名づくる事、淺草川新堀靈岩嶋この三方に相通じて、水の派わかれあがる、所あれば、かくいふあり。まことに絶景のところあり。北に、淺草寺・深川新田・東えい山まのあたりに、西のかたに、江城・愛宕山をゆ。たつ巳の方に、伊豆の大嶋、ひつじさるのかたに、駿河の富士山、ひがしのかたに、はるかに安房上總にうちつゞきてみえたり。何よりたもしろき、八月十五夜の舟あそび也。世の好事の人、大名小名そのやか貴賤上下のともが、舟をかざり幕はし、つゝあし、三俣より鐵砲津をさしてをしいだす。あるひの今夜一輪きてり、清光いづれの所、あからんとうたひ、或の團々としてかいきやうをはあれ、せんぐとして雲衢をいづと吟じ、又の笛太鼓はやしたて、聲をはかりにせよめき、又は三味線鼓弓引あとして哥うたひ、ほそくかあるこゑを帆にあげて海づつにこぎうかふる。常はいましめらるゝ事あれど、今夜ばかりは三俣に花火をゆるされ、舟とに我をとらじといろくの花火を出し、春宵一刻直千金の心地あり。したり柳・糸櫻・牡丹花・し、菊・あんどさまぐ也。月と花とをあらべてる舟のうへの眺望、まことにこゝろも言葉もをよべれず。月の名ところのおや

き中に、須まあかしのとさくその名たかけれども、三俣の月にのよもまさくじぞいへり。近頃の發句に、

三俣の月見の舟のいかりあ

といへり。近代秀逸の名句也と人さあひあへり。さりあがら舟の碇の四俣ある物あれ、三俣は舟のいかりといへる事いと口たし。

三俣は月のともえや波の文

ぞいはまやし。

望月と花火と舟に三俣のちあえ此足のいづれまされる。

——江戸名所記

月

三股

兩國橋と崩れ橋の方と向島の方と三方に水汐わかれたる故、爰を三つまたと云。初は夏むきの遊舟爰にかけて、殊更月の夕は清光の隈なき事を悦び、酒に對してうたひ、月に乘して吟し所なり。其頃半井卜養の狂歌に、  
うつくしき人も二八の十六夜月も三股ある物でない



と讀みしも、卜養八月十六夜小舟にて此三股に出たりけるに、堺町の歌舞妓子共多く乗て酌をとらせて酒呑み、酌取る子に年はいくつと問ふたれば十六と云、今宵も十六夜折節おかし、狂歌一首まいらせんとて、興せし歌とぞ、實にや秋の水漲來て舟のさると速に、夜の雲おさまりて月の行くと遅しと樂天かつくりしは、大方此所なるへし。月湧て大江に流ると杜子美か云ふたは、よい見立やと、陶々齋嬉しかる。ある人か歌に、  
なからへてあく時しらぬ月も見つまたこん秋を空に契りて  
遺佚か歌に、

夕鹽のさしくる浪に先立て影みつまたの月そさやけき  
陶々齋も詩を作る。

風來水面滿三股。月到天心掛一輪。此地誰論清意味。舟中醉着沿流人。  
船

東國丸

淺草橋の船なり。大船のはしめなり。

山一丸

日本橋の船なり。東國丸より後に造る。東國丸より大きなる屋形を八間にしきりし故、山一丸と云ふ。

熊一丸

江戸橋の船なり。屋形を九間にしきりし故に、熊一丸と云。

神田一丸

神田一丸、是は神田にて一番の大船なり。一とせ水無月のあつさ、昌公主の軒に澄水帛をかけたりととも其しるしを覺えず、汗玉を流し、氣とろけ、目くらし、莊宗にあらされは、一樓を作らむ力もなければ、責て凌く事もやと、此舟をかりて柳原を東へ淺草川へ押させたれば、風飄々として衣を吹き、舟搖々として軽く揚れば、秋や歸りて初瀬川、古川近く漕きよせたるに、川邊涼しくよる浪のよるともしらぬ月の影。こよなういはん方もなきに、熊一丸と云舟に紅葉の幔幕をはしらかして飴りたるか、碇をおろし、幕を高く卷上げたるを、遙に見入たれば、年のよはひ二八計の女十二三人、おなし様に下には白き薄物の雪のことく成るを着し、上には地紅紫紅粉鬱金瑠璃紺桔梗薄淺黄底さへ匂ふと讀みたりし田子の浦は、の藤色や、猶々床し、芦垣の吉野の山の櫻色、桃色、ひわだ、鶯茶思ひ、



の上着きて、當世はやる伊勢躍、さすやうてさゝぬは人待宵のうら木戸、またもさす物は追ひ手の風にみなれ棹、さすや潮時に川一丸に打乗り、江戸橋の下よりこき出したりや、大河へ涼しき風の吹一丸に、きほひかゝる虎一丸、西國丸や北國丸、東國丸も出たりかゝる御繁昌の江戸一丸へ、浦々の湊丸より押出す穀舟、千石丸に、萬石丸、二挺立も見えたり。淺草川を上りに觀音丸を脇に見て、山の宿のきはに付て漕げは、待乳の山一丸、勝りたりや都丸に三谷にての大夫衆、其名も高尾丸、吉野丸に吉田丸、すかたは實にも花一丸、小櫻の粧ひ掛る君達に、露の手枕結ふより、はや泉丸に大いづみ、高砂丸や住吉丸の相生の末代丸と祈る伊勢丸、百正丸も有との辨才天の船頭も、仕合よからは大福丸とならうよ、今日は日和よく浪吉丸に打乗て、棹の雫に袖打ぬれて、さすようてさゝぬはなんとゝうたふ。遺佚かよむ。

淺草の川のおもての舟あそび戀に成つゝ身も躍るなり

此船はかりにあらはこそ、暮時分になると、隅田川牛島金龍山駒形爰かしこの下屋しき町や／＼の茶屋やしきにかけたる船とも、水のおもても見えぬまてに漕出せば、兩國はしのうへ御藏前のおたりより下は三股を限り、深川口新川

口を真中にてかけならへたる船共は、幾千萬といふ數しらす。殊更もつて延寶巳の年<sup>○五</sup>よりは伊勢踊はやり老たるも若きもよきも悪しきも坊主も女も浮立て踊る頃なれば、鼓太鼓て踊るもあり、琴三味線にてはやすもあり、尺八鼓弓にあはすもあり。女踊り、男踊り、武士踊り、町人踊り、引汐にまかせて流し船にて踊るもあり。さし汐に舳をたてゝをとるもあり。屋形船の外に、踊見物とて出る船もあり。月を見んとて出るもあり。涼みに出る船もあり。餅賣り酒賣りまんぢう賣り、でんがく煮賣り肴賣り、ひや水冷麥冷し瓜、そばきりめせといふもあり。花火船を呼かけて一艘切りにたてさする。したれ柳に大櫻天下泰平文字うつり流星玉火に、ぼたんや蝶や、葡萄に車火や、是は仕出しの大からくり、てうちん立笠御覽せよ、火うつりのあちはひは、仕つたり天下一、あつちやア／＼とほむるもあり。北も南も西東、爰かしこにてたてあくれば、たゞ日中の如くなるに、火玉の出る筒音、流星のあかる響き、人のわめく聲にて、心靜かに漕く船なし。天竺震且はそもしらす、日本開關より此方、今此御代ほと治まりて、國土安穩民やすく、うれひを知らぬ時なきに、殊更もつて船遊ひは、萬民快樂、病人の獨參湯、せまき長屋の二階住み、くらき裏屋の小店よりも、命のせんたく是なるへし。陶



々齋も遺佚もいさ踊らんといふまゝに、與作ふし鞠の曲ありくんとすゝみ出、  
 またありくとしさるとて、船の縁に腰をつき、眞逆様に水に入る。されとも遺  
 佚は水れんにて、陶々齋を引掛て船の中へ投入たり。船にあかりて大音あけ、遠  
 からんものは耳にもきけ、近からんものは目にも見よ、平家の大将能登守教經  
 の菊王丸を投入たるも是程にこそありつらめと、ことくしくそ名乗りける。  
 陶々齋は腹を立て、何能登守殿の弓勢は三人張といふほとそ、いてく張らん  
 といふまゝに、陶々齋若黨と草履取の二藏と主従三人飛ひかゝり、拳をにきつ  
 てひたものはる。遺佚あまりのかなしさに泣き聲に成て歌を讀む、  
 白妙の老のかしらもはるといへはゆきも心もきゆるはかりそ  
 此歌にめて、ゆるしにけり。

左持

紫の一本

月のさそふ詩の舟か山市か川武か

農人

右

さゝて柴の戸泥坊にとかはし月

野人

公任郷歌の舟に乗て秀句よみ玉ふよし、これは是れ山一九川武の舟はたを

叩て、いかなる秀歌うたふにや。右はまた眞木の板戸もさゝすねにけりなと  
 よめる、月にわすれたる咎なし、難なし。 — 田舎の句合〇延寶八年。

新秋泛舟於淺草川乙丑歲〇貞享三年賦

風撲碧流揚素波。邀涼避暑泛輕舸。平生修史用心盡。佳景催詩竟奈何。

季夏遊淺草川三首乙亥歲〇元祿八年賦

爲避暑塵倚水涯。輒浮小艇棹清漪。出洲忽見波濤濶。想像芒洋向若時。

一葦沿流又繫汀。暮風颯颯木冷冷。勿言良夜無明月。幾箇棲船迸火星。

淺草清流水似天。艤舳悉是管絃船。眞知歌吹海中樂。舉杯屬客醉陶然。

儼塾集

嚴有公〇徳川家綱の御代、屋形船といふもの類に時花出、數百艘出來し、中をくれて  
 大屋形船の熊市丸、山市丸又、是の座敷九間、臺所壹間有りし故、熊市の名あり。  
 座敷八間、臺所一間ありしゆへに、山市の名をつけし。然るゝ天和の頃、小山  
 田彌市といふ悪人、諸人の金銀を偽り奪ひ取り、剩人を殺したるゆへ、公儀人形  
 を以搜し咎められし處、漸として越後新發田城主溝口伯耆守領知より捕へ出  
 し御詮義を掛りし時、奉行中被申へ、何として穿鑿の始江戸を徘徊したるそ



と推問せられしに、されり晝の途中の町駕籠に乗り、夜分くく川岸くく繋  
き置たる屋形ふねよ乗りかゞきて明し候と答候。依之右兩様盗人の便りある  
ものとして、急度停止被仰付故、大屋形ふね永く絶るなり。町駕籠之儀、元祿のす  
へ御免候しかとも、右之趣ゆへ戸を禁制せられしより、至于今町駕籠戸無之  
候。又當世の屋形ふねは數百艘に限る事あり。大茶船の申立、尤冬春の専ら荷積  
まふねよいさし候也。

——參考落續集

都人遊觀所

是頃、都人又戸塚毘沙門山○武藏國 豊多摩郡ニ郭公ヲ聞キ、品川海晏寺

○武藏國 荏原郡ニ紅葉ヲ賞シ、王子金輪寺○武藏國 北豊島郡、牛島長命寺○武藏國 南葛飾郡

ニ雪ヲ觀ル。道灌山○武藏國 北豊島郡亦散策ノ地ナリシ如シ。○紫の一本。岡林先生全集。

江府名勝志。江戸砂子。新編武藏風土記稿。東京府志料。武藏通志。

都人遊觀所 事蹟

都人遊觀所 紫の一本ニ據レバ、當時江戸市民ハ、花ヲ上野淺草感應寺四谷自性

院芝大佛澁谷金玉八幡柏木圓性寺ニ觀、月ヲ三保ニ賞シタルノミナラズ、郭公ヲ

高田毘沙門山ニ聞キ、紅葉ヲ品川海晏寺ニ、雪ヲ王子金輪寺牛島長命寺ニ見、道灌

山ニ散策シタルガ如シ、紫の一本ハ、天和三年ノ奥書有リテ、

此紫の一本は、櫻田に住し光融入道所勞のころ、慰みに書あつめ、予に清書せよ  
と贈りて、後殞命す。今考ふるに、江戸のはやり言葉小歌を多く書加へたれば、遠  
國の人また末の世には、言葉つゝき聞きかぬる事もあるへけれど、流石に舊友  
の遺墨をむなしくせんも本意ならねは、落ちたるをはふきたるまでにて、うた  
かはしきをも改めず書寫して、筐底におさめて人に見する事なき耳。

遺佚入道判

天和三年五月日

ト見エ、記ス所概シテ寛文延寶頃ノ事ナルニ似タレバ、今姑ク此に併録ス。

戸塚毘沙門山ノ郭公 ハ、

郭公

戸塚毘沙門山

高田の穴八幡の東にあり。是ハ俵藤太秀郷戰場に向ひ、平親王將門を討ん事を  
一心に毘沙門に祈誓をかけ念し奉り、目をひらきたれば、秀郷の甲の上に毘沙  
門空中にあらはれたまひし御かたち手つから作り申されたる本尊なり。此所  
に古木多く枝しけり涼しき山なるに、見おろせる田畠廣く、江戸川の流れ見え  
て、半込山のしけみか中に所々家居も見え、限りなき眺望なり。何方よりも此山



にて郭公のはやく鳴くと云事あれば、人々催し初音開きに参りけるに、迎もの事に酒のみあそはんとつれなりける人何角したくして来る。毘沙門堂の縁に花むしろしかせ、さかへとりひろげ、あなたこなたと呑かはし、一聲を待てとも音つれなし。既に暮にかゝり、月の光りも明かなれとも、酒のまんよすかもなく興もつきんとせし時、朽木家にもとありしと聞くぎんと云ごせ出けり。年の頃十七八かたとそ見えし。下には二あるの袷にゑひ染の裏く、み薄色のうき織物紫の色こき、桃色のきよなる糸にて、八ツはなかつちらしたるより、きんをそへ茶しゆすの大幅廣なるを吉彌結ひにしめて、かくと云女に手をひかれて粧ひ出たる姿、髪のかゝりより始て、えんなるさまめやかに、光りをはなつとはかゝる事をやと見ゆ。古今集によし見ぬ人は枝なから見よと詠し萩の露、さはらは誠に落ぬへし、ひろは、きえんと讀みたりし賤か笹屋の玉あられ、一夜の夢の契りをも見せよとねかふ計りなり。月東欄に影さし、風西樓に渡りて、朱簾そよめき伽羅の香りなつかしき琴を前に置きたれば、かきならしたる爪音のけたかさ未だ曲をなさゝるに、感情にこきふるつてそゝろ寒く、水の底にも耳留るものやあらしと疑はる。絲の音調つて暫時ありて、當世はやると云加賀ふ

しとやらんをうたふとはおもへとも告渡る鳥もつとめの身ちやものを、何をしのふの山ほとゝきす、よしや闇思君音にたてよ、とは思へとも、とても又忍ぶわけなら末とけよとうたひをさむると、ほとゝきす一聲雲井に高く音信ければ、上座なる人よむ。

村雨にかよへる琴にひかれてや初音高田の山ほとゝきす

巫山の夜の雨は絃中におこり、湖水の秋の浪は指の下になると云ひし事も思ひ出されたとて、皆人嬉しかる。遺佚かよむ。

引琴に聲もをしまぬ時鳥かんに堪へかね我も音になく

陶々齋琴の聲肝に徹りて舞踏を知らず。

山頭月出杜鵑枝。邂逅佳人調曲時。飽對紅裙偏醉着。聲々莫告不如歸。

年寄りたる男の肥えふとりたるか、琴の面白きに聞とれば暑さはあつし大汗を流し息もつきあへす感したるを引出し、毘沙門堂によつて時鳥の歌よめと云ひければ、

行くへなくやみに聞くよし所から露にくらふの山時鳥。

——紫の一本



毘沙門堂 高田戸塚 天台禪英山寶泉寺上野末  
本尊の慈覺大師の作、田原秀卿の守佛也と云。

高田稻荷社 境内にあり。

文龜元年上杉治部少輔友良靈夢ありて勸請まると云。元祿十五年の四月夢想あり、榎の控より水湧出き。此水にて目をやむものあらふよふしきよその驗あり。今の此事なし。

千とせの松 神木也。毘沙門堂の前あり。

蜥蜴の池 境内にあり。

寛永のころ御狩の節、池の名を尋させ玉ふよ、名もなたよし申あきしよ、以來のいぢりる池とよぶへしと釣命ありしと也。

富の、正五九月廿一日、久しき富の修行也。

當所郭公の名所也。○下

——江戸砂子

新編武藏風土記稿ニ據レバ武藏國豊島郡下戸塚村寶泉寺毘沙門堂、即チ其處ナル可シ。

下戸塚村○中

寶泉寺 天台宗東叡山末禪英山了心院ト號ス。○中天慶四年藤原秀郷ノ開基

ニテ、始ハ秀寶者ト號セシヲ、遙ノ星霜ヲ經、天文ノ頃、比叡山寶泉坊秀寶ト云僧住持トナリシヨリ、改テ寶泉寺ト號スナト傳フ。○中毘沙門堂 高サ二丈餘ノ

山上ニアリ。毘沙門ハ、慈覺大師ノ作、長二尺五寸。此像元ハ上野國佐野大慈寺ニアリシヲ、天慶四年藤原秀郷志願ニヨリテコ、ニ移スト云。當寺天正六年ノ記

録ニ、此本尊者、俵藤太秀郷持佛ノ由ト見ユ。又此所ハ、往古中務卿宗良親王陣取ナリシ所ナリナト云傳フ。稻荷社 水稻荷ト號ス。當寺舊記ノ寫ナリト云モノ

アリ、其内ニ、文龜元年再興大檀那上杉治部少輔入道朝良云々トアリ。又上杉系圖異本ニ、治部少輔朝良文龜元辛酉年依靈夢、江北高田郷戸塚村稻荷大明神勸

請、今寶泉寺境内戸塚稻荷是也トアリ。寺傳ト違ヘリ。又當社ノ棟札ナリトテ、是モ其寫ヲ藏セリ。其文ニ、天文十九年庚戌二月二十九日北條氏綱之時代、牛込主

膳時國再興、大僧都別當寶泉坊秀寶云トアリ。氏綱ハ、天文十年ノ卒ナリ、年代モ違ヒ、且牛込系圖時國ナシ。○中淺間社○中念佛堂○中鐘樓○中千歲松 古

木ハ枯テ若木ヲ植ツケリ。大猷院殿○徳川御放鷹ノ時、古木ナルヲ上覽アリテ名ツケ給ヒシト云。旗立櫻 是モ古木ハカレテ、植ツキシモノナリ。宗良親王旗



ヲ立ラレシ所ナレハ、此名アリナト云。ハモリ蜥蜴カ池 是モ寛永ノ頃、御放鷹ノ時名ツケ給ヒシト云。古榎樹 ウロニ水アリ、イカナル旱魃ニモカル、コトナシ。眼ヲ患ル者コノ水ニテアラヘハ必ス驗アリト云。——新編武藏風土記稿

海晏寺ノ紅葉 是頃ヨリ觀賞セラレタル者ノ如シ。

紅葉

海晏寺

上總山は晴ても武藏野の方は曇り、江戸の方から吹くる風冷々として、川崎の駕籠かきも足早に歸るは、折からの時雨薄紅葉の色上げ成へし。前方の案内もやうかましく身拵へに隙とる事にもあらず、ひとへ合羽の裏なく云ひ合せたと三四人、海晏寺の紅葉見に行く。自然と仕合よく、三田町の紺屋は染物を張り、高繩の茶屋ものれんをかくれば、空の色もそれからは青々と見ゆる。品川の茶屋町旅籠町の出女、臺屋のおれん、三之丞か所のおみや、勘右衛門かお千代お倉を始め、數多の脇明け留袖としま我目の見ゆる程のまつた尻つきにて、ふくさ前帯のしとけなき片結び、柱にかゝりはしとみにもたれて、往き來の人の言葉をかはす。たち木に水かね氣のとくなる事は、遺佚をはあしらひもせず、是

も門くちのかさり繩で、くる年もくひたものすりて毛のない頭故と頭を掻き、海晏寺の紅葉は去年よりはこかれぬといへとも、色の美しくしき此國にはあるまい、いかなればから紅と云成へし。硯と紙とを乞ひてつれなる人一首つ、書く。

又もこん染るもあれは染あへぬ紅葉を殘す明日の時雨に

浪路より時雨や染るもみちはは幾鹽風の庭にかよひて

遺佚入道も人竝に、

したひ見る心の色は猶殘る庭の紅葉に染もつくさて ——紫の一本

海晏寺の紅葉 品川に有、補陀山海晏寺といふ。禪寺の後比山一色は紅葉なり。秋の頃の夕日薄陽の江に浸もかくるゝとをこるゝ。詩人墨客此地は趣、詩淺賦し歌を詠むる。又此寺は鮫洲の觀音とて、鮫の吹出しとて所比者の信仰をる也。

——江戸鹿の子四年。貞享

元祿十五年長月十六日のあさあきよ、釣好ク人よはそそれ、海晏寺のもみちよ心をそめて、品川のいそこりせし事有。略。下

——類柑子

孟冬念五與篁溪中村伯行往觀海晏寺紅楓賦即興呈伯行



城南楓樹傲冬初。爛熳紅黃花不如。篁溪雅儒聽無寐。投簡走奴來倡予。路經碧浪駕扁舟。我自坦途乘竹輿。水陸異行君莫訝。扣過處處地仙居。聞說平生喜白鷗。底事今朝觀楓錦。豈從題葉艷情流。應愛冒霜義氣凜。已到海晏驚烘赫。信矣當時稱名品。楚岸吳江一併收。蕭蕭野寺好會飲。岩邊對立欲振毫。林下徘徊思煖酒。洗滌塵痕甘寂寞。逍遙物外樂悠久。吾性固無詩語工。之子獨有陶謝手。誰道暮鐘忽促歸。紅霞相映在山後。

海晏寺紅楓

野寺霜楓動詩興。幾人坐愛爲停車。織成錦繡滿林朶。染出臙脂二月花。晴輝斜射西山日。絳色遙連東海霞。驚見高雄秋後景。巨靈一夜置天涯。

儼塾集○寶永四年。

題海晏寺紅樹

古刹楓林簇晚霞。深深庭院駐年華。那知秋後風霜色。却勝江南二月花。

春臺先生紫芝園後稿

海晏寺の楓 本堂の後山皆楓樹之。秋の末尤佳景之。東路の記に楓樹千株あり、叡明寺道崇の石塔有と云。

夕日山 行人坂明王院の後山紅葉の名所と云

江府名勝志○享保十八年。

海晏寺賞楓

祇苑丹楓樹。孤峯對夕陽。禪房塵不染。佛界劫無量。鳴磬烟霞裡。懸燈日月傍。依然空色在。深映玉毫光。

蘭臺先生遺稿

海晏寺 ○武藏國在原郡南品川宿○中略。

紅葉 境內山上ニ楓樹多シ。紅葉ノ頃ハ、其色他ニコトニシテ、實ニ壯觀ナリ。秋コトニ諸人觀遊ス。是ヲ千貫紅葉ト號ス。又境內ニ千貫牡丹千貫松ナトノ賞。及寺域八景ナド、一時諸人ノ來賞セシ所アリシカ、今皆廢、纔紅楓ノミ。

新編武藏風土記稿

海晏寺楓

藤原 俣 ○太田定吉。

補陀山海晏寺は、江戸の大城の南にあたりて、武州荏原郡の内なり。そのかみ後深草のみかどの建長といへる年の頃、武州品川の海に大なる鮫ありて、洲の上のぼりて死せり。すなごもものども集り、かの鮫の腸をさき見るに、觀音大士の像一體をえたり。これによりてかの所を鮫洲とはなづけけるとなん。その頃平の時頼鎌倉にありてさる由を聞て、かのほとりに南北二十餘町、東西十餘町



の地をひらきて寺をたて、かの観音の像を安置し、山を補陀となへ、山を海晏となづけたりとなむ。今に時頼并に二階堂羽州の五輪の塔残りてあり。庭には千貫松千貫楓といへる二つの名木ありて、多くの楓秋深く、長月の頃は、わきて紅葉の色他にまさりつゝ、池にうつれるは、錦かとうたがひ、空にはゆふひの雲をやくにひとし。人あまた集りて酒のみ楽しみあへるさまを見るにつけても、彼の唐土の杜牧が詩に、車を停めてそゝろに愛す楓林の晩霜葉は二月の花よりもくれなるなりとつくれるも、かゝる所をや云ふならん。近き頃此の寺の御佛の帳をひらきをがませける時、牛込のかたほとりに三杵とかやいひけんあやしう工なる者ありて、此の山の嶺に大なる佛の座像の長六丈三尺なるを籠にて作りて、合羽とかいへる雨つゝみの衣にて張ふたぎ作り出せしを、品川大佛の開帳といひもてはやしけるもをかし。彼の山の嶺より南を見やれば、房總の山、品川の海、一目に見渡し、ゆく船、來れる船、あるは旅人、或は物あきなふもの、波にたゞよひ見ゆる事、こゝろかぞへがたし。終日酒のみあそべる人々の顔も、夕やけの楓にうつろひて、三縁山の入あひの鐘ならず、山をいて、牛込の里にかへりぬ。

——ひともと草

金輪寺長命寺ノ雪ハ、

雪

王子金輪寺

駒込の先岩淵の手前若一権現の宮あり。江戸の地をはなれて五十餘町。人家少く人稀なり。寺の後は深き谷に清き水流れ、古木生茂りて竹藪高く、世をのかれ静に住んには心とまるへき所なり。花の時は尋來る人もあれと、紅葉には見る人もなし。霜下り木の葉落れば、人めも草も枯はて、淋しさいはん方なし。雪の頃は猶更哀なるへしとて、陶々齋も遣佚も行て酒呑む。雲西日をかくして、あはくして影なく、竹北風を帶て、少き聲ありてちら／＼ふる雪、漸々庭白く、草の上には蝶まひ、樹より落ては花をなす、其興心詞も及はれず。されとも神光にもあらず、祖寢にもなければ、肌寒く身こゝゆるまゝ、さし請け引請け呑む酒の數重りて、何のうさもつらさもわする。若かりし時を思ひ出して小歌をうたふ。折節したんのさをに花りんのどう、八つ乳の皮てんじゆのしと、め、金銀を以てちりばめたるに、柏屋か糸に水牛のこま、象牙のはちをさしこみたる三味線あり。遣佚か是を取て弾けば、陶々齋は懷よりそらくんか切たる一夜切、秋の野に蟲

霸都時代ノ遊園

四八一



つくしの高蒔繪、葛の葉風と銘あるを取出て、音取を吹く、逆もの事の慰みに小歌はなきかと尋れば、生れは京のもの今淺草に住居をなす吳服屋たをれの善右衛門、幸茶の間に在り合せ、罷出てうたふたり、渡りくらへて世の中見れば、阿波のなるとに浪あらしと云京にてはやるなけふしを、聲もをします諷ひければ、遺佚かよむ。

聞く人の首なけふしの唱歌にも浪あらしとはよき小歌ゆへ

其折節、彼毘沙門山にて郭公の歌讀みたりし男來りて、戸塚山のあつかりしに今日の雪の寒さ、其時の琴の音は雲井にひゞき、今の小歌は心しつみて身にしむやうに面白しと云。然らば歌讀めと云、則書付る。

聲の色の身にしむはかり聞ゆるはなけの情のなけふしや。是略。中

牛島長命寺

牛島にあり。權現様御鷹野へ出御の時、御機嫌悪敷被成御座候に付、此庵に御立寄被遊て御茶被召上候へは、早速御快然被遊、寺の名を御尋被遊候へとも、纒の庵にて御座候へは、名も無御座由申上る。其時御機嫌克く、左もあるへし、御不例御快氣御満足に思召之間、目出度長命寺と可申之由上意にて、それより牛島の

長命寺と云。略。中十二月の初つかた長命寺へ行たるに、さらぬたに人氣稀なる古寺に、冬かれの野への氣色も淋しく、風ませにふる雪は、見るか内に垣を埋み、窓の吳竹はをれふせたれとも、隣を見する家もなし。草木いまた春ならずして花事うこき、乾坤いまた夜ならずして月花あらたなり、かの野亭雪と云題にて國房朝臣の、いかにせよとか雪のふるらんと淋しさ詫たるいにしへも、今更思ひ出られたるに、西の方は淺草川にて、声間漕く小舟も雪を乗せて棹さしかねて、佐野の渡りにあらねとも、袖うちはらふ影もなしとしのきかねたる有様、あはれに淋しく見ゆ。唐の子猷もかゝる所にや住みけん、戴安道かけふ舟をよせて興は盡きしものをと云。遺佚か讀む。

雪は猶ふかき軒端に年をへて長き命も積りぬるかな  
又そこにありける翁のよむ、

たとへ世に長き命をふる人も終に消ぬと見する雪かな

——紫の一本

道灌山

道灌山

霸都時代ノ遊園



略○上 道灌山より北東を見れば、かきりなくひろくと見渡し、能き景なり。筑波山も見ゆる。此山に花はなけれども、春は花見として、この山群集す。

——紫の一本

遊道灌山記

道灌山者、在武州新堀村。傳稱、太田道灌故墟也。去歲之春、余偶到其境、太愛景狀幽勝。一日與楓園主人藤孟幹談、及此事。孟幹有欣然欲見之色。余約爲之先導。今茲四月五日、當其期。積雨新晴、風物清和。孟幹早出青山、幽居到余蓬衡。余攜稚子與狗庸及塾輩四五人、各徒步、從孟幹而行。過篠筥池、則白鳥浴翼、鷺鷥伺魚、相親相近、不恐人影。孤島涵影、遠山送青、頗可人意。既而北過感夜寺邊、入幽逕。綠樹蓋隣、竹籬護屋、老馬當途、殘鶯度曲。野趣惟長、閑適有餘。攀坂路、屈曲而過、諏訪叢祠、喬木成林、莓苔封逕。有一老媪、樹下設坐、焦餅煎茶。狗庸且坐相語、問以前路。而後縋藤蘿、穿幽邃、高低之、又羊腸虎齒、雖蜀棧之難、莫及焉。數步之間、平蕪如織、群木接陰。孟幹相顧相驚曰、不意今日入如此佳境。一草一木、共寓留玩之志。風雲泉石、皆是塵外之物也。所謂別有天地、非人間者也。狗庸踞松根、吸烟酒。曰、初聞其名、而不信其境、今見其境、倍於其名。余與孟幹相共點頭而去。又入幽邃數十步、懸帷幔於松枝、蔽翳風日。展筵席於

苔逕、偃息烟霞。麥隴在前、漸成漸熟。堤塍相轄、疆場以分。微風逐次、湧千層之波。溽露揚光、含萬點之珠。與野夫談、與田父語。清泉在下、行人飲馬。鄉童濯足、幽禽爲友。遠山爲客、牧笛遙聞。村歌近報。携行厨適意食、開小樽任醉飲。坐而吟、臥而吟、無一點塵芥在胸次也。半日之間、爲無懷葛天之民者、不亦樂乎。下坂傍畝、問農家而休、入松林而坐。小酌微醺、而後歸家。時已昏也。嗚呼、華山之華陽、武陵之桃源、佳則佳也。然失行路、不審真僞、豈與此境可同月而談哉。因押秃筆、以記勝概云。

——鳳岡林學士全集

道灌山にのほる

道灌や花はその代も嵐かな

嵐 蘭

——猿蓑○元祿四年

道灌山 感應寺を八町程戌亥方日暮里に在。太田道灌出城の跡と云。山上より東北に筑波山見ゆ。又東に見ゆる赤岸は、總州國府臺と云。此山の入口崖上は船繫松として、大木の松二本あり。又此邊昔の日くらしの里と云と之。今のあつほとと呼。

——江府名勝志○享保十八年

道灌山 一名を城山ともいへり。南に新堀を限り、北に平塚に接す。往古太田道



灌江戸城ありし頃出張の砦城とせし跡ありとも、又關道觀坊といへる者の第宅の地ありとも云傳ふ。道觀坊、そしめ、小次郎長耀といふ。後、雜髮して道觀坊と稱るも、此此地藥草多く、採藥の輩常よこよ來れり。殊も秋の頃の、松虫鈴虫露よふりいて、清音をあらはす。依て雅客幽人こよ來り、風よ詠し月よ歌ふて其音を愛せり。

——江戸名所圖會

虫

道灌山 日暮よぞ王子への道筋飛鳥山の續なり。むろし太田道續出城の跡ありといふ。くはくはの虫ありて、人まつ虫のなたいはまきふりいて、あく鈴虫み馬追ひ虫、響虫のかしましたなぞ、おののその音いろ夜聞んとて、袂すしき秋風の夕暮よぞ、人々はみあつまき梨。

——江戸名所花曆

道灌山 新堀村ニ屬ス。谷中ノ臺ヨリ北ニ續ケル小丘ナレト、佳望飛鳥山ニ亞ク。而テ雜木繁茂シ、幽邃ノ地ナレハ、秋夜杖ヲ引テ虫聲ヲ愛スル雅客少ナシトセス。又藥草ヲ生スレハ採藥ノ者モマ、來レリ。武藏風土記稿ニ曰、按ニ江戸志等ノ書ニ、此山太田道灌カ砦蹟ナル故ニ名稱トスト云ルハ誤ナリ。落穂集追加ニ、當所ハ關道閑ト云モノ、邸蹟ナル由ナリ。又谷中感應寺及ヒ根岸善性寺ハ、

關小次郎長耀入道々閑ノ開基ニシテ、此人此邊ヲ領セシナト傳フレハ、關道閑ノ居蹟ナルコト明ケシ。太田氏ハ當國ノ名家ナレハ、近郷ヤ、モスレハ彼カ事蹟ニ附會シテ古事ノ稱トス。然ルニ當所タマ、道カンノ名アルヲ以テ、終ニ太田道灌カ砦蹟ナト云始シニアラスヤト云リ。

——東京府志料

道灌山

日暮里村灌山ニアリ。連岡ニシテ、西飛鳥山ヨリ此ニ至リ、南シテ天王寺上野ニ互ル。古名ヲ新堀山ト云。江戸圖說。江。又蠣殻山豐島郡記。城山江戸名所圖會。等ノ稱アリ。高六拾尺。南ハ谷中町ノ臺ヨリ、北田端村ニ至ル。長八町三拾間。中央諏訪神社アリ。諏訪臺ト云。其東北隅田端村ニ接スル處ヲ道灌山ト云フ。廣凡壹町步許。喬檜盤松ノ下細草平布シ、坐臥瞻望ニ供スベシ。其眺觀大抵飛鳥山ニ同シ。又其地藥草ヲ産スルヲ以テ、採藥者常ニ來搜シ、江戸圖說云、往時、板秋夕ハ又鳴虫ノ清亮ヲ賞スル者アリ。古ハ關長躍小次郎入道道閑此地ヲ領シ、其邸址ナルヲ以テ道閑山ト稱スト云。今道灌ト書スル者、太田

——武藏通志

朱之瑜後樂園賦

九年己酉〇寛文〇紀元二〇三二九年三月、明人朱之瑜〇舜後樂園〇市内小石川區ニ遊ビテ賦ヲ作ル。〇後樂園紀事。

霸都時代ノ遊園

四八七



朱之瑜後樂園賦事蹟

朱之瑜後樂園賦 寛文九年三月朱之瑜後樂園ニ遊ビテ、游後樂園賦并序ヲ草スルコト、上文記ス所ノ如シ。

濱屋鋪築庭

十一月廿九日戊子○寛文九年(紀元二三二九年)○戊子(三正統覽) 甲府○甲斐國 城主松平綱重

○參議 濱屋鋪築山泉水成ル。奉行等授賞有リ。○甲府日記

濱屋鋪築庭事蹟

濱屋鋪築庭 後ノ濱殿庭園ノ濫觴也。

十一月廿九日○寛文九年 陰日天、申刻○雨。

濱御屋敷御作事奉行仕候付、御○やうび被下覺

銀五枚

反町武兵衛

同三枚

玄齋

是ハ、御築山泉水、同所ニ奉行仕付被下也。

右之通奥詰坐敷ニテ、淡路守被申渡之、壹人宛罷出頂戴之。——甲府日記

櫻附野記

〔附記〕 櫻野

小日向龍興寺ハ、五タビ其境ヲ轉ズ。其小日向ニ移ル何レノ日ニ在ルヤヲ知ラザレドモ、同寺文政書上寛文九年古跡地ニ加ヘラルト云ヒ、開山玄門和尚寛文

十三年迂化スト云ヘバ、是ヨリ以前ナルハ勿論也。○小日向志寛永頃。寺傳ニ其地初メ櫻野ト稱シ櫻樹有リテ遊觀ノ地ナリシト見ユ。今姑ク此ニ附記ス。  
慈雲山龍興寺 ○小日向略

鎮守櫻野大權現社 三二尺七寸。神體古木櫻 周長壹尺九寸 右者往古俚諺ニ、此地を櫻野と申候由、當地櫻樹盛之節神君様家康○徳川 御歌御短冊被下之、其後上覽被爲在候櫻の古木を神體ニ奉仰、櫻野大權現と奉稱候由申傳候。  
神君様御歌之寫左之通、

はるよゆくみちをまたれもあまをあらこそのはくらにりせをまちつゝ、

——續府内備考

小日向ノ龍興寺ハ高處ニシテ、富嶽遠眺ノ勝地ナリ。寺ニ櫻樹アリ、神祖御詠短冊ニ書セ給ヒシヲ藏ムト、コノ地始メ櫻樹多クアリシ曠處ナリ、神祖御遊覽ノ片御詠ヲ櫻樹ニツケ置レシヲ、其邊ニ釋迦文院ト云ル眞言ノ小院在リテ、歸御ノアト右ノ御詠ヲ取收メオキシヲ、寺ノ開山玄門和尚創建ノ片、コノヲ見立テ、暫ク釋迦院ニ寓セシニ、ソノ御詠ヲ請受テ、龍興營造ノ片、寺ノ鎮守トシ、小祠ヲタテ、御短冊ヲ神體トシ祭レリト云。御詠ハ終ニ往ク道ヲハ誰



モ知リナカラ去年ノ櫻ニ風ヲ待ツ、龍興寺ニ開テ所記ニ——甲子夜話

慈雲山龍興寺略。中玄門和尚ハ心ならほも四ツ谷町の邊へ遷り、その、ち願ひ上て今の地を賜りたり。これ寛永の頃ありとぞ。略。中其頃ニ此地人家もあらで、茫々たる芝原あり。櫻樹多くして花の頃の人々のつとへる事今の東叡山飛鳥山のことくありしといへり。されハ地名をも櫻野といひける。櫻野迹。是も服部坂の上よて、龍興寺の邊あり。此邊むろしの芝原よて數十株の櫻あり。花の頃の人々歡賞しけるとぞ。略。下——小日向志

不忍池築島

十年庚戌〇寛文二〇三三〇〇年紀元不忍池中島〇市内下谷區側ニ一小島ヲ添築ス。僧

都了翁ノ經營スル所也。〇紫の一本。武江年表。

不忍池築島事蹟

不忍池築島 紫の一本武江年表等、左ノ如シ。教育宗教兩篇ヲ參看セヨ。

不忍池

東叡山の西にあり。池の東は谷中への道なり。南より西へは池の端と茅町つゝきて、谷中善光寺へ出るなり。池の中に島あり、辨財天の宮なり。是は水谷伊勢守の建立なり。此島の南の方に小島あり。是は錦袋圓を商ふ勸學屋大助といふ家

名の本主了翁といふ出家、銅の瓦にて經堂を作り、一切經を納めたり。藏三つあり。又北の方にも小島あり、是には聖天の禿倉を建つ。此島奇麗にして景地よし。松生茂り、常に風あるに、池水すゝしく、夏の夕暮には歸るさをわするゝは花の下の詠めにもまされり。一とせ谷中感應寺へ打つれたちてまうてつるか、此池の端を歸るに、頃は霜月八日の夜なるに、風も絶えて池の面靜なり。西にかたふく月の影も朦朧としてさたかならざるに、池のこなたの汀のさゝ浪、蓮の枯葉のうかひたるに見ゆれと、西の方は霧にやあるらん、打くもりて家居も山も見えず、池の水よりつゝきて宮もひとつになるに、辻番の火はかりほのかに見ゆるは、いさり火かと疑はる。心ある人はさこそ感情を動すへしと戯れたれば、遺佚口の下よりよむ。

風絶て池靜なる水煙冬ともわかぬ朧夜の月  
陶々齋も亦つふやきける。

更る夜の風靜なる水の面の月より見する池のさゝなみ

——紫の一本

寛文十年庚戌

霸都時代ノ遊園



了翁僧都不忍辨才天社の脇に地を築立、小堂を建、内外の書籍を収て諸人にを  
しますして紐とかしむ。天和二年東えい山よ學寮を立、書籍をこれようつす。  
同文。寛十一年辛亥

了翁僧都、不忍湖中新に築く所の地へ、輪藏を建る。

——武江年表

十一年辛亥二〇寛文〇紀元四月、金澤賀國加城主前田綱利加賀守本郷

○本市内ノ園林ニ命名シテ育徳園ト曰ヒ、幕府ノ儒員林春勝

○本郷區以下ヲ招キ、景境ヲ撰定シテ詩ヲ題セシム。參照。上文

育徳園景境撰定 上文ニ之ヲ併記スレバ略ス。

加賀羽林菅公綱利園中廣大、中文饒之平泉、不可比焉、必大之平園、亦可輕蔑

焉。辛亥一〇寛文之夏、偶應其佳招、爰遊爰息、舉其尤者、標出八景八境、而定其名。然園

未得其名。主君自擇育徳二字、爲之顏色、可謂相應之佳號也。前後略。育徳園景境詩序。

——鶯峯先生林學士文集

是年元〇寛文三十一一年紀名古屋張園城主徳川光友納言和田戸山市中

内牛込區及武藏國豊多摩郡ニ別業ヲ賜ヒ、林泉ヲ築ク。尾張藩邸記。純堂叢稿。

育徳園景境撰定事蹟

育徳園景境撰定事蹟

和田戸山庭築造

和田戸山庭築造事蹟

和田戸山庭築造 尾張侯徳川光友別業ヲ和田戸山ニ賜フコトハ、尾張藩邸記ニ、

戸山御屋敷新道御屋敷共

寛文十一亥年御拜領

一、八萬五千拾八坪

御抱屋敷之分 一、四萬六千貳百貳拾坪半、濟松寺領祖心宗參寺地入合

内無年貢地壹萬三千四百七拾五坪半。〇中略

右御抱屋敷之分ハ、御下屋敷御拜領以前ハ御求、御下屋敷一所ニ、御圍ひ之由。〇中略。

一、兩面御茶屋大松邊ハ元山西水門より御泉水端通り新御茶屋邊、祖心比丘尼

自證院様御兄。拜領地之所、瑞龍院様に差上度旨、數年祖心相願、被遊御求、永代無

弟俗名おこる。年貢代金貳千兩。

同年 一、表御門通りハ御守殿をあげ、東入込表往還通り西辻番所迄、御籬本稻垣數馬

殿宮崎助右衛門殿畑屋敷御求。地代金七百兩。

同九四年 一、新道御屋敷分、百姓地ニある五反五畝十六歩、茶や長意求分ニある御買上。

同十一年 一、是年ハ追々御家作り、事繁故略之。

同十一年 一、西水門ハ御泉水通り西南山より拔御門東築留迄、八萬坪御増地御拜領。

延寶元年 一、新道御屋敷東之方ニある公義御先手同心十人之屋敷ヲ四谷大下御屋敷西境



ニる代地被遣御替、永代無年貢之。同年新道御明被遊ニ付、同心屋敷御所望、代地  
 一、東隣齋藤左源太殿下屋敷西境ニる右坪數御所望、同心へ被遣候。永代無年貢。  
 一、同、地南ハ流通リ、西ハ一番所前垣外通り、東ハ車力通り、北ハ屋敷尻迄百姓屋  
 六反四畝三步御買地、永代無年貢。代金貳百兩之。  
 一、大塚御門ハ拔御門迄、外ハ往還通り迄、濟松寺宗參寺并御簞筒同心領ニ候處、  
 御替地ニる角筭御屋敷ニる代地被下、永代無年貢之。此節被下物合金三百六拾  
 壹兩壹分。  
 一、御作事場中通りハ後谷通り、并疊藏通中車力御門迄、天神之宮地ニる。今穴ハ  
 有候處、宮地七反七畝廿一步八重畑壹反八町三步六厘同地共代金百兩ニ御買  
 上、永代無年貢。  
 一、同、五巳年御作事車力御門通り西之方ニる百姓屋敷三畝六步御買上、代金貳拾貳兩。年  
 貢地。  
 一、同、七未年同、地之内百姓地三反三畝十五步御買上。  
 一、元、祿八亥年御添地ハ御簞本脇坂甚兵衛殿扣屋敷ニ候處、玉置市正扣分ニる三千貳百五  
 拾八坪餘、代金貳百兩ニる御買上。○中

一、寬、延元辰十月二日濟松寺領牛込原町惣地面五千四拾三坪、菅沼伊賀守殿抱屋敷ニ候處、代金百  
 三十兩ニる御買上、年貢一ケ年、金九匁銀十一匁五分定、毎歲濟松寺へ遣候筈。右  
 一、當時新御添地と相唱候。

ト有リ。○市街篇是ヨリ先和田戸山ノ地ハ、紫の一本ニ左ノ如ク見ユ。  
 和田外山

高田の内なり、尾張黃門光友卿の御下屋敷となる。此所に一本松あり、其松を則  
 野山の御庭にしつらはるゝ。東に天神山七面の明神ありつるか、其後みやうか  
 澤の山より大久保まで御屋敷の構に入て、天神と七面も、替地を下され他所へ  
 移る。

庭園ノ築造ハ、純堂叢稿ニ據レバ、寬文十一年ニ著手シ、而後邸地ヲ添フニ從ヒ、次  
 第二規模ヲ弘擴シタル者ノ如シ。

尾州公戸山御庭記

兩臨堂 以前ハ兩面之御茶屋と唱申候。  
 延寶三卯年出來、此御茶屋より御殿御庭之間邊竹垣内、太田道灌屋敷跡之由申  
 傳候。



道灌松

往昔太田道灌物見松にて、江戸中に見へ候由申傳候。其後枯候ニ付御伐セ御座候筈ニ、杣伐リ懸リ候節、血の如く成ル物出、杣も怪我致候につき、伐り候義相止ミ申候由、今に枯木其儘ニ御座候。右邊ハ元山邊、西御水門ハ御泉通り新御長屋邊まで、祖心比丘尼拜領地ニ候處、瑞龍院様に差上度由、靈仙院様に數年祖心願ニ依、寛文七未年永代無年貢地に御求御座候。右祖心比丘尼ハ、自證院様御兄弟にて、俗名おこゝと申候。俗之節者御奉公相勤られず候得共、比丘尼にて御奉公勤タレ、大猷院様御出頭之由ニ御座候。

水神宮

右宮市ヶ谷より御引移御座候由、社之後より清水湧出、修仙谷之内ハ流れ、同所御茶屋前にて貳間余ニ五六間之地洲ニ成、小舟等も御座候由、瑞龍院様御逝去の頃ハ水涸候由申傳候。

錦明山 已前者、天神山と唱申候

天神山并御拜殿鳥居、延寶七未年御取建御座候。右天神御大切ニ被遊候ニ付、拜禮奉願候輩有之候得者、御前に奉伺候由、右天神御軸物、座像、上ニ十一面觀世音

雲に乗くたり給ふ躰の畫に御座候。錦明山ニ御座候躑躅者、おごも躑躅と相唱へ候由、瑞龍院様御聽させ被遊候由申傳候。右同所御茶屋、右出來之年限相知不申候。

修仙谷 已前ハ大谷と相唱申候。

元御數奇屋者、元祿四未年出來、其後大破ニ取毀ニ相成候、無御座候處、寛政五丑年御茶屋再御取建出來。

臨遙亭

元祿二巳年御取建御座候。右同所御額者、瑞龍院様御筆之由ニ御座候。御縁先ニ龍虎と名御座候。右之虎たりとハ龍ニ、御座候。

竹御門

延寶六午年出來。右御門御額、瑞龍院様御筆之由御座候。

鳴鳳溪 已前ハ龍岡と相唱申候。

右御所橋、寛文十一寅年出來。

細田御在郷家

延寶元丑年出來。右御在郷屋敷前ニ細キ田御座候ニ付、如此相唱申候。



竈御在郷屋 右同斷出來。

宇津屋地藏堂 延寶五巳年御取建出來、御銅佛地藏天一躰御座候。

掛橋御在郷屋 右同年出來。

坂下御門 寛文十一亥年出來。

茯苓坂櫻之御茶屋、黒木之御茶屋、菱屋御茶屋、二三回三ヶ所御茶屋。

右御茶屋之方、延寶五巳年出來、御成之節、此所ニ御重御食籠御酒御菓子等飾り申候由申傳へ候。

和田戸大明神 往昔和田戸山村之鎮守之由ニ、此邊氏神由申傳候。

和田戸明神主宅 延寶五巳年出來。

達磨堂 延寶六午年出來、達磨像、御彩色、山田良齋細工之由申傳へ候。

玉圓峯 以前者九ヶ嶽と相唱申候。

御泉水御堀らせ御座候土、男女拾五歳以上之者、土を御運はせ被遊給ひ候節ニ、抓錢被下置、此御山出來いたしけり。是者大原邊之内百姓地ニ、御座候處、高田源兵衛村邊に代地被下候ニ付、御救ひニ右之通被仰付候由申傳へ候。

琥珀橋 右橋長サ拾五間。 四ッ堂 元祿九年出來。

傍花橋 延寶元丑年出來。 隨柳亭 右 同年 出來。

吟涼橋 寛文十一亥年出來、土橋ニ、相成申候。

王子權現

右王子權現社并御拜殿、延寶元丑年御取建御座候。王子權現の別當宗傳寺の地面御庭内に入候節、宗傳寺早稲田町中里へ引移申候由、鳥居ハ寛文十一年出來。役之行者堂 寛文十一亥年御取建出來。

右行者堂有之候、笈螺貝ハ、鈴木三郎重家一所持之由ニ御座候と申傳へ候。但し行者彩色木像一躰、前鬼後鬼木像貳躰有之候。

文珠堂并仁王門

右堂者延寶五巳年御取建御座候。文珠菩薩一躰、外ニ御厨子入不動尊一躰有之候。古來正九月護摩御祈禱候處、其後西山にて修行御座候。仁王門 院様ハ本壽院様に被遣候由。四ッ谷御下屋敷御座候處、此處へ御引移被遊候由。

小庭山 山寺并鐘樓堂

延寶五巳年御取建出來、御銅佛阿彌陀如來一躰御座候。此所の御額ハ、瑞龍院様御筆之由。此所ニて二季の彼岸御膳被召上、この節御庭に罷出候者共ハ御土器



にて支度被下置候由申傳へ候。

六社 御庭内所々ニ有之候小宮、此所に御集させ御座候。

寛政五丑年御取建出来。右者東より一、菊之宮、二、稻荷、三、同斷、四、同斷、五、水神之宮、六、梅園稻荷にて御座候。

古道岐

鎌倉海道川越街道ニ御座候。鎌倉海道之脇より大原之内ニ御座候。五葉之松ハ、御庭取建之節、水戸様より被進候由、申傳へ候。

神明之社 延寶三卯年御取建出来。

臺 以前ハ大草御物見と相唱申候。

乾山 以前ハ大原御茶屋と相唱申候。

望野亭

貞享四卯年出来。右御茶屋前に御庭舞臺と申候由。此處ニ薄縁幅拾枚餘長五間程敷、度々御能被仰付候由申傳候。

稻荷社

二重之塔、延享元丑年御取建出来。本尊御銅佛釋迦如來ニ御座候。

山里御數寄屋 延享元丑年出来。

山里御數寄屋御勝手小屋 寛政六寅年出来。

奥之院同所洞之阿彌陀 延享五巳年御取建出来。但シ奥之院ハ御厨斗ニ御座候。洞の阿彌陀ハ瀬戸焼に御座候。

藥師堂 貞享四卯年御取建出来。藥師如來御軸物御彩色ニ御座候。

養老泉 以前者養老水と相唱申候。

右御茶屋、貞享四卯年出来。門前堀貫井戸同年出来。此處瑞龍院様御歌ニ、

山人の菊の白露積々し老を養ふ泉水の水

三嶽權現

右御神躰ハ、三嶽安置之宮ニ向て、左ニ神社、右ニ水分神社ニ有之候。そあり子守大明神、藏王權現、勝手大明神之三躰と申候。延享元丑年御取建御座候。右社地御庭内ニ相成候節、別當夾山寺諏訪村に引移申候ニ付、右社地枯木落葉下草等今に至迄毎年夾山寺へ被下候。

三嶽前出茶屋壹ヶ所 延寶五巳年出来。

臥龍 以前者石垣嶋と相唱申候。延寶五巳年出来。



番神堂

右三十番之堂、飛彈内匠作之由、七軒寺町淨運寺を申寺ニ有之候所、今之地ニ有  
取建御座候由、此地元ハ高田亮長院跡之由申傳候。

人磨堂

右者享和三亥年正月廿四日夜御類焼、當時無御座候。

古驛樓 以前者外屋と相唱申候。

右者享和三亥年正月廿四日御類焼ニ有御座候處、文化十二亥年再御取建出來。  
御町屋敷數、古驛樓初都合三十六軒、間數百十三間半、御脇茶屋迄寛政十二子年  
出來御座候處、三十六軒之内廿九軒享和三亥年正月廿四日御類焼ニ有御座候  
處、文化十二亥年古驛樓初御町屋九軒再御取建出來。  
御町屋高札文段者、瑞龍院様御好之由申傳候。右文段左之通、

制札

一、於此町中、喧嘩口論無之時、番人ハ勿論、町人早々不出合、双方不分、奉行所に  
不可届ル事。

一、此町中押賣不及了簡事。

一、竹木之枝裁利支丹堅停止之事。

一、落花狼藉いかにも苦事。

一、人馬之滯有てもあくても構あき事

年號 月 日

大日堂

右者享和三亥年御類焼、當時無御座候。

三軒茶屋 梅園御門 御町屋前出茶屋、壹ヶ所。

右出茶屋延寶七未年出來、享和三亥年御類焼、當時無御座候。

隱里 以前者隱里御茶屋と相唱申候、延寶三卯年御取建出來。

此御茶屋ニ瑞龍院様御逗留も被遊候由申傳候、御額の歌に、

隣ある庭の内ある隱里われも浮世の外とたもへは

續千載集春上

前大納言爲家

花を見て慰むよりやみよし此、山を浮世の外と是を和歌にして讀せられ

給ふ御事か

彩雲塘

霸都時代ノ遊園



百日紅林ニ御座候。橋有之候。橋下ニ御座候長石を牛石と唱申候。橋際ニ有之候大石を虎石と唱へ申候。右橋下に、瀧口御座候。此所ニ猷骨車御懸させ下御泉水の上ニ水御取せ御座候由。

辨天嶋

辨財天社内物殿鳥居同所反橋共、延寶七未年御取建出來。右神體御由緒御座候由ニ及、初る御取建之節、瑞龍院様御自かゝ御和巾御掛ケ被遊候之由申傳候。右神体上ニ辨才天繪像、向て左に毘沙門天繪像、右に大黒天繪像蓮花の上に有之候。

五重塔 元祿六百年御取建出來。

世外寺跡

右世外寺、堂ハ九間ニ七間、床裏廻廊堀二重門共、延寶元丑年御取建御座候處、自證院類焼之砌、自證院様御法事も御座候ニ付、元文四未年右院被遣、御取建被遊候。

世外寺鐘樓堂

右鐘銘左之通、

武藏國豐嶋郡和田戸山者我君公之別墅也。此地有好山美□、怪岩奇石。又有  
一支小流、新筑長堤、斷而止之。乃爲萬子巨池。鳥浮而不驚、魚踊而不畏。動者植者、  
風物萬千、無處不遊、目胎神也。春則名花掛錦、芸草鋪茵。夏則新樹茂陰、薰風徐來。  
秋則月映楓林、知夕氣佳。冬則歲寒雖重、松柏不凋。四序之壯觀、樂亦無窮也。當西  
南雖有梵刹之古跡、方今經營堂宇、以興廢、一遊此則襟懷高潔、宇宙亦寬、都無寵  
辱之情、何有是非之累。亭立物表、脫却世間。名之曰西南山世外寺。爰構一樓、以揭  
蒲空、命予作之銘。曰。

西南之山、世外之寺。春秋長在、乾坤別置。

一樓新架、九乳始備。釋家洪寶、神廟重器。

五更霜降、半夜月墜。洗此塵□、驚他昏睡。

撞聲下愚、興起上智。遺響千年、其德惟至。

延寶五年丁巳二月吉祥日

洛東匏繫子撰

治工三宅伊勢守藤原正次

八幡宮

右社享和三亥年御類焼。當時無御座候。

霸都時代ノ遊園



觀音堂 九尺四面之堂御座候。元文四未年出來。瀧見之觀世音、御彩色木像、御前立不動明王、御彩色木像、御厨子愛染明王、御彩色木像、一躰、御厨子入辨財天座像、木地木像、小社一宇、大黒天、以上右觀音堂安置。此所ニおゐて毎年正五九月護摩御祈禱御座候由。右護摩修行之儀、前々者□寶寺又ハ高田瀧泉院相勤候處、正徳四年九月の穴八幡別當放生寺修行仕候。近頃ハ正月護摩修行御座候。右堂者圓覺院様ハ本壽院様に被遣、四ツ谷御下屋敷ニ御座候處、御引移被遊候。右堂ニ御座候大黒天ハ、正徳三巳年市ヶ谷御座候、此處に御移被遊候。

御馳走所 但、堂守宅とも申候。

延寶三卯年此所ニて護摩御執行之節、御□被下候。此下ニ庄兵衛敷といふ所御座候。昔ハ庄兵衛屋敷跡之由申傳候。

虚空藏堂

右御堂ハ、享和三亥年御類焼。當時無御座候。

河東三軒屋 延寶五巳年出來。此三軒屋川越小屋共相唱申候。

濯纓川

以前ハ大井川と相唱申候。此川前ニ者川幅廣く砂利石之河原にて御座候處、今

ハ小川ニる御座候。右河原之内除ハ、攝津國小田之蛙御放シ被遊候處、夫より外之蛙音を留申候よし申傳候。

志水御在郷

延寶三卯年出來。堀貫井戸三ヶ所有之候。内貳ヶ所者前通川中ニ有之候。

西南山に渡ル反橋 此橋之流上ハ玉川之由、大久保邊ハ入候。水門鐵網延寶七未年出來。

稱徳場 右御馬場追廻ニる、長七拾三間。御馬見所ハ延寶七丑年出來。

石段御門 寛文十一亥年出來。

御鞠場

餘慶堂

御縁先に半鐘有之候。横須賀海よて漁父の引網に上り候ニつき、漁父差上、此所に御あけ被遊候由申傳候。右餘慶堂の富士は江戸百富士之内にて、木の間之富士と申候由。

文化十二年亥四月改

宇野十郎右衛門

——純堂叢稿

延寶二年甲寅○紀元二  
三三四年牛島○市内  
本所區弘福寺ヲ營造ス。假山亭榭ノ

弘福寺營造

霸都時代ノ遊園

五〇七



築設有リ。○新編武藏風土記稿。葛西志。武江年表。

弘福寺營造事蹟

弘福寺營造 相傳フ、

弘福寺 黃蘗宗山城國宇治萬福寺ノ末、牛頭山ト號ス。當寺元善左衛門村内香積山トイヘル小菴ナリシカ、黃蘗二代木庵ノ弟子鐵牛延寶二年爰ニ移シテ、山號寺號ヲモ今ノ如ク改メ、堂舎寮坊善美ヲ盡シテ落成シケレハ、大家ノ歸依日々ニ増加シ繁榮セリ。開基ハ稻葉美濃守正則ナリ。元祿九年歿シ、潮信院泰應元如ト法諡ス。本尊釋迦、惠心ノ作、長三尺坐像ナリ。脇士迦葉阿難モ同作ニテ、立像長三尺五寸。延寶五年十一月二十一日嚴有院殿御遊獵ノ時、當寺ニ渡御アリテ堂舎ノ落成ヲ上覽マシム、白銀許多ヲ賜ヒ、夫ヨリ後タヒム御膳所トナレリ。

——新編武藏風土記稿

弘福寺ハ、葛飾郡西葛西領須崎村ヲ在。牛頭山ト號ス。此地もと牛島ニ屬ス。故取リ。境内除地八百貳拾六坪、年貢地貳千八百三拾五坪、通計三千六百六拾壹坪。本寺ハ黃蘗山萬福寺ニシテ、長松下取リ。又葉山派稱ス。開山ハ大慈普應鐵牛道機和尚、開基ハ相州小田原城主從四位下侍從稻葉美濃守越智正則朝臣取リ。初ハ同郡須田村の支村善左衛門新田小名香盛島といふ地ニ在。寛永四年丁卯

僧某此村ニ古跡の除地ありしよつて、一寺を建て、香積山弘福寺と號ス。寛文九年己酉鐵牛和尚此徒兆溪といふもの、其村長等と議り、和尚淺請て住持とシ、因テ黃蘗此寺トハ取リぬ。同十一年辛亥村長等和尚を推して開山とシ、其比ハ小田原紹泰寺ニ住持せられし取リ。延寶二年甲寅須崎村の長中田某、その村人小關、龜岡、石川、三谷等此四人と、も和尚ヲ歸依し、官ヲ乞ふて寺を村中此葛西三郎清正此城趾ニ移シ、是取リ。同三年乙卯七月美濃守正則朝臣とし、於テ佛殿を建つ。寛永四年草創よりこゝまで至テ四十八年取リ。佛殿南向、縱六間、廣七間、二重屋根。庚午富永氏梅林院元香尼建立。佛殿北ニ在。文政八年乙酉改建。達觀臺、書院の庭、池此西ニ在。亭あり。鐵牛和尚の詩有。區ニ達觀亭といふありし、淺引移し、りといひ傳ふ。佛殿此前、差右ニあり。大樹取リし、淺、近年伐りて、ち此ニ殘れり。因州家位牌所、幡守、松平家位牌所、松平家位牌所、因州家墓所、山堂趾、禪堂、井伊家位牌所、齋堂趾、松平家位牌所

霸都時代ノ遊園



松平宮内少輔○中略。本多家位牌所施主本多彈正天王閣略○中稻葉家位牌堂略○中門中略。外門○中鐘樓略○中伊勢春日八幡社略○中九神社略○中鹽竈社略○中八僧稻荷社略○中。天桂石略○中。——江戸黄檗禪刹記

一書令啓進候。彌御無事ニ御座候哉。承度存候。其許ハ事の外寒氣大雪之由候。爰許ハ其許ニ而御氣遣候程ニ無之。扱々暖ニ而大慶申候。其故少も當不申。上下息災。靜成年を送り申事ニ候。必々御氣遣被下間敷候。寺之事萬々頼入候。爰許も普請も段々出來。慰ニ罷成事ニ候。貴公御事來春彌御見廻可被下と。待入申事ニ候。左候ハ、其許梅櫻椿。其外樹木花木。何ニても珍敷花類有之候ハ、外御切札銘々候付。そと儀拙僧へ之御土産に被成可被下候。其段別拵へも申遣事ニ候。松浦鎮信之松浦梅と申珍敷花有之候。山村十郎右様ニうす紅梅花在候哉。聞有之。珍敷花有之候由。是も別詔へ申遣候。才覺付候ハ、御持參頼入候。爰許之様子何も早懸御目度候。須田彌次右。伊介御内方。其外能々御心得頼入存候。恐惶不具。

十二月十八日

鐵牛花押

中田伊兵衛門殿

武州文書

牛頭山弘福禪寺記

鐵牛和尚

寺扁弘福表恢復也。山名牛頭。志牛王之瑞也。又以地勢冠於牛宮。故不忘所自也。結艸於寛文壬子。二十二年。擇基於都城之寅二里。傳說古之城郭也。其地曠而且夷。形勝秀麗。所以經營招提。興隆禮樂也。元祿丁卯。四年。秋。予辭紫雲歸隱于此。是歲鳩工。越四年而告竣。大雄殿中峙。狀若翔鸞。世雄南面。欲光慶喜旁侍。併伽藍主少林祖兩陔座鎮。皆大手所造。梵容生動。瞻者起敬。方丈寢室。三友軒。茶軒。厨庫。侍司之屬。枕其後。方丈則先國主家綱公之所宴息。其四壁所繪。皆狩家名筆也。寢室後設甘露堂。奉天目山木根大士像。西則監院寮。慈觀堂。祠堂。綱維寮。禪會寮。東則高接軒。知事寮。米穀藏。束司。延壽寮。棲僧之房。春碓之屋也。回廊廡簷。雜襲闐湊。疊甃環砌。以疏溜水。選佛場亦安。十一面大悲靈像。乃陳和慶之所造也。法喜堂像。監齋使者。并映翼大殿之左右。與夫鐘樓溫室。皆次第緒。背樓縮白雲軒。垂蘿分蹊。聊備且過也。又構閣於大殿之前。安契此和尚四天王暨韋將軍之像。閣右建鎮護宮土地祠。閣前西拆洞。敞三門。大都芬橈二十有餘也。其境前離後坎。東北屬葛飾縣。沃野千里。南至滄海。西開江都。周袤殆二十里。於是彊以沼渠。培以簷簷。凡得經緯三千餘步也。松杉檜櫟。鬱々成叢。方丈之西。築假山。效支遁之買沃也。大殿前樹雙桂。蓋表二株嫩桂之識也。溫室前有



井其泉宜茶。盛沸於百尺之底。三伏弗涸。或時有白蛇蟠屈。是乃大辨天之顯跡。而泉之爲靈。良有以也。名曰白蛇井。其傍有大榎。虬蟠於十畝之際。脩幹拂霄。橫葉蔭地。古老謂是宇賀神之所托伐之。則苟家必有灾。名曰宇賀木。其下建天女祠。鑿池種蓮。以備放生。名曰琵琶池。以其狀似之也。天王閣左右有紫薇花。又有櫻桃挾路。花時如雪。名曰櫻雪庭。其前則水田万頃。屬玉成群。名曰白鷺田。其交有邑曰小梅。開莊園數頃。中卓菴曰圓通。亦寺之所管領也。又寺右有王子宮。國人事之。靈應如響。或曰牛宮。而牛頭之號本于此。宮外有長隄。北通奧羽。將千里。南接大橋。艸色接天。名曰青繩隄。望之渺茫無涯。其洋洋乎而來者。隅田川也。沂源則可以千里于信上。順流則可以一葦于總房。水陸之間。皆諸國之所貨殖也。至若泛樓船。奏絲竹。浴漣漪。修棧楔。亦都人士女之所遊觀也。其西有雪山。崛起萬丈。而冠於三州者。富士峯也。杜草堂詩曰。窻含西嶺千秋雪。門泊東吳萬里船。預爲吾山設乎。極遠則箱嶺。甲嶽。秩父。日光。崔嵬壁立。如屏如畫。或伏或起。王氣上鍾。卿雲下屯。實太平之景象也。更有粉壁映曦。雉堞摩漢者。江城也。幽蔚而虎蹲者。忍岡也。其間皆王侯第宅。歷代名藍。櫛比綦布。未遑枚舉。傍流則有淺草寺。浦殿雁塔。危樓飛閣。覆壓於淺艸之鄉。崛起其後。有金龍阜。下臨清流。晴嵐夕輝。浮動於綠疏朱欄之上。其西有淺茅原。千壽驛。亦大觀也。其北有木母寺。其境

幽邃。過者或賦于詩。詠于歌曲。蓋名蹟也。寺屬隅田村。村交有予寺之莊圃若干畝。又構一通玄菴。兼爲儲侍之所。自乾至長。則無山。其間有獨秀者。筑波峯也。其東則膏腴分畦。園圃曳渠。有耕雨耕風之家。刈晴春月之戶。亦有鑿采逃名者。考槃于此。其南則四民雜居。巷陌万千。可一里許。至菅家聖廟。又可二里許。至海濱。四方泛覽之。足以助禪觀。於是結蓮社。招陶陸。樂亦至矣。其有過我者。皆公卿大夫。或一時名士也。雖門常累轂。壘跡未必爲之。磬折迎送。匪其志。則未必爲之下榻也。相對則清譚娓娓。政翁家風恬澹。不耻焉。田園歲計。只收一百餘石。而庖厨不乏。僧藉恆不減。七百指。同以法喜爲樂。予老而益壯者。樂其樂也。夫禪苑恢復者時也。時屬於天。風水秀麗者靈也。靈屬於地。英俊輻湊者道也。道屬於人。斯三者人有之。而吾獨無乎哉。若所有者。弗異於人。其所樂。盍同於人。唯吾之所樂者異。故不以其三者芥於胸也。辛未<sup>○元祿</sup>四年<sup>○</sup>春二月初七日。開山老人記。

千秋亭記

鐵牛和尚

牛峯老叟。素性愛泉石。壯年自負不羈之志。名山大川。無不歷涉。未幾爲知己者推出。主名藍。久之。有貫沃州之志。不果。丁卯秋。承恩歸隱于此山。發雲鶴出籠之思也。山高。可以振衣。流之遠。可以濯足。偶於方丈西。得餘地。欲設假山。一日潮信。老居士聞予



有意命近臣宮本氏來相之。以此人善布置有奪造化之巧。既而工竣群巒毓秀。一水旋藍。回辛。勝於羸嶺。攀雁齒於雲根。禪餘攜杖。偃僂于其上。則平原送青。遠水纒練。廻然出於物表。乃築臺曰達觀。其山斷處。則通以路。約卽到方丈之小徑也。於是捫蘿下磴。則岩路九折。或出或沒。下臨斷崖。有怪松虬蟠。奇石虎踞。其間有塔。出於樹抄。恍乎如望金山於維揚之上。自是石徑斜縈。徐々移步。既而有短石橋。入于孤嶼。曲池漾碧。平浦含春。豈無瀟湘之意耶。又假路于北岸。匍匐盤旋。兩腋汗下。偶得平坦之處。回望于此。則樹色陰森。禽聲下上。或訝是葛仙之家。而自迷樵徑乎。因搆小亭。以便安禪。縮萬里于咫尺。消千載于一瞬。加之夕陽素月。浮雲流水。謂之羽客之鄉。不亦宜哉。由是呼童掃苔。迎客酌茗。亦林野之樂事也。先是亭名未成。一日有客。謂曰。諸以千秋名之。何如。予曰。否。夫形者必滅。興者終廢。物與人僉然也。豈不聞南朝古宮。戰國英雄。居極晉楚之富。人壓劉項之氣。而今安在哉。彼之壯居。人物與今之所在。以較量其大小。則何異乎巨壑之一滴。大倉之一粒。邪。計此亭不越函丈。折蘆以爲席。編竹以爲榻。縱有神物護之。竹木之壽。終有限矣。況予與汝。鬢已皤矣。相娛幾時。客凄然曰。然物無不變。而變之中。有不變者存。所謂不變者何。曰。道也。故國無道。則咸陽終燼。人有道。則甘棠無伐。縱使亭之壽有限。而師之德。終不可窮也。想後之來者。或撫松竹曰。是師之所培。

植。或覽泉石。曰。亦師之所遊觀。此亭者。舊棲也。彼華者。遺愛也。於斯乎。不忍。則必有重修。而復舊觀者也。然則廢也。慕其德。興也。繼其志。豈非千秋之謂邪。況師者。方外之竺仙也。陰陽豈能局之哉。予乃笑而諾之。賴得雪峰法寂所書三大字。遂揭以爲扁。

弘福十二境

鐵牛和尚

隅田川 三門隔斷紅塵。永鎮留玉帶。

派經千里向江臯。蕩漾鴨頭帶雨高。隄柳送人連古渡。岸花逐棹照輕舸。鐘聲響處紅塵斷。暮色涵邊索練纜。寺住須崎松竹際。擬蝦又懶釣鯨鰲。

白鷺田門外千畦法服。邨前一局仙棊。

膏腴萬頃展袈裟。元是仰山山下畬。阡陌鑿渠分野水。綠黃垂穎賑農家。鐵牛畊罷閑眠穩。松廩供充法喜佳。屬玉群飛蛙畔晚。邨行幾誤認蘆花。

金龍阜前川一片風光。後巷萬家絃管。

天門躍後臥平蕪。懶見渴霓下飲湖。林沒晴嵐紺殿隱。風傳清磬晚鴉呼。花遮絃管樓臺陌。水寫瀟湘潮汐圖。待得冰蟾昇樹抄。幾疑頷下吐明珠。

白蛇井數間溫室藏雲。千尺寒泉照眼。

井底銜珠白帝兒。深藏神用在淪漪。鳴蛙誇鼈未曾許。換骨化龍應有期。石甃含秋苔



蘇淫玉器汲月轆轤遲。將施一滴霖天下。更待春雷起蟄時。

櫻雪庭接門千樹櫻花埋砌三春雪片。

漠々櫻花春盡朝。閑庭慵掃任飄飄。遊人笠重還疑溼。暖日玉堆又恐消。色裏解空存  
眼翳。目前無法尙心苗。休言拂面無寒意。悚殺一番應始饒。

宇賀木拂雲枝葉輪菌覆地春新繁茂。

占魁萬木挺雲端。翠引清飈捲碧瀾。靈種若非天女護。盤根焉得玉蚪蟠。千秋雨雪一  
株古。十畝蔭涼六月寒。何營鬱然枝葉茂。年々留子王成楨。

王子宮社日西鄰伐鼓賽時東里傳香。

咎乘白雲下大荒。鶯峯受囑鎮禪坊。威靈赴感滿川月。信使引薰藝鼎香。霧鎖綠疎粘  
畫壁。鶴旋華表刷玄裳。我來卜地憑神護。好祐兒孫奕代芳。

三友軒徑繞松梅並竹軒容天地兼人。

年老世疎得斷金。玉賓相對共無心。半雲茅結三間屋。微雨松彈一種琴。花夕宿梅神  
托夢。雪朝訊竹翠生音。清盟莫逆含幽趣。默座焚香豁素襟。

達觀臺物外無邊風月眼中不盡乾坤。

兀坐高臺空寸眸。併吞宇宙傲王侯。翠眉淡掃筑波曉。白髮長梳富士秋。都鎮金城千

里壯。水通銀漢大川流。重々法界分風月。孰若海中點一漚。

青氈隄門映三春艸色人行數星楊陰。

隄通蓮社繞隅川。時引淵明偶往還。玉勒馬誓垂柳渡。黃昏雨送釣魚船。烟中艸色曠  
牛放。沙上波光鷗鷺眠。數里萋々看不厭。牧童呼作舊青氈。

富士峰窓含西雪千秋山占東桑第一。

擁腰萬嶽兒孫秀。鎮座搏桑第一山。疆外天空抽玉筍。日邊雲繞近仙寰。三春南雁誤  
秋下。九夏西門映雪關。夜半任他人負去。老僧收入寸眸間。

千秋亭一榻乾坤不欠千秋日月無遺。

白雲假我半間居。數把黃茅葺有餘。波皺柳條撈碎月。風香松露滴新蕓。曉間烹茗掃  
松鬣。夜靜澗心聽木魚。好促千秋爲一樂。戲看一樂寄樵漁。

題假山

鐵牛和尚

別有乾坤在此間。等閑移得沃州山。斷崖疊石秋江骨。秀巘映窓暮雨鬢。運甃終成凌  
漢勢。寄生幸占臥雲閑。有時隱几夢支遁。野鶴一聲下碧灣。

春日游弘福寺舟中作

平 玄 中

扁舟朝下海門東。隔岸江山二國通。十里煙花柳隄遠。白雲點綴楚王宮。

霸都時代ノ遊園



——江戶黃蘗禪刹記

中秋泛舟暮過牛頭寺

蘭揖中流動。長風玉笛哀。青林圍寶刹。碧水繞香臺。仙梵秋潮響。華鐘晚日頽。鴈王標塔過。龍女捧珠來。槎泛天河近。桂飄月路開。朗吟牛渚夜。清興爲誰催。

壬午○元祿十年秋。同伯鄰泛舟東川。攀桂花于牛頭寺。

畫舫過垂虹。長歌沂郭東。停橈雙樹下。洗盞亂流中。竹渡寒烟綠。花川落日紅。醉來時折桂。疑是到蟾宮。

又日暮陰雲四合。

畫艇中流動。飛烟送夕曛。銀橋誰問月。玉管不披雲。西吹飄歌扇。東波濺舞裙。徒將千里夜。定惜九秋分。

——白石先生餘稿

祇伯玉祇園正卿字伯玉一字斌。○下略。

和白石中秋泛舟過牛頭寺

牛渚乘秋過。龍宮向晚開。地平平楚盡。天入大江來。瑞塔隨潮涌。珠林逐岸廻。乾坤到銀界。雲霧接花臺。波動金風落。夜涼鏡月催。豈聞多賦詠。難比謝公才。

和白石中秋泛舟牛渚歌

月沈碧水涵澄輝。秋拂青空雲物微。星漢槎凌雙岸落。月宮桂吐滿輪飛。水綃堪瞰鮫人室。玉佩欲飄仙女衣。娛樂渾疑天上賞。簫歌未可醉中過。

——停雲集

遊牛頭寺

門外長堤墨水流。江東寶樹倚牛頭。金龍開閣誰家宴。玉女凌波何處遊。藏壑舟搖潮岸繫。忘機鳥下晚洲浮。到來心地應空濶。那更風烟起客愁。

——南郭先生文集

梅雨中陪相良侯西岡君遊弘福寺。與子亮君脩分韻得樓字。

聯翩五馬上牛頭。瀟洒禪林墨水洲。寶殿梁高看乳燕。紺園樹靜聽鳴鳩。上方白日陰雲散。初地清風積雨收。此處追隨堪發興。晚來坐欲賦登樓。

——春臺先生紫芝園後稿

遊弘福寺

木犀や六尺四人唐めかず

——五元集

〔附記〕延寶中ノ遊觀參詣所

江戸雀ハ、武江年表ニ延寶五年板行ト有リ。書中江戸ニ於ケル重ナル遊觀參詣所ヲ載スルコト、左ノ如シ。

關都時代ノ遊園

附記  
延寶中ノ  
遊觀參詣  
所



永田山山王權現

略。上 第一には、上七社の内二之宮の權現、本地藥師如來、東方淨瑠璃世界の教主也、二六の大願をかなへ給ひて、衆病悉除の別意を洩さず、參詣の輩をすくひ給ふ。第二には、中の七社の内きびの宮、本地は則聖觀音なり。七難三毒の春の霞は、十九說法の風にきえ、三十三身の秋の月は、五濁の水に影きよやかなり。第三には、下七社のうち王子之宮、本地は是文殊大士也。三世覺母の智劍は、三障四魔の軍を破、獨歩無爲の妙用は、四徳三昧の光をほどこしたまふ。略。中 金殿玉樓天にかゞやき、畫棟朱簾地に映せり。略。下

彌宜町淨瑠璃歌舞妓

略。上 御當地御繁昌に付て粗淨瑠璃太夫あまたあり。大きつま伊勢大椽肥前椽兄弟丹波椽土佐少椽あどゞてあり。又せつきやうには石見椽あり。芝居にきらをつくしてけつかうせり。草木形有のつくり物、金襴のは金物の光目をおどろかす事共なり。

一、歌舞妓。略。中 此江戸にしては中村勘三郎根元なり。今は市村竹之丞と二しはゐなり。また木挽町にも二しはい、舞臺の軒端に玉をつらね、芝居の砂に珊

瑚を敷かとうたがはる。しらべ合する絲竹のこえうらゝかに、むめの香をなして、鶯の羽かせにも亂れぬべし。歌うたひかなてるさま、紅葉をかさすせかいは、天津おとめの雲の通路にたもとをかへせし袖ふる山のむかしも、よそにはあらしと思はるゝ。略。下

三俣

略。上 いつにまさりて望月の三五の暮の船遊び、ことに勝れてゆゝしけれ。たつときもいやしきも、袖をつらね裳をそめ、おもひゝゝに出船のうきにうきたる有様を、かの金岡も筆を捨、ゑにうつすともかきがたし。略。下

鐵炮津西本願寺

略。上 前には海つらまんゝ見おくり、つくば山に、安房かづさ、伊豆の大島一目に見やり、右手にふじの山をかゝへ、さながら庭にうつしをき、一詠句吟のたねとせり。略。下

芝三縁山増上寺

略。上 今に至ていやましに繁昌して、一天四海にかくれなく、諸國より寄あつまる所化おほければ、寮をつくりて立つたへ、本堂の右に御魂屋あり。その美



麗なる事、金銀を以てのべ付たり。七寶壯嚴も、かくやらんと思はる。○下  
芝日比谷神明

略○上 形のことく再興をいとなみ、宮領御寄附ありける。此故にや社人等安堵の眉をひらき、やうく神前にきはひ、灯明のひかりを和光の月になぞらへ、利物の花ふさ匂ひをほどこしたまふ。○下

愛宕山

略○上 東都江府の地に勸請有、いよく其徳なかくして、參詣の人日々にたえず。○下

澁谷金王櫻

略○上 櫻は事の外老木にて、枝まはりに花の數すくなし。○下

芝大佛、閻魔堂

一、歸命山五體寺は、木食但唱の建立也。○下

一、大佛の左の方に閻魔堂あり。竝地藏菩薩竝まします。垂跡の方便は水と波とのことくにて、ちかひは同じ御たすけにや、有難尊像也。○下  
水月觀音堂

略○上 信心善仰の人の前には、一明の月の萬水にやどるにひとし。○下

荏原郡千束郷池上本門寺

一、そもく此長榮山本門寺は、祖師日蓮聖人の開基なり。○下

目黒不動

略○上 誠に明王の利劍のまへには、惡魔を他方に拂のけ、四咒妙句のはくの繩には、その善惡の二方により、信心のともからは、福壽を無障にさつけ給ふ。渴仰の心なきものには、忽其身に罪をあたへ給ふ。まことにあらたな尊像なり。

氷川大明神坂○赤

略○上 雨を下して川をなし、萬民をたすけたまふゆへに、すなはち神とあかめ、氷川の明神と名づく。○中 今にいたりて神徳おはしましてみな人あがめ奉る。○下

右衛門さくら

一、ゑもんさくらは、そのかみ柏木のゑもんの督、ちとあやなきふるまひありとて、すこしのうち此所になかされたまふ。そのときつれくあまりにや、



此さくらをうへ給ふ。略。下

穴八幡宮

略。上 御神託にも、人の國より我國、他人より我が人として、あながちに本朝をめぐみ、ことには氏人をあはれませ給ふ事、いづれの神よりすぐれたり。略。下

目白不動

略。上 寔にあらたの佛體なれば、人み多諸願を成就すとなり。

白山權現

略。上 白山權現は、神代のいにしへは菊理媛の尊と申侍きとなり。今此地に勸請せし事は、元和元年の事なり。略。下

傳通院

略。上 本尊は惠心僧都の御作座像の彌陀なり。六八の誓願はあまねく苦海の衆生を導き給ふ。四八金色の妙相は、十方に光を放てもろくのやみぢをかぐやかし給ふ。略。下

神田明神

略。上 御當家に至て、隔年の御神事、目をおどろかすばかりなり。

富士權現

略。上 此所にちいさき山あり、さながら駿河の富士にひとしきかたちにして、上に大木生たり。是に一つのふしぎあり、あるとき六月朔日の事なりしに、雪しらたえにふりて、此大木時ならぬ花の枝と見へしが、所の者ふしぎのつげありて、則富士權現をくわんじやうして、本郷の社を爰にうつし、それより此かた六月朔日にして、諸人は是に詣ふて駿河富士のおもひをなしたてまつる。略。下

湯島天神

略。上 社領をよせてあがめ奉りしより以來、やうやく繁昌して、神前の庭のうり物は、山市晴亂とおもはる。

東叡山

略。上 江城の鬼門を守、惡事災難を拂ふ、鎮護國家の靈地なり。天台四明の法燈をかゝげ、佛乘三觀の覺月をあふぐ。殊更東照權現様御宮、大猷院様御魂屋、寶珠院様御魂屋、寔に其きらをつくす事、金銀珠玉をちりばめて、善つくし美つくしたり。凡寂光の淨土もかくやとこそ思はる。略。下



上野花見略○

不忍池

略○上 上野はひえの御嶽に似て、名におふ湖水の景氣、さながら爰に見るがごとし。

谷中感應寺

略○上 人立願の事あるに、草履一足を持って参り、御前にかけて置て、おもふねかひを祈るに、諸願成就する、鐘のしもくに隨て音を出し、谷のひゞきに應ずるがごとし。略○下

淺草寺觀音堂

略○上 一たひ参詣のともからには、福壽海無量の利生をかふむる事、鏡に影うつるがごとし。略○下

姥が池

略○上 ゑきれい、おこり、いもはしかのはやるときは、あま酒を作りて竹の筒に入、木の枝にかけて是を祈れば、たちまち平愈するとかや。

駒形堂

略○上 爰に信力を催す人は、此川においてこりを取て、淺草へ参るとなり。略○下

金龍山侍乳山

一、此山を金龍山といふ事、淺草寺の山號なり。爰の名たるは、此寺の鎮守として、上に聖天宮を安置すると見へたり。略○下

吉原傾城町略○

總泉寺、妙龜山

一、當寺は、是學宗和尚の開基として、正法眼藏の妙理をしめし、實相無相の心印をひらく、向上の一路には、差相實有の草をはらひ、言下の一喝には、靈學執解の塵を飛す、公案の床のまへには、一千一百の則をかさねて、以心傳心をまもり、座禪のふすまのもとには、朝三暮四のたすけを待て、文字言句をはなれたり。寺内に千葉介石塔并に軍謀團有。略○下

一、妙龜山、是は角田川にして、身まかりし梅若丸の母あまになりて住し寺なり。略○下

隅田川

一、此川は、むさしと下總のさかひにありて、下總の名所なり。略○下







最大の梵宇として結構備まり。春時の櫻花爛熳として頗る地勢洛の御室よ髣髴なり。武江神寺録云、元祿十丁丑相馬彈正少弼命せらるる再修造なし給ふとあり。此地元御藥園なりしを後白山よりうつされ、其跡へ當寺を御建立ありしといへり。求涼亭云く、當寺ハ京の清水寺を摸さる、故、前の町を音羽となづけ、又青柳と櫻木町など云つけられ、又音羽町九丁あるも、京よ一條より九條までの名あるよもつとをまうけし堂の本堂ハ今の舞臺。當寺よ桂昌一位尼公御遺物を收らる。今猶傳へて、開帳の頃諸人よ拜せしむ。金銀をちりもめ、其結構言葉よのへ盡しかし。

— 江戸名所圖會

護國寺記

十千亭○萬屋助二郎

御城のいぬるにあたりて神齡山護國寺と申御寺あり。是れは元祿の頃、うへの御母君にて、三の丸○本莊氏桂昌院と聞えさせしか、かゝる御しうとくのかきりなう世にひかりまさらせたまふて、のちにぞ一位になんならせたまひける。このお方ははやうたておはしける御願にて、つひにこの寺をたてさせたまふなりけり。○中略さても大塚のさと方八町なる山たかう木草おひ繁りたるを、谷をうつめ、やまをたひらかにして、今なんかゝるたふとき伽藍とはなりけり。この地もとは御藥の園にてありけるが、御堂つくらせ給ふによりて、かの園は白金といへる方へ移されにけり。先山のふもとに仁王門あり。護國寺といふかくは、筑紫

高良山の僧正におほせてかゝせ給ひけり。此あたり大きある櫻木をうゑさせ給ふて、石坂をとゆほひかに、そのかたはら岩つゝじいとおほし。此坂もとに青銅もてつくりたるわたりむさかはかりなる蓮の葉の盤、右と左にふたところあり。常に淨水をたゝへしは、こゝにまうつる人の手をかいすましなためや。あつまやめくものゝいかめしうしたるそのうへをおほへり。みきのかたにも坂あり。これは老たるものおさなきものゝたはやすくのぼるへく、これかりやうにしおかせ給ひぬるも、くまき御恵みのかばかりも御心さしのわりなさや。山のたゝすまひ、木たちものふりて、松のみとりも色ことに、紅葉櫻ましりてたてり。これをやゝのほるに、右の方は松のあみきたかうつゝきて、櫻はその下にならひて、おのつから花の木もさらにすくれてにほひふかくなるをえらはせ給ひつるとか。鐘樓はその中に石をたゝみあげて、あかうぬりたるも、木々の色々によはへて、げに春秋のあしたゆふへにたゝなぐぬとは、かゝる所やと見えたり。ひたりのかたはにしへひろく、稻荷の神のやしる神くら殿のほとり、大木の櫻の世に匂ひいふはかりなきあり。この頃世の中には、あ品の品さだめなどする人は、こゝの一木と御堂の東の隅なる老木の一もとをかほれる花の